
薔薇のマリア Ver4
hysteric youth
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
Ver4
角川スニーカー文庫


A BRAVE HEART OF
RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
Ver4



真・鳥人ROCK



竜殺しリュー

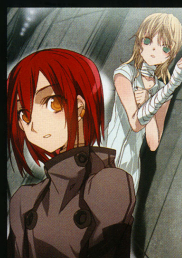
A BRAVE HEART OF RED ROSE

Version4

hysteric youth



フテクサレデイ



ラストサマー



ELDEN☆SWEET☆ANGELS


Here is my place to stay……

薔薇のマリア Ver4

hysteric youth

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver4

−hysteric youth−

First published 2008 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver4

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE
Ver4

MAIN CHARACTERS



Tomatokun
トマトクン

クランZOOの園長（マスター）。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の《侵入者（クラッカー）》。



Safinia
サフィニア

ZOO所属の魔術士。



Katari
カタリ

ZOOのムードメーカー。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

ZOO所属の医術士。



LuLu
リュリュ

謎の美少女。



Ryu
リュー

アンダーグラウンドの馬鹿。

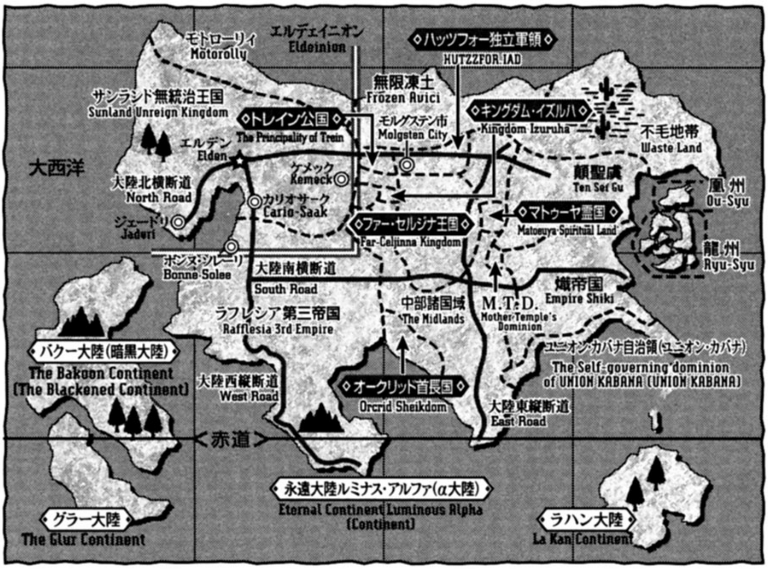


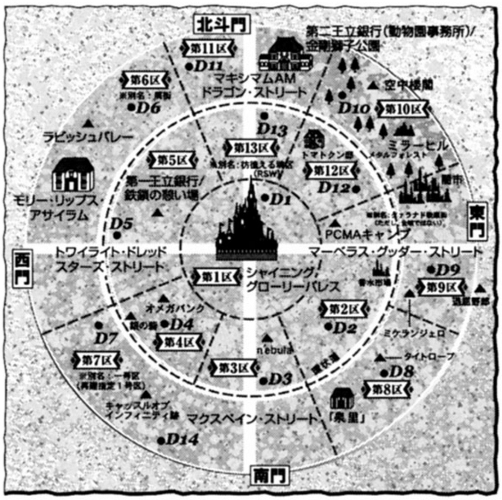
Pimpernel
ピンパーネル

ZOO所属の元暗殺者。

and etc.

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom

サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

illustration：*BUNBUN*
design work：*design CREST*

僕は砂すな粒つぶだ。

とるにたらない一粒の砂でしかない。

風に吹ふかれて、僕は飛ばされる。

僕はどこへ行くのだろう。

ここはついにたどりついた安住の地なのか。

疑うたぐり深い僕は不平顔をうつむけてあきらめたふりをした。

本当は前を向きたかった。

手をさしのべてくれたのはきみたちだった。

僕は砂粒でしかないけれど、風に逆らって自分の力で転がりだした。

吹き飛ばされそうになりながら、歩きだした。

僕はどこへ行くのだろう。

答えなんか知らない。

ただきみたちの背中を追って歩いてゆく。

どこまでも歩いてゆく。

hysteric youth
ヒステリック・ユース

フテクサレディ

　お父さん、お母さん。

　もしかしたら、もうすぐ会えてしまうかもしれません。

　何しろ、大変なことになっちゃってます。

　もちろん、遅おくればせながらあとを追うことにしたとか、そんな親不孝を働こうとしているわけじゃ決してなくて、そもそも自分が望んだことじゃまったくないし、てゆうか、なんでこんなことになっちゃってるわけ？

　身体からだの半分以上が魚成分で出来ていると思われるアッパラパーに借りた、ちなみに返へん却きやくする気はさらさらないＥＭＵ印の暗視鏡ＩＶＳ５２８００はかなり高性能だ。これだけ物の輪りん郭かくがハッキリクッキリしていて、おまけに着色補正までされていると、日の光の下、肉眼で見ているのとさして変わらない、と言ったら少し大おお袈げ裟さかもしれないが、とにかく視覚の面で不安を覚えることはない。おかげで本当によく見える。見えて、見えすぎて、困るくらいだ。

「腐ふっ腐っ腐っ腐っー」

　血液の代わりに魚の腐敗汁じるが血管を流れているに違ちがいない腐れ魚超最低ＳＵＣＫ野や郎ろうが、二本の変形斧おのイノイチとロノニーをかっちんかちんと打ちあわせた。

「ええで。ええやないか。これでこそ、これでこそや。まさしく、バチコーンっちゅうかんじや。おもろぉなってきよったのぉ」

「……や、まったく、これっぽっちもおもしろくなんかないから。てゆうか、どっからどう見てもやばいし、だいたいバチコーンって何だよ。ものすごく意味不明なんだけど」

「しょうねぇ」

　どっからどう見ても十歳か十一歳、それこそやばいくらい可か憐れんな絶世の美少女なのに、じつは二十三歳のユリカが同意してくれて、一いつ瞬しゆん、非常に嬉うれしかったのだが、そこですか。

「ばちこーんって何かしら。ばちこーん。ばちこーん。どこかで聞いたことがあるような、ないような」

「バッチコイじゃないか」

　しかも、広げちゃう？　よりにもよって、きみが？　みんなで一いつ致ち団だん結けつしてこの危機をなんとか切り抜ぬけようとか、そんなふうに呼びかけたり、士気を高めさせるっていうか、こう、リーダーシップをとって、いや、そもそもクランＺＯＯの園長マスターで、正しよう真しん正しよう銘めいリーダーなわけだから、そんなのあたりまえなんだけど、そういう立場にあるきみが、バチコーンに食いついてどうするの？　そうじゃないよね？　この場合やらなきゃならないことは他ほかにあるよね？

「うむ。やっぱり、バッチコイだろう。バッチコイなら、俺もなんとなく聞いたことがあるような気がするからな」

　全員暗視鏡をつけているから、視線の先は今ひとつ定かではないのだが、園長マスターに顔を向けられたので、同意を求められたのだと判断したのだろう。きれいな銀色の髪かみの持ち主で魔ま術じゆつ士しのサフィニアが、うなずくというよりも振しん動どうさせるように首を何度も縦に振ふった。

「……は、はい……わ、わたしも……たぶん……聞いたことが……ある、ような……」

「やっぱりか」

「……ええ……あの……どこかで……たぶん……」

　絶対、嘘うそだ。サフィニアは偽いつわりの証言をしている。でも、まあ、相手が相手だ。サフィニアは園長マスターを憎にくからず思っているらしいので、やむをえないだろう。ただ、あからさまに見え見えなのに、サフィニア自身はどうもそのことを自覚していないようで、園長マスターも園長マスターでそうとうなニブチンだから、この二人を見ていると歯がゆいというか、じれったいというか、もどかしいというか、ある意味、ちょっとおもしろいというか。魚野郎にはそうした情じよう緒ちよ的なものを解する能力なんてまったく備わっていないのかもしれないが。魚だし。

「ちゃうがな。正真正銘バチコーンや。バチコーンちゅうのはや

な、まあ、なんちゅうか、そのう、言葉ではちぃっとばかし説明しづらいんやけども」

「しなくていいから。てゆうか、しないで。絶対するな。禁止」

「なんでやねん。ええやろ。説明試みるくらい。人生何事もチャレンジやで」

「その挑ちよう戦せん者しや魂だましいは別のとこで発揮してよ！　もっと意味のある分野で！」

「アホダラァ！　意味があるとかないとかな、そんなんで決めとったらアレやろ！」

「何だよ！」

「なんちゅうか、あるやろ、ほれ、アレやアレ、せやから──」

「きマス」

　元アッサシンの声は夜の砂さ漠ばくに吹ふく風のように静かで乾かわいていた。なんでそんなに落ちついてられるのかな。でも、頼たのもしいことは確かだ。僕なんか、いざとなったらどうせたいしたことはできないくせに、アンポンタンなことをぬかすカタリに突つっかかって、それで内心の焦あせりや苛いら立だちや恐きよう怖ふをごまかそうとして、ごまかしきれなくて。以前、アンダーグラウンドＤ１、閉へい鎖さ魔宮で赤の男だん爵しやくをぶっ倒たおして手に入れた細身の剣けん、偽にせ劫ごう火かを握にぎる手はみっともないほどぶるぶる震ふるえている。武者震いだ、なんて自分に言い聞かせようとしても、とうてい納なつ得とくできなくてみじめな気分になるだけだ。とはいえ、しょうがない。状じよう況きようが状況だ。僕が特別臆おく病びようなわけじゃない。みんながおかしいんだ。だって、そう思わない？　思うよね？

　アンダーグラウンドＤ５メリクル第二迷めい宮きゆうは、大半の侵クラ入ツ者カーにとって、わりと気軽に、お手軽に稼かせげる場所だ。この迷宮に巣くう身の丈たけ一・二メーテルほどの羽が腕うでみたいに発達している鶏にわとりといった姿のメリクルは、少数あるいは一匹ぴきというか一羽というか一頭というか、ともかく単独で行動することも多いので、初ニユ心ー者ビーの侵クラ入ツ者カーでも力任せに叩たたき殺してしまえる。光に過か剰じよう反応

して凶きよう暴ぼう化かするという性質にさえ気をつければ、厄やつ介かいな異界フリー生物クスではない。

　もっとも、冒おかす危険が少なければ、たいてい報むくいも少ないものだし、がっぽり儲もうけたいのなら、余よ所そへ行ったほうがいいだろう。いろいろとこみ入った事情があってサンランド無統治王国に逃にげてきた者や、人生の大逆転を狙ねらって一発当てようとその首都エルデンに集まってきた血気盛さかんで無む謀ぼうな野心家や、食いつめ者のなれの果てや、そうした者たちの末まつ裔えい、侵クラ入ツ者カーといえばだいたいそんな連中だ。実入りが悪くても、安全、確実に稼げればいい、みたいな考え方は一いつ般ぱん的じゃない。当然、落とし穴は至る所にあるし、油断すれば鶏についばまれまくった無残な屍しかばねをさらす羽目になりかねないが、そうはいってもやはりここは経験の浅い侵クラ入ツ者カーたちの練習場、あるいは腕に自信がない者が今日明日の飯代を確保するために鶏にわとりを狩かるアンダーグラウンドの暗くら闇やみ鶏牧場だ。

　そ、こ、が、盲もう点てんなんや──というのがカタリの主張だった。半魚人曰いわく、メリクルには上位種っちゅうのんがおってな。こいつらがまた結構なお宝を持っとんのや。もともと金目のモン集めて身につけるっちゅう習性がメリクルにはありよるからな。上位種ともなれば、魔導王時代の秘宝を隠かくし持っとったり、さりげなあく使つことるやつもたまにおる。それをわしらがいただいて、頂ちよう戴だいして、ゲェェェットッ！　するっちゅう寸法や！　どや……！

　じつは、マリアローズも以前、メリクルの上位種には出くわしたことがある。

　それゆえに、上位種が間ま違ちがいなく存在するということは知っていた。

　知ってはいたが、まさか、ねえ……？

　こんなにたくさんいるなんて。

　メリクル第二迷宮はその名のとおり石造りの迷路で、マリアローズは今まで二層目までしか降りたことがなかったが、その下に広大な三層目があって、そこが最下層らしい。

本日、我らが園長マスター率いるクランＺＯＯの総勢六名は、脳ミソ腐ふ乱らん半魚人カタリの腐くさった「頭より身体からだで覚えた」（本人じゃなくて魚談）という信用できるのかできないのか定かではない道案内で、メリクルどもを蹴け散ちらしつつ、その三層目に足を踏ふみ入れた。

俗ぞくに、Ｆ３、と呼ばれる三層目は二層目までとは様子が違っていた。岩がん盤ばんを削けずったり、石のブロックを積みあげたりして造られている点は同じだが、かなり広くて見み栄ばえのいい通路から細い通路が無数にのびていて、その枝道の中から正しい道を選ぶと、また広い通路に出て、という具合に、迷路というよりも、本当の意味での迷宮、宮きゆう殿でんのようで、何を隠そうこれがメリクル迷宮っちゅう名の由来なんやで、と得意げに解説してみせたカタリに思わず感心してしまった自分に腹が立ち、なんだか無む性しように悔くやしくてチッと舌打ちをした。その直後だった。

広い通路の前方からやつらは押しよせてきた。

とてつもない数だった。

どいつもこいつもやや古めかしい揃そろいの金属鎧よろいと槍やりと盾たてで完全武装していて、その体格は明らかに普ふ通つうのメリクルのそれではなかった。たぶん、小さいやつでも一・六メーテルくらい、大きいやつだと一・八メーテルくらいは余よ裕ゆうであった。さらに、その大きいやつよりも一回り以上大きい、スーパーメリクル的なやつも二、三、四匹、いや、四頭というべきか、いずれにしても四羽とは決して言えまい、少なくともそれくらいは交じっていた。

控ひかえめに言っても、彼らはそうとう組織だったメリクルの部隊だった。印象としては、メリクル軍団と表現してもいいくらいだった。そのメリクル軍団が、スーパーメリクル的なやつらの「ヴゲデエェェェェェェェェ」という号令一下、マリアローズたちの約十五メーテル手前でぴたっと静止して、それから間もなくだった。今度は後方から足音が迫せまってきた。振ふり返ると、こちらは普通のメリクルの、ただし、途と方ほうもない大群がひたひたと近づいてきていた。逃げ道はすでに塞ふさがれようとしていた。すぐにすっかり塞がれてしまった。

それなのに、ＺＯＯの面々ときたら、焦るでもなく、慌あわてる

でもなく、それぞれ悠ゆう然ぜんと身構えて、余よ裕ゆう綽しゃくしゃくみたいなかんじで、くだらないことをくっちゃべって、まるであのメリクル軍団とメリクル大群を迎むかえ撃うとうとしているかのようで、あのう、一つだけ訊きいていいかな？　ひょっとしてきみたちってば、みんなちょっと、じゃなくてかなり、ものすっごく脳が膿うんでない？　それどころか、頭の中すっからかんなんじゃない……？

　だって、ピンパーネルがあの嫌いや味みなほどめちゃくちゃ落ち着きはらった声で「きマス」とか言ったとおり、もうきちゃうんだよ？　てゆうか、きてるよ？

　五列横隊か、六列か、もっとか、若じゃっ干かんばらついてはいるものの、それでもやっぱり威い圧あつ感かんたっぷりの隊列を組み、盾で身を守りながら槍を前方に突きだして、メリクルの上位種たちがこちらめがけて突とつ進しんしてくる。その中にはあのスーパーメリクル的なやつらもいる。あんなのいったいどうするわけ？　どうするもこうするも、どうしようもなくない？

「寒磁罪母剎ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

　上古高ハイロメ位語オンだ。呪じゅ文もん。魔ま術じゅつだ。銀糸のようなサフィニアの長い髪かみが風ならぬものになびいた。今は暗視鏡をかけているから見えないが、その奥で翡ひ翠すい色の瞳ひとみが不気味な輝かがやきを宿しているに違いない。サフィニアの要素魔術、縛ばく氷ひよう獄ごくは、上位種たちの最前列に炸さく裂れつした。水霊Ｈｙｄと時霊Ｘｅｏの力によって、金属鎧で身をかためた上位種たちがみるみるうちに白いものに覆おおわれてゆく。霜しもだ。寒い。すさまじい冷気だ。大量の水蒸気が噴ふきあがって、瞬しゅん間かん、視界がゼロに近くなった。上位種たちが転てん倒とうする音がした。けたたましい音は連れん鎖さした。マリアローズは息をのんだ。あれは。何だ。でかい。そうか。スーパーメリクル的なやつらか。四頭のスーパーメリクル的なやつらが、折り重なるように倒たおれた最前列の上位種たちを飛び越こえ、水蒸気の幕を突破して躍おどり出てきた。ど、ど、ど、どうしよう。

「マリアはサフィニアを……！」

　園長マスターに言われて、あ、そっか、と思い、右斜ななめ後ろ

のサフィニアをふたたび見た。サフィニアは杖つえを両手で握にぎりしめて、精神を集中させているようだ。次の魔術を準備しているのか。そうに違いない。魔術のための特殊なチヤネ精神集中リングの間は、サフィニアほどの魔術士でも無防備になる。守らないと。せめて、それくらいやらないと。マリアローズはあたりを見まわした。なんだかなあ、と自分に呆あきれた。やることがいちいちスローだ。だって、他ほかの皆みなはもうスーパーメリクル的なやつらを迎え撃つために前へ出ている。園長マスターはもちろん、ピンパーネルにカタリ、それからユリカまで。スーパーメリクル的なやつら、もうめんどくさいので、超ちようメリクルと呼ぶことにするが、そいつらが四頭。こちらも四人。数は同数だ。

「ニィィンゲンヨォォ！　俺ハァァ！　ボンギディダ・モォォルドゴニィィィァィ！」

「我ガ名ハァァ……！　ガァンジグガ・ゲェェェァオゥル
ギィィィィエィィィ！」

「俺ハ、ジャハガラァ・エェェァァヴゥゲェエァァゥ
ニィィィエエィィ……！」

「私ハァァ！　アルゥノォォゥドォォ・アァァァォォント
ニァァァエエエィィィ……！」

　超メリクルたちは、その堂々たる巨きよ軀くに見あった得物を手に、なんと共通語で名乗りを上げたが、マリアローズは驚おどろかなかった。メリクルの上位種が人間の言葉を操あやつれることは、一応、知っていたからだ。

「俺は──」

　園長マスターが外がい套とうをはためかせて、中央右のゲオルギー（人間風表記）めがけて突つっこんでいった。ゲオルギーは両手持ちの斧おのをこれ見よがしに振りあげたりせず、鋭するどく振りまわそうとしていた。柄えの握り方も右手と左手の間かん隔かくが広めで、コンパクトな振りで矢や継つぎ早ばやに連続攻こう撃げきを浴びせて相手を圧倒しようという意図がありありと見てとれた。ゲオルギーは馬ば鹿かじゃない。頭が回る。厄やつ介かいな敵だ。

　ただ、ゲオルギーにとっては不運なことに、園長マスターが背中

から抜ぬき放った琥こ珀はく色いろの剣けん身しん波打つ大剣は、単なる両手持ちの大きな剣ではなかった。一目でそれとわかる、大業わざ物もの以上の真に刃やいばたる稀け有うな剣だった。

　それよりも何よりも、園長マスター自身が恐おそれを知らぬ超絶した剣士だった。

「トマトクンだ……！」

　ものすごい踏ふみこみだった。

　ＺＯＯの園長マスタートマトクンは、最後の一歩でおそらく四メーテルくらいを一気につめて、ゲオルギーを袈け裟さ懸がけに斬きった。ゲオルギーとしても、そのタイミングは予想外だったのだろう。振りまわしかけていた両手斧が止まらなかった。もしかしたら、斬られたことに気づかないまま両手斧を振るおうとしたのかもしれないが、真っ二つにされた身体からだでそんな激しい運動をするものじゃない。残念ながら、両手斧はゲオルギーが望んでいたであろう軌き道どうを描えがかず、トマトクンにはかすりもしなかった。ゲオルギーは二つに分断されて石の床ゆかに崩くずれ落ちた。

　それとほとんど同時か、少し早かったかもしれない。

　中央左のエヴゲニー（同じく人間風表記）がバラバラに解体されてばらまかれた。目にもとまらぬ早業だった。そんなことをやってのけられるのはただ一人、ピンパーネルだけだ。戦乱に明け暮れるラハン大陸からやってきた砂色の元アッサシンが、雌し雄ゆう一対ついの短剣、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザで斬り裂さき、抉えぐって、剝はぎとり、突き砕くだいて、断たち斬り、斬り刻む光景は、たぶん芸術の域に達しているのではないかと思うのだが、あいにくあまりにも速すぎて、マリアローズの目ではしっかりとらえることができない。ピンパーネルは声を出して気合いを入れることもめったにないし、事が済んでしまうと死し骸がいにはだいたい目もくれないので、まるで無関係の第三者であるかのようだ。

　それとは正反対に、自分が、自分が、自分がとしつこくやかましく主張しないと気がすまないバカタレもいて。

「どっしゃあああ……！　いっくでえ！　我が流りゅう！　火竜獰猛虎共闘円舞乱ジ──んひっ」

　無む駄だに長たらしい、しかも思いつきに違ちがいない技わざの名前を叫さけんでいる間に、向かって左側から突進してきたアントニー（やっぱり人間風表記）が大上段から振ふりおろした大鉄てつ槌ついにドタマをかち割られかけ、慌あわてて横に転がってまんまと死に損そこねたオマヌケ半魚人は、猛もう省せいすべきだと思う。

　アントニーは左手一本で大鉄槌を持ちあげながら、右手で腰こしの鞘さやから長剣を抜いた。半魚人は大脂羽蟲ゴツキーのようにカサカサ床を這はって逃にげる。長剣が半魚人の背中をかすめた。半魚人はうっひゃーと騒さわぎながらさらに逃げる。意外と速い。というか、かなり速い。本当に大脂羽蟲ゴツキーみたいだ。気持ち悪い。最悪だ。アントニーも気味が悪かったのか、長剣を投げつけた。これはぎりぎり外れたが、いや、違う、わざとか。

　アントニーは半魚人の進路を予測して長剣を投じ、半魚人は、やばっ、というかんじで急停止した。

　その間にアントニーは大おお股またで距きょ離りを縮めて、両手持ちした大鉄槌を振りおろした。

「──カタリ……！」

　頭。

　頭だ。

　なんてことだ。

　立ちくらみがした。

　あれはダメだ。もう絶対ダメだ。きっと完全に砕け散った。あれでは蘇そ生せい式を受けても生き返ることはできないだろう。頭だからだ。頭はまずい。マリアローズは坊ぼう主ずではないから、くわしいことなんて知るはずがないが、とにかく死病に冒おかされて息絶えたり脳が大きく損傷して絶命した死体を前にすると、蘇生式は役立たずになる。損傷どころか、原形をとどめていないのではお話にならない。信じられなかった。

　こんなことが起こるなんて。

　なんてことだろう。

　頭を木こっ端ぱ微み塵じんにされたカタリの身体が、ふたたび動きだすなんて。

　カタリの背中のあたりが、もこっ、と盛りあがった。

　その瞬しゅん間かん、手品の種がわかって興ざめしたが、本当は内心、ほっとしたなんて口が裂けても言ったりしない。

　カタリはＤドラッグＳスターＴＹＱＮタイクンのおしゃれな装そう甲こう服型の鎧よろいの中にまるで亀かめみたいに頭を引っこめたまま、ガバッと起きあがってアントニーの両手首にイノイチとロノニーを叩たたきこんだ。あれでカタリの斧は魔導王時代の品物だ。斬れ味は鋭い。さらに、構造的に刀剣より大きな破は壊かい力を生みだしやすい斧という武器の特性もあってか、アントニーの籠こ手てはイノイチとロノニーの刃やいばを弾はじき返すことができなかった。アントニーは、ギエグオアァァァァァァ、とメリクルらしい悲鳴をあげながら大鉄槌を手放して飛びさがった。その両手首にはイノイチとロノニーが食いこんだままだ。じゃあ、カタリは？　手ぶらなのか？　そうじゃなかった。

「──きたきたきたァァッ！　まさぁに！　わしの狙ねらいどぉぉぉりやっ！」

　カタリは大鉄槌を両手で引っつかんだ。

　持ちあげることはできたが、よろめきかけた。

　着色補正される高級暗視鏡越ごしなのでわかる。カタリの顔が真っ赤になった。

「ふんぬううあああああああああああああああああああああ」

　火事場の馬ば鹿か力ぢからというやつか。カタリは大鉄槌をぶぉんぶぉんぶぉんぶぉん振りまわした。まあ、カタリが振りまわされているようにも見えなくはないが、とにかく半魚人と大鉄槌が一体となって回転していることは事実だった。そのままアントニーに猪ちよ突とつ猛もう進しんしてゆくのかと思いきや、違った。

「──あぁぁぁぁ我流ッ！　超意表突つきまくり大逆転撃げきィィィィィヤハァァッ……！」

　カタリは大鉄槌から手を放した。

大鉄槌は猛回転しながら飛んでいった。

アントニーはよけられなかった。

大鉄槌はアントニーの頭部を直撃した。

思いっきりひしゃげた兜かぶとの中身がどうなったかについては、あまり想像したくなかった。

カタリがふらふらしながらぶっ倒たおれたアントニーに駆かけよってイノイチとロノニーを回収し、おっしゃーと勝ち鬨どきをあげている間も、ユリカは鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術独自の武器、極クライ限マツクス九ナイ手ンポ棍ールを操あやつって向かって右のモルドゴニー（人間風表記）をどうにか足止めしていた。

両手に一本ずつ棘とげつきの戦槌を持ったモルドゴニーは、もしかしたら一番やりづらい相手かもしれない。非力なマリアローズではとても扱あつかえそうにないあの戦槌も、モルドゴニーにしてみれば棒きれみたいなものだろうし、それでいてほんのちょっとかすめただけで肉が弾はじけ骨が砕くだけてしまうこと請うけ合いだ。その威い力りよくを考えると、ユリカとしては、モルドゴニーが矢や継つぎ早ばやに繰くりだしてくる戦槌を防いだり弾いたりすることはできない。ひたすらかわすしかない。戦槌よりも極限九手棍のほうが長いが、体格差を加味すると、リーチの面で分があるのはやはりモルドゴニーだろう。速度、手数の面では小回りのきくユリカが有利だとしても、それだけで圧あつ倒とう的な不利を挽ばん回かいできるのか。これっぽっちも心配していなかったと言ったら嘘うそになるが、少なくともどこかの半魚人よりは一万倍くらい信しん頼らいしていた。その信頼を裏切るようなユリカではなかった。

それまで右へ左へ後ろへと飛び跳はねるようにしてモルドゴニーの戦槌をかわしていたユリカが、不意に足を止めて床ゆかを踏ふみしめた。

モルドゴニーはこの機会を逃のがさなかった。戦槌だ。二本の戦槌が左右からユリカに襲おそいかかっていった。それぞれ右上からと、左上から。だが、同時ではない。わずかかもしれないが、時間差がある。とはいえ、マリアローズの目にはほとんど一いつ緒しよに見えた。ユリカは右上から斜ななめに打ちおろされた戦槌と、左上から振りおろされた戦槌を棍こんの先せん端たんで突いた。弾いてしまった。そんなことは不可能だと思っていたのに、ユリカは見

事にやってのけた。しかも、それで終わりではなかった。

「──疾しっ……！」

　ユリカは両りよう腕うでを広げる恰かつ好こうになったモルドゴニーの懐ふところにすっと入りこみ、棍を突きだした。

「破は汰た汰汰汰汰汰……！」

　一撃目、二撃目で兜を弾き飛ばし、三撃目を鶏にわとりめいた顎あごに叩きこんで、がら空きになった喉のどを滅めつ多た突づきにした。モルドゴニーは最後の強きよう烈れつな一発で吹ふっ飛ばされ、何頭かの上位種たちを巻き添ぞえにした。サフィニアの縛氷獄の副産物として発生した水蒸気の煙えん幕まくは、もうほとんど消えていた。超メリクルたちに遅おくれて、上位種たちが殺さつ到とうしてこようとしていたが、その出で端ばなをトマトクンの大たい剣けんが挫くじいた。呆あつ気けにとられるしかない、斬ざん撃げきと呼ぶのはためらわれる回転斬ぎりだった。その一撃で二頭、いや、三頭の上位種を一度に叩っ斬ったトマトクンにつづいて、ピンパーネルが別の上位種を解体した。カタリは迫せまりくる上位種の盾たてに飛び蹴げりを食くらわせて押し返し、トマトクンを見た。トマトクンはカタリに視線を送ることはしなかった。それでいて、まるでその合図を受けとったかのように鋭するどく叫さけんで身をひるがえした。

「全員退ひけ……！」

　マリアローズはその声に押されるようにして振り返った。すぐに前へ向きなおって、こちらめがけて駆けてくるトマトクンに抗こう議ぎしようとした。

　だって、退け、とかって言われても、すっごい数のメリクルに道が塞ふさがれちゃってるんですけど。

　口を開く前に、サフィニアの呪じゅ文もんの詠えい唱しようが始まっていた。

「無花果地軸音楽東軸ＫｕｇｅＬｄ□真土本土久土過渡人示度ＺｅｔＥｎ□ＩＮＤａＮＭａＮＫａＮＬａＮＳｅＮ□ＣＬＡＳＨ拝真名焼尽光ＶＭＢＬ」

　なんとなくだが、要素魔ま術じゅつの呪文ではないような気がし

た。死者をのぞけば、α大陸で一、二を争うほど有名な魔術士、閃せん光こうの魔女マチルダは、ゆうに百年以上生きていると言われていて、白魔術と呼ばれる現代魔術の枠わくを遥はるかに超こえた超ちよう高等魔術をも生みだしてしまったらしい。サフィニアはその弟で子しだ。ひょっとして、その白魔術というやつか。

　サフィニアはメリクルの大群に身体からだを向けていた。

「□□Ｓｈｏｏｔｅｍ」

　銀色の髪かみの毛が強風にあおられたかのごとくひるがえった。

　水晶クリス様材タリンの杖つえ全体が発光して、暗視鏡越しのメリクル第だい二に迷めい宮きゆうＦ３が一いつ瞬しゆんで真っ白に染め抜ぬかれた。

　音は聞こえた。ブンッ、というような、空間全体が激しく、だが、短く震ふるえる轟ごう音おんだった。その結果、何がどうなったのか、正確なことは今のところわからない。きっとものすごいことになっているんだろうなと予想はつくけれど、何も見えやしない。

　マリアローズは立ちすくんでいた。

　僕はいったいどうすればいいんだろう。走るべきか。どっちに？　前？　後ろ？　それとも右？　左？　ギエエエ。キュエエエ。メリクルの声だ。硬かたいもの同士がふれあったり、ぶつかりあったり、何かが床の上をのたうちまわったりしているような音もする。

　そうか。光。メリクルの目は光に過か敏びんだ。上位種は兜かぶとの下に目を覆おおう器具をつけていたりもするようだが、そうではない普ふ通つうの、下位種のメリクルにとっては、あれだけすさまじい光量だと、ただひたすら苦痛で興奮なんかしている場合ではないのかもしれない。

　つまり、こういうことか。サフィニアが縛氷獄で前からくる上位種たちを足止めして、トマトクンたちがさらに時間稼かせぎをし、その間にサフィニアが二つ目の魔術を準備、これを発動させて後ろからくるメリクルどもを蹴け散ちらし、逃とう走そうする。

　あうんの呼吸というやつだ。

　ＺＯＯの面々は、打ちあわせもせずにそんなことをやってのけようとしている。

　ただし、勘かん違ちがいしてはいけない。

　その面々の中にふくまれない者が一人だけいる。

　どこに？

　ここに、だ。

　僕は何もしていない。

　何だろう。

　身体に力が入らない。

　うまく息を吸いこむことができなくて、胸がむかつくような、頭の後ろのほうが重いような、どうにも不快で、いやな気分だ。

「──マリア！　何をしている……！」

　あげくの果てに、トマトクンに腕を引っつかまれ、それでも走ることができなくて、しまいにはかつぎあげられた。そっか、暗視鏡を外せば、なんて場違いなことを考えて、外してみたら真っ暗で、何も見えなくて、もう一度装着して、トマトクンはマリアローズを肩かたにかついだままぐいぐい走って、当事者のはずなのに部外者みたいな、そんな立場にある自分っていったいどうなんだろう、何なんだろう。どうもこうも何も糞くそもない。この状態をそのまま表現すればいい。

　僕は荷物だ。

　まさしくお荷物だ。

　それ以下ではあるかもしれないけれど、それ以上では決してない。

　だけどさ、しょうがなくない？　僕なんか、もともと腕うで利ききとはとても言えない、せいぜい並みか、たぶん稼ぎも身体能力も技量も平均未満のしがない侵クラ入ツ者カーでしかなくて。トマトクンは炎フアイ模ヤーパ様ターンのド派手な鎧よろいを身につけて

いたりするし、どこか間の抜けたところはあるけれど、あの大剣の威い力りよくといったらとてつもないし、ピンパーネルの剣けん捌さばきは尋じん常じようじゃないし、サフィニアの魔術士としての力量は桁けた外はずれだし、ユリカはあの体格で鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術の使い手で、しかも腕のいい医術士でもあるし、あの半魚人でさえ、好不調の波はあれど、度胸満点のすぐれた戦士だ。

　違うんだ。あまりにも違いすぎる。

　本来、こうして僕が彼らと一いつ緒しよにアンダーグラウンドにいること自体、おかしい。



　いろいろあって、ＺＯＯに加盟して、彼らが自分のことを仲間扱あつかいしてくれていることはわかっているし、ありがたい、そう、心からありがたいと思っている。こんな僕を拾ってくれて本当にありがとう。戦力外のみそっかすを連れて歩くのは何かと大変だろう。いなくてもいいのにいるやつって、なんかこう、頭にくるよね。それだけならまだしも、こうやって世話を焼かせて。誰も何も

言わないけど、内心、舌打ちしたい気分だと思う。というか、状じよう況きようが状況だから、お小言はあとかな。

　だから、僕はせめてじっとしている。

　荷物は荷物らしく、動かないで、黙だまって運ばれないとね。

　それくらいしか、僕にはできないから。

　まあ、それってようするに何もしないってことなんだけど。

　何もしないことが唯ゆい一いつできることだなんて、おかしな話だよ。お笑い種ぐさってやつだ。

　まったく、馬ば鹿かげてる。

「もういいだろう」

　トマトクンはマリアローズを肩から下ろすと、杖にしがみついて呼吸を整えようとしているサフィニア、さほど疲つかれている様子はないユリカ、肩で息をしているくせにやたらと元気そうなカタリ、平然としているピンパーネルを順々に確かく認にんして、さて、と首をひねった。

「どうする。もう一度チャレンジするか」

「せやなあ」

　カタリが今きた道を振ふり返って、イノイチの柄つか頭がしらで後頭部を掻かいた。どれくらい逃にげてきたのだろう。階段を上ったことは覚えているので、ここはＦ２だ。それは間違いない。あの曲がり角。それから、その先の曲がり角。通路の幅はば。高さ。見覚えはあるが、正確な位置はわからない。一人で行動するときは、知らない場所では丁てい寧ねいに地図を作りながら進むし、道に迷うことはまずないのだが、カタリの案内に頼たよりきっていたせいでこのざまだ。飽あきずに懲こりずにサンランド無統治王国首都エルデンの地下に広がるアンダーグラウンドをうろつきまわり、そこに巣くう異界フリー生物クスどもを狩かって金目の物を強ごう奪だつしたり、隠かくされたお宝を探しあてたりして、一いつ攫かく千せん金きんを夢見ながらのその日暮らし、みじめだろうがいやしかろうが、おのれの道はおのれの力で切り開く侵クラ入ツ者カーとして、自分はこれでいいのか。堕だ落らくしたとは言えないか。

「もっかい行ってもええねんけど、なんか考えんと、同じことの繰くり返しになってまうやろな。なんやもうめんどうやし、今日はやめとこか」

「まだ一ダラーも稼いでないのに」

　言ってしまってから後こう悔かいした。いざというとき、何もできない自分にそんなことを言う権利はない。でも、途と中ちゆうでやめるわけにはゆかなかった。止まらなかった。

「だいたい、なんか考えんと、って何だよ。何っにも考えてなかったってこと？　やめてよ。そういうの。つきあわされるこっちの身にもなって欲しいね」

「いや、わしかて、あないな場所で、あんなふうにぎょうさん出てきよるとは思わんかったしやな」

「道知ってただろ？　きたことあるわけじゃないの？」

「もちろんあるで。稀少物レア・蒐集家ハンターの連中とな。そのときは大だい丈じよう夫ぶやってん。もっと奥に宮きゆう殿でんみたいなのんがあってな。そこに近づかんかったら平気やったし」

「へえ。近づいたんだ？」

「ま、まあな」

「そしたら平気じゃなかった？」

「死にはせえへんかったで。若じやつ干かんぎりぎり気味やったけども」

「きみたちがそういうことしたもんだから、メリクルだって警けい戒かいするようになったんじゃないの？　あいつらの上位種って、人間の言葉がわかるくらい賢かしこいわけだしさ」

「おおっ。もしかしたらそうかもしれんのう。考えもせえへんかったわ」

「なんで考えないんだよ。それくらいのこと。バカじゃないの？」

「知らんのかい、お前じぶん、あのな、太古の昔っから他人のこと

バカっちゅうやつがバカって相場が決まっとんのやで！」

「餓が鬼きみたいなこと言ってないで、少しは反省したら？　ああ、ごめん、反省なんて高等なこと、できっこないよね。きみは半分以上っていうかおそらく九割方魚だもんね」

「誰が魚や！　どこが魚やっちゅうねん、おお！」

「顔。見事なまでに魚だよ。それから、脳。どう考えても魚レベルでしょ。なんか魚に失礼な気もしなくはないけど」

「ボケェッ！　魚にも失礼かもしれへんけどわしにもごっつう失礼や！　──って、魚には失礼なことあらへん、わしに、わしだけにむっちゃ失礼や！」

「失礼かどうかなんてどうでもいいんだよ、そういうことじゃないだろ、なんでわかんないかな、だからきみは──」

「まあ、そのへんにしておけ」

　トマトクンがマリアローズとカタリの間に右みぎ腕うでをのばして割って入った。それを押しのけてまで言いあいをつづける気力はなかった。メリクル第二迷めい宮きゅうに皆みなを誘さそったのはカタリだし、落ち度はあると思う。いや、落ち度どころの騒さわぎではない。無計画で、無む謀ぼうで、無策の、無い無いづくしだ。マリアローズ以外のメンツの能力が高いから難局を打開できただけの話で、普ふ通つうの侵クラ入ツ者カーなら絶対に全ぜん滅めつしていた。カタリは糾きゅう弾だんされるべきだ。

　でも、カタリの脳が魚脳だということはとっくに知っているのに、言われるままにぼんやりとついていったマリアローズもどうかしている。これはアンダーグラウンドでは付き物の偶ぐう発はつ的で不運な事故ではない。ちゃんと注意していれば、さけられたはずの事故だ。余計なリスクは背負わない、自分の身は自分で守る、そんな最低限のことさえ今のマリアローズにはできていない、しようとしていないから、こんなことになったのだ。

「じゃあ、他ほかに意見がないなら、とりあえず帰るか」

　トマトクンが皆を見まわした。

　挙手したり、首を横に振ったりする者は誰もいなかった。

なんで？　マジ？　嘘うそでしょ？　信じられない。せっかくこんな場所まできたっていうのに、手ぶらで帰るなんて。

思わずため息をつきそうになって、なんとかこらえた。

所しよ詮せん、感覚が違ちがうということだ。マリアローズはちょっと前、本当にほんの少し前まで、ほとんど毎日アンダーグラウンドに潜もぐって稼かせぎ、食費や必要経費以外は貯金して、とにかく生きのびること、生活することに汲きゅう々きゅうとしていた。彼らは違う。カタリはまだ若くて半魚人のくせに、稀少物レア・蒐集家ハンターとして、侵クラ入ツ者カーとして、なかなか結構な成功を収めてきているようだ。実際、カタリが誇ほこらしげに見せてくれた「入手お宝帳」には、マリアローズが肝きもを潰つぶすような売ばい却きゃく額がさりげなく書き入れられていた。そんなカタリにしばしば力を貸している他の皆も、当然、それ相応の分け前を受けとっているから、マリアローズのようにがっつかなくても左ひだり団扇うちわで暮らせる身分だ。トマトクンなんか、どうやって手に入れたのか知らないが、でかくて立派な家まで持っている。住む世界が違うのだ。彼らにわかるはずがない。僕の気持ちなんて、どうせわからない。わからなくても仕方ない。わからない相手に何を言っても無む駄だだ。

「どうした」

トマトクンが唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせた。我知らず、トマトクンを見つめていたというよりも、とにかく背の高い男なので、見上げていたらしい。暗視鏡のおかげでわからないだろうが、きっと物問いたげに。あれ、それでいいの、みたいな顔つきで。

「……や、何でもないよ。べつに」

「そうか。それならいいんだが」

トマトクンはマリアローズに背を向けて歩きだした。カタリが鼻の下をこすりながらそれにつづいて、その後ろについたサフィニアはマリアローズをちらちら見た。ユリカに、どうかしたの、と声をかけられたので生返事をした。マリアローズはユリカのあとに従い、最さい後こう尾びはピンパーネルだった。α大陸の共通語をあまり上手に操あやつれないピンパーネルが何か話しかけてこようとしていることには気づいていたけれど、無視した。正直、少なくと

も今は誰とも口をききたくなかった。理由はたぶんいくつか、いや、いくつもある。たとえば、どうして僕は自分の意見をちゃんと言えなかったんだろう。これでもう終わりなんて冗じよう談だんじゃない、そう言えばよかったのに、なんで言えなかったんだろう。住む世界が違うことはもうはっきりしているのだから、蔑さげすまれようと、嫌きらわれようと、思ったことを言えばよかったのに、できなかった。すっきりしない。それに、僕はさっきの戦いで何もできなかった。ただ突つっ立っていただけで、役に立たなかった。それどころか、邪じや魔まだった。カタリの無計画ぶりが非難に値あたいするなら、僕のお荷物っぷりも咎とがめられるべきだ。その荷物をかついで運ぶ羽目になった園長マスターのトマトクンあたりが注意するべきだ。叱しつ責せきしなければならないはずだ。他の皆も怒おこったっていい。おそらく、腹の中では、どうなんだよ、あれ、ちょっとひどいんじゃないの、どうにかしてよ、みたいに思っているだろう。それならそう言ってくれればいい。黙だまっていられると、かえっていたたまれない。そもそも、僕はなんでこんなところにいるんだろう。場違いじゃないか。恥はじさらしだ。みじめだ。バカみたいだ。てゆうか、正しよう真しん正しよう銘めい、バカそのものだ。

「む」

　先頭のトマトクンが足を止めて、手て振ぶりで皆を制した。

　マリアローズも立ち止まり、それから愕がく然ぜんとした。ここはどこだろう。まだＦ２だ。それは間違いないが、Ｆ１まではあとどれくらいなのか。またぼんやりしていた。そうじゃなくて考え事をしていた、なんて言い訳は通用しない。自分が納なつ得とくできない。

　トマトクンが足音を忍しのばせてすぐ先の曲がり角まで歩いていった。角から半分だけ顔を出して、何かを確かく認にんしたらしい。少し後退して振り向いた。

「雑ざ魚こだが、数が多い。一気に片づけるぞ。サフィニアも一応魔術を準備しておけ。マリアは後方バツク支援アツプだ。いいな」

　サフィニアがローブのポケットから触しよく媒ばいか何かをとりだしてうなずき、カタリはイノイチとロノニーを抜ぬいて唇を舌先で舐なめ、ピンパーネルも雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんの柄つかに手をのばした。ユリカが何か言いたそうにマリアローズ

を見た。マリアローズは顔を背そむけた。

　トマトクンが無造作に角の向こうに飛びこんでいった。それにカタリとピンパーネルがつづいて、ユリカも走ってゆき、サフィニアは角の向こうが見える位置まで移動して杖つえを両手で握にぎりしめた。

　後方バツク支援アツプ。後方バツク支援アツプ、か。簡単だ。楽な仕事だ。サフィニアを護衛しつつ、前方の情勢をうかがいながら後ろを警けい戒かいする、と言えば聞こえはいいけれど、この状じよう況きようではすることがない。

　僕にぴったりだよ。本当に。これ以上ないくらい。

　僕は戦力外で、いなくてもよくて、ようするに、それって──僕がここにいなくてもいいってことは、僕にとっては、ここにいる必然性がないってことで。

　そんな場所に、どうしていつまでもしがみついてなきゃいけないんだ。

　心臓が痛いくらい高鳴っている。呼吸がおかしい。ひどく乱れている。足が勝手に動く。僕はどこへ行くつもりなんだろう。サフィニアは前方に集中している。僕の動きに気づいていない。僕は気配を消そうとする。大だい丈じよう夫ぶだろうか。察知されないか。動どう悸きがすごい。足あし許もとが覚おぼ束つかない。それでも僕はあとずさりする。一歩。二歩。三歩。ここからだともうみんなの姿は見えない。音は聞こえる。剣けん戟げきの響ひびき。雄お叫たけび。悲鳴。サフィニアはまだ前を見ている。僕はさらに離はなれる。息を止めてそっと離れる。四歩。五歩。六歩。もっとだ。もっと。僕は遠ざかる。背を向ける。逃にげる。最初はゆっくりと。徐じよ々じよに速度を上げて。そこだ。曲がり口に飛びこんで、それから走る。これでも足は遅おそくない。身軽さだけが取り柄えだ。装備だって、極力重量を抑おさえて、身体からだの動きを制限しないようなものを選んでいる。工く夫ふうしているんだ。いろいろと。きっとＺＯＯのみんなは笑うだろうけど、小さな、ちっぽけなことを積みあげて、それでも人並みにはなれなくて、何度も死にかけて、どうにかこうにか生きてきて、その取るに足らなさに暗あん澹たんとした気分になるときもあった。それはもう、数えきれないほどあったけれど、誇りだって持っていた。向こうが透すけて見えるほど薄うすっぺらで、吹ふけば飛ぶような軽い、軽すぎる

自尊心だったかもしれないけれど、それがないと生きてこられなかった。せめて心の中心にそんなものでも隠かくし持っていないと、あまりにも悲しくて、情けなくて、せつなすぎて。

　きみたちを見てると、バカらしくなってさ。

　自分っていう存在がバカバカしくて。

　きみたちの後ろ姿は遠くて。

　遠すぎて。

　もし必死になって追いかけたとしても、追いつけるわけがない。届かない。

　それなのに、未練ったらしく後ろをついて歩いて、おこぼれにあずかるくらいしか能がないくせに仲間面づらして、僕ときたらいったい何様のつもりなんだ。

　マリアローズは偽にせ劫ごう火かを鞘さやから抜いた。向こうだ。行く手にメリクルがいる。こっちに気づいた。キウゥゥエエェェェェェ。一声叫さけんで駆かけてくる。鎖くさり帷子かたびらを着けて、剣けんと盾たてを持っているメリクルだ。身の丈たけは一・二メーテルくらい。標準的な体格だ。一匹ぴきだけか。どうやらそうらしい。お前なんて。お前ごとき。余よ裕ゆうなんだ。いくら僕でもメリクル一匹相手に後おくれをとったりするもんか。息があがりかけていたが、マリアローズはさらに足を速めた。メリクルも盾を前に出して突っこんでくる。もうすぐだ。あと一歩で間合いに入るというところで、マリアローズは偽劫火を振りあげた。偽劫火を盾で弾はじいてから、剣で反はん撃げきする。メリクルはそうしようとしたのだろう。マリアローズは読んでいた。偽劫火を振りおろさずに、左足を出した。盾を蹴けりつけて、バランスを崩くずしたメリクルに猛もう然ぜんと襲おそいかかった。トマトクンやピンパーネルの剣けん捌さばきを見ている身にとっては、メリクルの太た刀ち筋すじなんて児じ戯ぎに等しかった。一方的にメリクルを攻せめ立てて、わずか数合打ちあっただけで勝負をつけた。

　眉み間けんに偽劫火の剣先を埋うめこまれて石の床ゆかにぶっ倒たおれたメリクルを前にして、マリアローズは久しく味わっていない充じゆう足そく感と昂こう揚よう感を覚えた。

同時に安あん堵どもしていた。

何だ。やれるじゃないか。僕だってできる。

こうやって一人で獲え物ものをしとめて、ああ、これ、このメリクル、首輪なんかしてる。何か石みたいなものが嵌はめこまれている金色の首輪だ。しかも、ただの石じゃない。暗視鏡越ごしだからよくわからないけれど、鋼玉の一種だろうか。着色補正された色が正しければ、もしかしたら紅玉ルビーかもしれない。結構大きくて、小指の爪つめくらいはある。いくらで売れるだろう。カタリほどくわしくないので、ちょっと見当がつかない。損をしたくないから、あとで相場を調べてみないといけないが、それなりの値段はつきそうだ。やった。これで何日暮らせるだろう。数日どころか、数十日かもしれない。貯金できる。これでまたしばらく生きのびられる。きっとＺＯＯのみんなには理解してもらえないだろうけど、地べたを這はうように、手て探さぐりで一日一日を生きてゆく、そんなやり方も僕は嫌きらいじゃないんだ。だって、そういう生き方をしていると、余計なことを考えなくてすむ。面めん倒どうだとかつらいとか苦しいとか将来が不安だとか、失って取り戻もどすことのできないものや人のこととか、いやな思い出とか、とても悲しかったこととか、一人で寂さびしいとか、心細いとか、そんなことは寝ねる前にちょっと思い浮うかぶだけで、でも、疲つかれているからすぐに眠ねむってしまい、目が覚めれば、さあ、今日もしっかり稼かせがなくちゃ、という気持ちになっている。

戻ろうか。

今ならまだ引き返せるような気がする。

このままアンダーグラウンドを出て、もう二度とＺＯＯのみんなとは会わない。エルデンは広いようで狭せまいけれど、決して不可能じゃない。

結局、無理なんだ。誰かとうまくやってゆくなんて、疲れるし、大変だし、はっきり言ってうざったくてかなわない。相手じゃない。自分だ。僻ひがみ根こん性じようのかたまりみたいな自分自身が何よりうざい。自分が非力で無才で未熟だということはとっくのとうにわかっているのに、その出で来き損そこないとできる連中とを比ひ較かくして、自じ己こ嫌けん悪おに陥おちいって、彼らを羨うらやんで、妬ねたんで、僕はダメだ、ダメすぎる、やっぱりダメだ、そんなことをいったい何回思えば気がすむのだろう。

　もうこのへんにしとこうよ。

　無む駄だだしさ。

　吐はき気がする。

　むかむかするんだ。

　自分で選んだはずなのにね。一度は決めたのに。

　あのとき、みんなが手をさしのべてくれて。僕を捜さがしてくれて。一いつ緒しよに行こうって言ってくれて。僕は、でも、土ど壇たん場ばで足がすくんで、一歩踏ふみだすことができなくて、引き返そうとして、そんな僕をきみたちがつかまえて、無理やり連れていったんだ。そうだ。もとはと言えば、無理やりだ。最初から最後まで僕が決断して、選せん択たくしたわけじゃない。

　ちょっとだけ、嬉うれしかったけどさ。

　ほんの少しだけ、離はなれがたいけれど。

　マリアローズは紅玉ルビーを背負い袋ぶくろに突つっこみ、偽劫火の刃はについた血ち脂あぶらを布でぬぐって鞘に収めた。

　もしかしたら、後こう悔かいするかもしれない。

　そんなことを考えながら歩きだした。

　でも、まだ十七年しか生きていないから、この時点で判断するのは早計かもしれないけれど、どうせ上等な人生とはとうてい言えない。

　大事なものは何もかも奪うばわれて、売り払はらわれて、買われて、いいように扱あつかわれて、逃にげだして、裏切って、こそこそと一人で生きてきた。

　振ふり返ってみれば、悔くいばかりだ。

　それがまた一つ増えたところで、どうってことはない。

　ため息ばかりついていないで、前を向こう。

　しっかりしろ。

ここはまだアンダーグラウンドだ。

地上に出たわけじゃない。

気を引きしめて、用心しないと。

なんだか、ものすごく、手て遅おくれのような気がしないでもないんだけど。

最初、それが動いてこちらに近づいてきているということが、どうしても信じられなかった。妙みような話だった。だって、それは暗視鏡越しにもはっきりそれとわかる、どうやら上位種らしい大おお柄がらなメリクルだった。いや、大きいなんてものじゃない。この通路の幅はばは四メーテル足らず、高さも四メーテル近くあるだろうか。だとすると、やつの身の丈たけは二メーテル以上だ。ただ、さっきの上位種たちとは違ちがい、鎧よろいなどは身につけていない。目は潰つぶれているのか、傷きず跡あとらしきものが確かく認にんできる。縦に長いせいか、瘦やせて見える身体からだを覆おおう羽う毛もうは、着色補正が正しいとしたら、黒に近い褐かつ色しよくだ。かなり汚よごれているようで、どうやら傷だらけでもあるが、足どりはしっかりしている。というか、足音がまったく聞こえない。姿は見えるのに、そこにいる気配というものがないのだ。

おそらく、そのせいだ。

マリアローズは、そいつが約十メーテルの距きよ離りまで迫せまってきてから、ようやく身の危険を感じた。

一いつ瞬しゆん後に思い出した。

それは噂うわさだった。

侵クラ入ツ者カーの間では与よ太た話ばなしのたぐいだと考えられていたが、ごく一部の者は、やれ自分はこの目で見たとか、仲間が殺やられたとか、誰それに聞いた、嘘うそをつくような男じゃないとか主張していた。そういった都市伝説とでもいうべき風説、流言はエルデンに数かぎりなくある。その中の一つだった。

第二フアン迷トム・宮オブ・のセカン亡ドラビ霊リンス。

あるいは、さまハウンテようツド・ル鶏ースター。

やつはそう呼ばれているメリクルの特とく徴ちようを備えていた。

音もなく忍しのび寄る身のこなしといい、メリクル離ばなれしたあの巨きよ軀くといい、体色といい、潰れた目といい、それから、その右手に握にぎりしめている刃は渡わたり一メーテル以上の物を斬きるよりも叩たたき潰すようにして切断するのだろう大おお太だ刀ちといい、そうとしか思えない。

もし本当にそうだとしたら、じっとしているべきではないだろう。さまよう鶏はこうしている間にも接近してくる。もう七、八メーテルほどしかない。どうしよう。どうすればいい。どうもこうもない。考えている場合じゃないんだ。でも、考えないと、どうすればいいのかわからない。

そうだ。籠こ手て。マリアローズの籠手は特別製で、矢の発射装置をつけている。いや、ダメだ。矢には神経毒が仕込んであるので、命中すれば人間程度の大きさの生き物なら動けなくすることができるが、威い力りよくが弱い。あの脂ぎった羽毛に防がれてしまうような気がする。じゃあ、どうする？　逃げる。そうだ。逃げるしかない。でも、ただ逃げるだけでは、背中から斬りかかられて、バッサリやられて終わりだ。

いやだ。

冗じよう談だんじゃない。

死にたくない。

右手が勝手にベルトのホルダーにのびていた。ホルダーのカバーを開けて、中に入っていた小こ瓶びんを抜ぬきとった。さまよう鶏はすぐそこまで迫っている。違う。錯さつ覚かくだ。しっかり足あし許もとを見ろ。まだ五メーテルはある。たった五メーテルか。近い。近すぎる。直ちよく撃げきはさせられない。マリアローズは下手投げでさまよう鶏の後方二、三メーテルの地点を狙ねらった。やばい、と思った。さまよう鶏の大太刀が動いたからだ。マリアローズは外がい套とうで身体をかばって後ろに跳とんだ。爆ばく音おんと閃せん光こう、爆風はほとんど同時にきた。マリアローズが投げた小瓶をさまよう鶏が斬ったのだ。小瓶の中身は爆薬液ハーレムゴードンだった。酸素が一定濃のう度ど以上の空気にふれた瞬間、気化して、体積が瞬間的に増大し、つまり爆発して、同時に可燃性

のガスを発生させるため、炎ほのおをも撒まき散らすという優すぐれものなのだが、できれば使いたくなかった。材料費が結構高いからだ。とはいえ、もちろん、今はそんなことを言っている場合じゃない。どうなった？　僕は？　さまよう鶏は？　意識は？　はっきりしている。痛いところは？　肘ひじ。肩かた。腰こし。痛いといってもちょっとだけだ。たいしたことはない。大だい丈じよう夫ぶみたいだ。僕は──外套にくるまって、床ゆかに転がっている。起きあがれ。早く。さあ。確かめろ。ああ。燃えている。さまよう鶏が燃えている。立ったままだ。やった、のか？　いや。まだだ。動く。動こうとしている。動いた。さまよう鶏が全身を震ふるわせると、火の粉が飛び散った。近づいてくる。こっちに。平気なのか。身体が燃えているのに。でっかい、でっかすぎる焼き鳥になろうとしているのに。

　逃にげないと。

　何をしてるんだ、逃げろ。

　走りだした直後、背筋が寒くなった。間かん一いつ髪ぱつだった。ほんのわずかでも遅おそかったら、たぶん斬られていた。ダメだ。もう振ふり返れない。全速力だ。少しでも足をゆるめたら殺やられる。さまよう鶏はすぐ後ろにいる。追ってくる。身体中が燃えているのに、呻うめき声さえもらさずに追いかけてくる。熱だ。炎の熱を感じる。逃げきれるのか。わからない。追いつかれたらどうしよう。どうしようもない。でも、あの爆発音はみんなにも聞こえたかもしれないし、僕がいないことにも気づいているだろうし、そうだとしたら──だとしたら、何だっていうんだ。僕は何を期待してるんだ。逃げてきたっていうのに。今も逃げてるっていうのに。この期ごに及およんで、僕は来た道を戻もどろうとしている。最後の自制心で、声を出すことは我が慢まんしているけれど、本当は叫さけびたい。叫べない。叫べるもんか。だけど、望みを失っていなかったことは間違いない。その望みとやらの具体的な内容については考えたくなかった。考えなくてもよかった。

　角を曲がろうとして、勢いあまって曲がり損そこね、石壁を蹴けってなんとか方向転てん換かんした。

　足音が聞こえた。後ろからじゃない。前からだ。姿も見えた。

　気が抜けそうになって、涙るい腺せんがゆるみかけた。もう一ひと踏ふん張りだと自分に言い聞かせて、足を速めた。

　トマトクンは何も言わなかった。マリアローズとすれ違った瞬間、すさまじい咆ほう吼こうをあげて、その場で振り向いて見ることはできなかったが、たぶん肩にかつぐようにしていた大剣を振りおろしたのだろう。金属がぶつかりあう音がしたから、さまよう鶏は大太刀でトマトクンの大剣を受け止めたのかもしれない。マリアローズは急停止して振り返った。

「──でえい……！」

　トマトクンはさまよう鶏の全身を包んでいる炎をものともせず、その足を蹴ったくった。さまよう鶏は一いつ瞬しゆん体勢を崩くずしかけたが、それでも中ほどで折れた大太刀を手にしたままトマトクンに組みついてゆこうとした。両者はかなり接近している。近すぎて、大剣の間合いではない。いったいどうするのか。

　トマトクンは受けて立った。

　それどころか、自分からさまよう鶏に突つっこんでいった。

　頭からだった。頭突きだ。さまよう鶏はたまらずのけぞった。

　その隙すきに、トマトクンはすっと下がって大剣を自分の肩口に引きよせ、鋭するどく素す早ばやく振りおろした。

「ぬあああああああああ……！」

　大剣は脳天を直撃した。

　さまよう鶏の頭部は西瓜すいかみたいにバックリ砕くだけて、グッジャゴジャに飛び散った。

　やつはもう第二迷めい宮きゆうを亡ぼう霊れいのようにさまようことはできないだろう。石の床に倒たおれ、いずれ燃えつきて、その残ざん骸がいはアンダーグラウンドのほぼ全域に棲せい息そくしているという大脂羽蟲ゴツキーの餌えさになる。そうなってしまえば、僕はあのさまよう鶏をこの目でたしかに見たんだと証言したところで、誰も信じてくれないかもしれない。実際にさまよう鶏を手にかけたトマトクンや、向こうからこちらめがけて駆かけてくるＺＯＯのみんな以外は。

　トマトクンが大剣を外套でぬぐい、後ろ頭をボリボリ掻かいた。

「あー……」

　大きなため息がそのあとにつづいた。

　きっと、呆あきれてるんだろうな。そりゃそうだよ。僕がトマトクンの立場だったら、呆れるどころじゃすまない。ひょっとしたら、助けなかったかもしれない。見殺しにしてたかも。

　でも、トマトクンはそんなことができる人じゃない。

　お節せつ介かいなんだ。

　とんだお人ひと好よしだ。

　そして、僕はそのことをよくわかってるんだ。

「大丈夫か」

「……うん」

「そうか。それならいいが。いや、よくもないが。つまり、なんだ。まあ──」

「ばか……！」

「え？」

　思わず振り返った瞬間、ガッツンときて腰が抜けそうになり、目の前を無数の星か火花のようなものが飛びまわって、何がなんだかわからないまま、とりあえず頭のてっぺんあたりを両手で押さえてみた。

「──あ、痛っ……？」

　気のせいでも思いすごしでもない。実際、痛い。結構痛い。殴なぐられたからだ。なんで？　誰に？　ユリカだ。ユリカがすぐそこにいる。走ってきて、マリアローズの頭を棍こんでポッカリというよりボッコリ叩たたいたみたいだ。ばか。あれはユリカの声だった。や、そりゃそうかもしれないけど。たしかに、バカっていえばバカなんだろうけど、だからって殴るかな、ふつう？　そこまでする？　棒だよ？　てゆうか、ユリカが使ったら立派な殺人兵器だよ？　そんなものでぶっ叩くなんて、やりすぎじゃない？　いくら

なんでもひどくない？

「な……にするのさ、いきなり──」

「叩いたのよ。わからない？　わからないなら、もう一発ぱちゆ叩いてあげるけど？」

「じょ、冗じよう談だんじゃないよ、なんで叩かれなきゃならないのさ。つー……ったぁ……」

「しょりゃあ痛いでしょうね。でも、しょんなのはいくらでも治してあげられるわ。わたしの医い術じゆちゆ式しきはしょのためにあるんだもの。だけど、治しぇない傷きじゆだってあるのよ？　死んでしまったらおしまいなのよ？　今、しゅごく危なかったってこと、紙かみ一ひと重えの差しやだったってこと、マリア、あなた、ちゃんとわかってる？」

「わ……わかってるよ、それくらい」

「しょう」

　ユリカは左手を腰こしにあてて唇くちびるを噛かみ、棍の石いし突づきで床ゆかを叩いた。

「じゃあ、どういうわけでこんなことになったのか、説しえちゆ明めいして欲しいわ。突とちゆ然じえんいなくなるなんて。わたしだけじゃない。みんな心配したのよ」



「そ、れは――」

　マリアローズは一度うつむいてから、トマトクンをちらりと見た。トマトクンは首を傾かたむけてみせただけで無言だった。すでにカタリとピンパーネル、サフィニアの姿もユリカの後ろにあるが、小さな女医術士ナースの剣けん幕まくにすっかり圧あつ倒とう

されてしまっているようだ。むろん、マリアローズも完全に気け圧おされている。はっきり言って、かなり怖こわい。初めて知った。ユリカは怒おこらせちゃいけない人なんだ。

　だいたい、この件に関しては弁解の余地がない。マリアローズが勝手にいじけて、黙だまって行ゆく方えをくらませようとして、運悪くさまよう鶏に遭そう遇ぐうし、死にかけて、危あやういところをトマトクンに助けてもらった。それなりの動機があってしたことだけれど、考えてみるといい。マリアローズがいなくなったことにみんなが気づく。そうしたら、あ、いない、ま、いっか、放ほっとけ、みたいに思うだろうか。そんなわけがない。大おお騒さわぎになるに決まっている。

　これ以上、彼らと一いつ緒しよにはいられない。それが結論なら、ちゃんと自分の口から別れを告げてＺＯＯを抜ぬければいい。なんで僕はそうしなかったのか。言いづらかったから？　たしかに、気軽に切りだせるようなことじゃない。でも、正直、そこまで深く考えていなかった。ほとんど衝しよう動どう的な行動だった。それだけだろうか。僕は本当に彼らとすっぱり手を切るつもりだったのか。たとえ瞬しゆん間かん的にでも、絶対に、もう二度と彼らとは会わない、だめだ、もう終わりだ、そんな決意を僕はしたのだろうか。今はどうだろう。さよならをするなら、勢いに任せて、今、言えばいい。絶好の機会だ。言え。言ってしまえ。さあ、言うんだ。

「……ごめんなさい」

　それなのに、なんで謝ってるんだよ。しかも、同情を引くみたいな、いかにもどうか許してください、みたいな、消え入りそうな声で。訊きかれたことに答えてもいないし。僕ってば、いったい何やってるんだよ。

　おそるおそるユリカを見た。

　暗視鏡のせいで、どういう表情をしているのかわからない。

　まだ怒ってるかな。

　怒ってるよね。あたりまえだよね。

　僕が悪いんだし。

「座しゆわって」

　ユリカが口を開いた瞬間、マリアローズはびくっとして首をすくめた──って、あれ？

「……はい？」

「座しゆわりなしゃい。頭。診みしぇて。叩いたところ、しょのままにしておいたら、たんこぶになっちゃうわ」

「あ、うん」

　おとなしく床にぺたんと座ったら、ユリカの指が頭にふれた。乱暴ではないどころか、やさしい手つきだった。おまけに、わたしのほうこしょごめんなしゃい、と小声で謝られて、顔から汗あせが出た。これが世に言う汗かん顔がんの至いたりというやつか。

　トマトクンは所在なげに首を曲げたり肩かたを回したりしている。暗視鏡越ごしに目があったピンパーネルが口くち許もとをゆるめた。カタリはまだ燃えているさまよう鶏の死し骸がいを眺ながめたりつついたりしている。

「せやけどあれやなあ、よりにもよってこないなやつと出くわすっちゅうのんは、ありえへんくらいアンラッ──」

　そこまで言ったところで、カタリは口をつぐんだ。サフィニアがうなだれて杖つえにしがみついている。

「わたしの……せい、ですね……ごめんなさい、マリアさん……わたしが悪いんです……空が、青いのも……雲が、灰色なのも……雨が、降るのも……何もかも、わたしの……」

　本人曰いわく、サフィニアは凶きよう星せいのもとに生まれついたせいで、さんざん周りの者たちに災難を振ふりまいてきたのだという。今は七天占せん星せい術じゆつの秘法によってその強きよう烈れつな負の運気を中和する方法を見つけ、それを実行しているのでだいぶマシらしいのだが、これまでの経けい緯いがあるので、自分がいることで仲間たちを不幸にするのではないかと不安で不安で仕方ないらしい。

「あ、や、でもさ、結果的に無事だったわけだし、むしろサフィニアたちがきてくれて助かったんだから、幸運を運んできてくれたっ

ていうかそういう解かい釈しやくも、ねえ？　トマトクン？」

「おお。そうだぞ。そんなに気にするな」

　トマトクンは鷹おう揚ようにうなずいてサフィニアの頭を撫なでた。サフィニアはしきりとうなずいて、でも、嬉うれしくて恥はずかしくてとても顔を上げられないといったかんじだ。

　そうこうしているうちに治ち療りようが終わった。

「大だい丈じよう夫ぶ？　他ほかに痛いところはない？」

　もういつものユリカだった。

　これでいいのかな、と思わなくもない。僕は勝手にいじけて、ふてくされて、その結果、みんなを心配させて、迷めい惑わくをかけた。一言謝って、それですむ問題だろうか。たったそれだけで水に流してもらえるのか。たとえば僕が彼らの立場だったら、きっとぶちキレて罵ば倒とうしまくったあげく土下座させて、反省文ともう二度とこのような真ま似ねをしない旨むねの誓せい約やく文ぶんの提出を求めるくらいのことはやるかもしれない。以前の僕なら、たぶんそうした。今はどうだろう。相手がＺＯＯの誰かだったら。

　もし、相手が仲間だったとしたら。

　僕はやっぱり、かなり頭にはくるだろうけど。

　わからないけれど、まあ、しょうがないか、このへんで許しておいてやろうか、ため息をつきながらそんなふうに思うかもしれない。

　そんな偉えらそうな態度をとれるような立場じゃないけどさ。

「ありがと」

　マリアローズはユリカに礼を言って立ちあがった。どういたしまして、と笑ってくれたユリカには本当にかなわない。愛らしくて、身体からだは小さいけれど、ものすごくお姉さんで、強くて、やさしくて、一いつ緒しよにいるとほっとする。

　深呼吸をした。

つめたい地下の空気は微かすかに鶏にわとりくさかった。

一人きりで毎日のようにメリクル迷めい宮きゆうに通っていたころは反へ吐どが出るくらい嫌きらいだったのに、なぜだか今はそうでもない。いいにおいでは決してないけれど、まあこんなものかな、と割り切ることができる。

皆みなを見まわした。

誰一人として目をそらさなかった。

誰も彼もマリアローズの視線をしっかりと受け止めてくれた。

少し気恥ずかしくて、そういえば、と思いたち、背負い袋ぶくろの中から紅玉ルビーをとりだして、カタリを手招きした。

「ね、これなんだけどさ」

「お？　なんや。見たとこ鋼玉の一種っぽいなあ。どこで見つけたん？」

「ちょっとね。ま、いいでしょ。そんなことはどうでも。で、きみ、こういうのはくわしいから、見てもらいたいんだけど」

「暗視鏡越しやと、いくらわしでもなあ。あ、ちょうど明かりがあるやんけ。ほな、ちょっと見してみい」

マリアローズから紅玉ルビーを受けとったカタリは、依い然ぜんとして燃えつづけているさまよう鶏のそばにしゃがみこんで暗視鏡を外した。

火勢はもうだいぶ弱まっているが、何かコツでもあるのだろうか。カタリは右手の人差し指と親指でつまんだ紅玉ルビーを炎ほのおにかざすと、分別顔で一つうなずいて──てゆうか、半魚人め、いきなりなんてことをするんだ、紅玉ルビーをぽいっと床ゆかに放ほうってしまった。

マリアローズは慌あわてて紅玉ルビーを拾い、カタリの首の後ろに回し蹴げりを見み舞まった。

「ぐぎょっ」

「何するんだよ、この頭あたま腐くされ切り干し半魚人！　人がせーっかく手に入れた紅玉ルビーを、ゴミみたいに──」

「な、何するて、そんなんこっちの台詞せりふやで！　ゴミをゴミ扱あつかいして何が悪いん！」

「え？　ゴミ……？」

「せや！　ゴミや！　ゴミ以外の何ものでもないわ！　そんな石っころ、まともなモンなら一ダラーも出さへんで！　そこらへんの子供騙だまくらかして十ダラーくらいで売りつけるっちゅうんなら話は別やけどな！」

「……ゴミ？」

「そうやってゆうとるやないか！　暗視鏡越しやとなんや透とう明めい度高そうに見えよるけどな、肉眼で確かく認にんしたらぜんぜんやし、ただの赤い石や！」

「……ゴミ……」

「まあ、そんな気ぃ落とすなや？」

　半魚人はマリアローズの肩に手を回して、ハッハハッと笑った。

「ようあることやないか。なあ？　値打ちもんかと思おもたブツがガラクタやとかな。付きもんやで、実際。誰もが通る道や。むしろなあ、今わかってよかったんちゃうん？　あとでガッカリするよりはな？　早いほうがな？　ナッハハハッ。ええ勉強させてもろたと思て──」

「うっさい、このアホ魚さかな面づら魚ざかな！」

　マリアローズはただの赤い石ころをカタリめがけて投げつけた。

　カタリは紙かみ一ひと重えでかわした、のではない、仲間のよしみでわざと当てなかったのだ。せいぜい感謝しろ、半魚人。魚脳にそんな高等な機能が備わっていれば、の話だが。

「あっ、危ないやろ！　何すんねんな！」

「黙だまれ！　そもそもきみが無計画なのが悪いんだから！　それ

に、こんなとこまできて、手ぶらで帰るなんて何考えてるんだよ！　そんな不経済な！　これって不ふ祥しよう事じだよ！　きみが引き起こした！　不具合生じてるからこうなるんだよ！　きみの頭が！　てゆうか、ほとんど不良債さい権けん！　きみの存在自体が！」

「それなラ」

　ピンパーネルが通路の向こうを指さした。

「行きマスか。Ｆ３。も・一回」

「当然！」

　マリアローズはためらわずにうなずいた。

「今日は最低十万ダラー稼かせぐまでは絶対帰らないから。そのつもりで！」



memory of hysteric youth

つまずいてすりむいた膝ひざを抱かかえたまま顔を上げて笑えるほど人間ができちゃいない。

痛い痛いと泣き叫さけんで行き交かう者たちの同情を買おうとするほど子供でもない。

大だい丈じよう夫ぶ、もう平気、と思えるまでじっと我が慢まんしているくらいが関の山だ。

この道は苦難に満ちているなんて言ったら大おお仰ぎように聞こえるだろう。

細い足で歩いてゆくには果てがなさすぎるなんて言ったら笑われるに違ちがいない。

みんなそうして歩いているんだ。

僕だけじゃない。

よろけたり転んだりしながら歩いているんだ。

乗り越こえないといけない壁かべはいたるところにある。

飛び越えないといけない溝みぞも数えきれぬほどある。

危機はいつだって突とつ然ぜん降ってきて僕の息の根を止めようとする。

たとえ今日がその日だったとしても、とくに驚おどろくようなことじゃない。

ELDEN☆SWEET☆ANGELS

hysteric youth
ヒステリック・ユース

　息がうまくできない。胸が苦しくてお腹なかが少し痛い。胃だ。胃が錆さびついてしまったかのように、消化器官としてちゃんと働いているかんじがしない。口内炎えんができそうだ。もうできかけているかもしれない。正直、まいった。それでどうにかしてもらえるのなら、まいりました、と頭を下げてもいいくらいだ。誰か、どうか助けて欲しい。でも、そんなことを口に出すわけにはゆかない。だって、困り果てているのは自分だけじゃない。相手も同じだ。自分だけ被ひ害がい者しや面づらするのは公平じゃない。この腐れエルデンでは芥け子し粒つぶほどの重さもないだろう公平さを重んじる生き方をしているわけじゃないけれど、この空気の重さを耐たえがたく感じているのはお互たがい様だと思う。

　まさしくこれは、あの噂うわさに聞く運命の悪戯いたずらというやつに違いない。

　十時を少し回ったところだった。第二王立銀行内にあるクランＺＯＯのたまり場である動物園事務所にきてみたら、ピンパーネルしかいなかった。

「お、おはよう」

「おハヨ・ございマス」

　やばいな、と直感した。いや、直感なんて大おお袈げ裟さなものじゃない。自分はひどく動どう揺ようしている。そのことにはすぐに気づいた。気づいたからといって、それがどうした。どうにかしないと、どうにもならない。どうにか？　どうすれば……？　ラハン大陸出身で、元アッサシン、ようするに暗殺者で、α大陸の共通語が苦手なせいか、それとももともとそうなのか、とにかく無口で、言葉の問題だけじゃなくて共通の話題がない、少なくとも思いつかない、そんな相手と二人きりになってしまったとしたら、あなたはどうしますか？　あなた？　誰？　てゆうか、僕はどうする？

　どうするもこうするもない。喋しやべるしかないじゃないか。

「いい、天気……だね？」

「はイ」

「うららかな、朝……だよね」

「はイ」

　それだけ？　ねえ、たったそれだけ？　動物園事務所名物大円えん卓たくを囲む椅い子すにひっそりと腰こしかけて、一応、砂色の瞳ひとみは隣となりの椅子に座っているマリアローズに向けられてはいるものの、いまいちどこを見ているのかわからない、静かな、静かすぎる眼まな差ざしで、返事は、はイ、たったそれだけ？　それだけですか？　他ほかに何かありませんか？

　ないらしい。

　やばい。

　今、たぶん、三分くらい意識が飛んでいた。

　正気を保ったままでは、この沈ちん黙もくに耐えられそうもなかったし、やむをえまい。

　うん。

　──や、うん、じゃないって。

「あの……えと……今日、みんなは？」

「いまセン」

　わかってます。そんなことは。見ればわかります。僕にだって、それくらい。もしかして、バカにしてます？　僕のこと。キレていい？　嘘うそです。キレません。キレるなんてとんでもないです。ごめんなさい。本当にごめんなさい。反省します。

　あ。

　やばい。

　今、また、三分くらい意識が飛びまくっていた。

　マリアローズは頭をぶるんぶるん振ふってピンパーネルを見た。

　ピンパーネルはマリアローズの視線に気づくと、目め許もとと口許をゆるめてみせた。

　負けじとこちらも笑え顔がおを作ってみた。

なごんだ。

ほんのちょっとだけ、だけど。

このほんのりとしたあたたかさを大事にしよう。そうだ。その線でいこう。ピンパーネルは話すのが得意じゃないんだし、僕も話すのが苦手な人相手に話をするのはそんなに得意じゃないんだから、何も無理をすることはない。人間が二人いたら、絶対に会話しなければならないとか、そんな決まりはないはずだ。あるはずがない。ここはサンランド無統治王国だ。僕らは自由なんだ。人間が二人いたら、やさしく微笑ほほえみあいましょう。いいじゃないか。それも一つのやり方だ。採用。大採用。そうと決まれば、笑おう。笑いつづけよう。

無理だ。

そんなのおかしいって。

不自然だってば。

ほら、だんだん笑顔が引きつってきたし。

思わず顔を背そむけちゃったし。

泣ける。

これはきつい。

そして、またただ。

またまた三分くらい意識がどこか別の世界を飛ひ翔しようしていた。

もういっそのこと、意識だけじゃなくて、身体からだごと飛びたい。飛んでゆきたい。

永遠へ。

でも、そんなわけにはゆかない。永遠へとかくだらないことを言っている場合じゃない。仲間なんだ。まだどうもしっくりこないけれど、同じクランなわけだし、仲間としか言いようがない。それ以外にこの関係を表すどんな言葉が存在するというのか。ない。な

いと思う。たぶん。だから、仲間だ。気まずいからといって、じゃ、僕、今日は帰るね、ばいばーい、みたいなかんじでさっさと事務所をあとにする。そんな真ま似ねはできない。きっと、あとでもっと気まずくなる。未来のために現在を我が慢まんすることも必要だ。耐たえる。そう。耐えないと。忍にん耐たいだ。忍耐力が試ためされている。ここは瀬せ戸と際ぎわだ。分ぶん水すい嶺れいだ。天王山だ。しばらくーいつ匹ぴき狼おおかみを気どって一人きりで侵クラ入ツ者カー稼か業ぎように精を出していたので、対人関係の上で努力するということをまったくと言っていいほどしていなかった。もう違ちがうんだ。状じよう況きようが違う。クランに入った。仲間ができた。これからは人と人との繫つながりを大事にしてゆかないといけない。ピンパーネルとだって、ちゃんとコミュニケーションをとって、理解しあって、手と手をとりあって、何かこう、乗り越こえないといけない壁かべみたいなものが目の前に現れたら、協力して登らないといけないわけだし、がんばれ。がんばれ、僕。でも、いったい何をがんばれば？　このままじっとしていればいいのか？　他の誰かがくるまで？　や、それはよくない。やっぱり話さなくちゃ。話題だ。話題を探せ。何でもいいんだ。ただの世間話でいい。難しくないはずだ。あー。本日はお日ひ柄がらもよく。違う。そういえば、この間、こんなことがありましてねえ。こんなこと？　どんなことだ。それが問題だ。カタリって魚に似てるよね。どうだろう。陰かげ口ぐちに聞こえるかもしれない。それは印象がよくないだろう。じゃあ、何？　何を話せばいいわけ……？

「──あ」

　あ？　あ、って？　あの次は？　先は？　つづきは？

　アスレチック。

　却きやつ下か。

　アーノルド。

　誰、それ。

　アーティスティック。

　何の話？

　アンポンタン。

　罵ののしってどうする。

　秋。

　じゃないし。

　アイアンソード。

　鉄の剣つるぎ。

　よし、これだ……！

　じゃないって。

「あ……」

　どうする？　どうすれば？　あ、あい、アイアン、違う、あい——、

「アイスは」

　アイス？　なんでアイス？　でも、言ってしまったものはしょうがない。アイス。アイス。アイス。アイスといえば。

「チョコミントが好きなんだよね、僕。ぴ、ピンパーネルは？」

「ワタシ・は」

　ピンパーネルは眉まゆをひそめてうつむいた。もしかして、困っているのか。もしかして、じゃない。間違いなくピンパーネルは困っていて、苦しげでさえある。

「……食ベナイ・でス。アイス。あマリ」

「そ、そっか。そ、そうだよねえ。アイスなんてねえ。食べなくても死なないしね。なきゃなくてもいい食べ物だよねえ。なくなっちゃったらちょっと寂さびしくはなるけど。ま、結構おいしいと思うからさ。チョコミント。見た目とかチョコとミントってどうなのとかそういう印象的なもので敬遠されがちだったりもするけど、今度、機会があったら、食べてみて？　意外とハマったりするかもしれないし」

「はイ」

　終わった。あっさり終しゆう了りようしてしまった。苦しまぎれとはいえ、苦心の末、無理やりひねくりだした話題がこんなにも呆あつ気けなく終わってしまうなんて。ショックだけれど、ピンパーネルはべつに悪くない。マリアローズだって悪くはないだろう。誰も悪くない。こういう形で二人きりになってしまった。運が悪かった。巡めぐりあわせの不幸だ。それだけの話だ。

　それだけの話ではあるんだけど、ごめんなさい。

　もう無理です。

　これ以上は耐えられません。

　許してください。

　マリアローズは椅い子すから立ちあがって、ピンパーネルにとびっきりの笑え顔がおを向けた。

　そのつもりだったのだが、ちゃんと笑顔になっているかどうか、かなりあやしい。

　とりあえず、顔面の筋肉がぴくぴくしていることはたしかだ。

「あ、あの、僕、その、よ、用事を思い出したから──」

「はイ」

「じゃ」

「はイ」

「また、ね」

「はイ」

　ピンパーネルは表情をゆるめて手を振ふってくれた。マリアローズも事務所の出口に向かいながら手を振り返したが、なんだかもう猛もう烈れつにいたたまれなくて、作り笑いが今にも崩くずれてしまいそうだった。いや、とっくに崩れているに違いないけれど、これ以上ここにとどまっていたら、泣き顔をさらす羽目になってしま

いそうだ。や、泣かないけどね？　このくらいで泣いたりしないよ？　でも、いっそ泣いちゃったほうが楽かもね……？

　マリアローズは駆かけだしたい衝しよう動どうを懸けん命めいに抑おさえて事務所を出た。ドアを閉めた瞬しゆん間かん、全速力で爆ばく走そうしてエスカレーターを駆け降り、第二王立銀行を飛びだした。走りながら叫さけびたい気分だった。無理！　絶対、無理！　そんなの無理！　無理！　無理！　無理だから！　てゆうか、僕を怒おこらせないほうがいいよ？　注意して？　何が起こるかわかんないよ？　とんでもないことになっても知らないよ？　知らないよ！　やってられるか！　やってられるかっていうんだよ！　冗じよう談だんじゃないっての！　もう本当にマジですっごい疲つかれた！　疲れたよ！　ものっそい疲れました！　ごめんなさい！　僕の負けです！　負けました！　いいよ！　負けでも！　ははははのはーってかんじだよ！　何がはははのはーだよ！　バカ！　僕のバカ！　さすがに大声を出したりはしなかったものの、そんなことを小声で呟つぶやきながらマリアローズは駆けた。エルデンを駆け抜ぬけた。前なんかほとんど見ていなかった。行く先も知らなかった。何も考えていなかった。ただひたすら走った。それなのに、誰にも、何にもぶつからずにすんだのは、もしかしたら奇き跡せきに近い幸運だったのかもしれないが、人生楽あれば苦ありで山あり谷あり何でもあり、いつまでもつづく僥ぎよう倖こうなんてあるわけがない。

「──ほがっ……！」

　何かに衝しよう突とつした。というより、マリアローズが頭からそれに突つっこんでいったというかんじか。ただ、かなり思いっきり突進したわりに、たいした衝しよう撃げきではなかった。おまけに、受け止められた。たぶん両りよう腕うでで抱だきとめられたのだろう。おかげでマリアローズは吹ふっ飛ばされずにすんだ。その意味では、まだ幸運はつづいていたのか。とにかく、助かった。

　じゃなくて、助けられた？　誰に？

「大だい丈じよう夫ぶか」

　知っている声だった。顔を上げるまでもなかった。濃のう紺こん色にオレンジ色の炎フアイ模ヤーパ様ターン。こんな派手で悪あく趣しゆ味みな材質不明の全身鎧よろいを身につけているやつなんてそうそういない。いてたまるか。少なくとも、マリアローズが知っ

ている範はん囲いではたった一人しかいない。

「……トマトクン」

「ずいぶん急いでいたようだが、前はちゃんと見たほうがいいぞ。危ないだろう」

「う、うん。そ、そだね」

「急用か」

「え。あ。う、や、べ、べつに、その、用ってほどのことは、まあ、ないっていうか、あるっていうか」

「どっちなんだ」

「どっちかっていえば、ない、かな……」

「そうか」

　身長百九十サンチの園長マスターは、マリアローズを地面に下ろして頭をボリボリ掻かいた。ということは、今までトマトクンにだっこされていたのか。なんてことだ。だっこなんて。だけど、トマトクンは受け止めてくれたわけで。トマトクンが受け止めてくれていなかったら、今ごろどうなっていたことか。相手がトマトクンじゃなかったら、きっともっとひどいことに。

　マリアローズはうつむいて深々とため息をついた。たしかに精神的なタフさを要求されるシチュエーションではあった。そして自分にはそれが足りなかった。それは間ま違ちがいないが、いくらなんでも動どう揺ようしすぎだ。動揺どころか、ほとんど錯さく乱らんしていた。情けない。自分が情けなくて、恥はずかしい。ピンパーネルもきっと変に思っただろう。もしかしたら、自分が悪いのではないか、みたいに考えているかもしれない。だとしたら、申し訳ない。顔向けできないとはこのことだ。

「どうした。何かあったのか」

「……や、べつに、たいしたことじゃ……ないし」

「そうは見えんが」

　トマトクンは、うーん、と唸うなると、いきなりマリアローズの手首を握にぎった。何？　何のつもり？　引っぱって、どこに連れてくわけ？　まさか、トマトクンにかぎっておかしな場所に連れこもうとしてるってことはないだろうけど、ちょっぴり不安だった。ただ、抵てい抗こうできるほどの心の力は残っていなかった。今のマリアローズはほとんど搾しぼり滓かす同然だった。ぼんやりと、あー、どこ行くのかなー、ひょっとして地へ獄ルかなー、はは、そうじゃないといいなー、みたいなことを考えながら、引きずられるようにしてトマトクンについてゆくのがやっとだった。もちろん、それはないだろう、という思いがあってのことだった。園長マスターだし。一応。いざというときは頼たよりになる人ではあるし。締しめるときは締めたりもするし。仲間思いだし。お節せつ介かいだし。お人ひと好よしだし。だから、大丈夫だろう。大丈夫、だよね……？

「まあ、座れ」

　トマトクンはひとけのない一角で足を止め、人が住んでいるのかどうか定かではない、かなり古そうな石造りの建物の玄げん関かん口を示してみせた。玄関は少し高い位置にあって、石段がある。そこに座れということか。おとなしく指示されたとおりにすると、トマトクンも隣となりに腰こしを下ろした。大たい剣けんを背負ったままなので、かなり窮きゆう屈くつそうだ。たしか、前にも同じことがあったような。そうだ。あれはまだＺＯＯに入る前だった。初めて事務所に連れていってもらったときだ。考えてみると、それほど前のことでもないのに、ずいぶん時間がたったような気がする。

「剣、邪じや魔まなんじゃないの」

「おお。そのせいか」

　トマトクンは片かた眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげて、大剣を脇わきに置いた。

　思わず少しだけ笑ってしまった。

　今なら話せそうだ。

　マリアローズは一つ息をついて、空を見上げた。

「──ピンパーネルとさ。二人きりになっちゃって。さっきね。事務

所で。顔を出したら、ピンパーネルしかいなかったから」

「ほう。珍めずらしいな」

「あ、やっぱり？」

「たぶんな。ピンプだけってのはあんまりないんじゃないか。俺が寝ね過すごしたからか」

「そういえば、トマトクンの家に住んでるんだっけ。ピンパーネル」

「ああ」

「……喋しやべらないでしょ。ピンパーネルって。無口だよね」

「そうだな。喋らんから共通語もなかなか上達しないんだろうが。おそらく、もともと口数が多いほうじゃないんだろうな」

「あの、さ……変なこと訊きいていい？」

「何だ」

「つらくない？　ピンパーネルと二人きりでいたりすると」

「なんでだ？」

「や、ほら、ずーっと沈ちん黙もくがつづいたりすると、気まずくなったりするでしょ」

「そんなものか」

「だと思うんだけど。普ふ通つうは」

「ふむ。そうか」

「トマトクンはそういうことってないの？」

「俺は、喋りたいやつは喋ればいいし、喋りたくないやつは無理をしてまで喋る必要はないんじゃないかと思うしな。といっても、程度問題だが。カタリみたいにやかましいと、あれはあれで時と場合によっては迷めい惑わくだ」

「結構いっつも迷惑だけどね」

「みんなで飯を食うときなんかは、賑にぎやかでいいぞ」

「たしかに、せっかく一いつ緒しよにご飯するなら、黙だまりこくってるよりは、ちょっと騒さわがしいくらいのほうがいいのかもしれないけど」

「ピンプほど無口だと都合が悪いか」

「都合が悪いっていうか」

「さっき、気まずい、と言ってたな」

「うん。それ。気まずくて」

「考えすぎじゃないか」

「何を？」

「お前は気を遣つかってたんだろう。ずっと黙ってたらよくないんじゃないかとか。何か話したほうがいいんじゃないかとか。そんなことを考えて、だから気まずかったんじゃないのか」

「……だって、実際、話くらいしたほうがいいのかな、とは思うよ」

「そうか」

「そうだよ。同じクランなわけだし。その……なんていうか、仲間的な。そういう間あいだ柄がらでしょ。顔をあわせたら挨あい拶さつして、世間話くらいするんじゃない？　やっぱり」

「ピンプには向かなそうだな。世間話は」

「……だね。それはよくわかったよ」

「だったら、いいんじゃないか」

　我らがＺＯＯの園長マスターはとにかく背が高いから、隣に座っていても見上げる恰かつ好こうになった。

　トマトクンは唇くちびるの片かた端はしをつりあげて、マリア

ローズの頭の上に手を置いた。

「今日うまくいかなくても、何かわかったことがあるなら、次はうまくいくかもしれん。次が駄だ目めなら、またその次もある。焦あせることはないと思うぞ。まあ、お前がどう考えてるか知らんが、ピンプもべつに気にしてないだろうしな」

「……そう、かな」

「ああ」

「だと、いんだけど」

「保証してもいいぞ。あてになるかどうかわからんが」

　トマトクンはそう言うと、ヒヒヒ、と下品な笑い声をあげた。たまにそんなふうに笑うことがあるのだけれど、ぜんぜん似合わない。なんだかおかしくて、マリアローズもちょっぴり笑った。少し気が楽になった。気分だけではない。身体からだもだ。まるで余分なところに入っていた力がすべて抜ぬけたかのようだった。トマトクンの言葉で慰なぐさめられて、励はげまされちゃったなんて。認めたくない。そんなこと、認めてたまるか。冗じよう談だんじゃない。

「……手、どけてよ」

「む？　ああ」

「あ、べつに、きみの手が汚きたないとか、汚けがらわしいとか、さわられると寒気がするとか、チキン肌はだが立っちゃうとか、そういうことじゃないから。そうじゃなくて、ええと……」



「そんなふうに思ってたのか」

「だから、違ちがうってば！」

「それじゃあ何なんだ」

「ど、どうでもいいだろ！　そんなの！　うるっさいなあ！　細かいこと気にしないでよ！　たいがい大おお雑ざつ把ぱなくせにさ！」

「まあ、そうだな」

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげてマリアローズの頭から手を放し、鼻をこすった。

「もっと気楽にやっていいと思うぞ。きっちりしてるのはお前のいいところなんだろうが、度が過ぎれば自分がつらくなるんじゃないか」

「それは……きみたちがきっちりしてなさすぎだから、そう思うだけじゃないの」

「堅かた苦くるしいのはどうも性しように合わんしな。肩かたが凝こるだろう」

「おかげで助かってる面もあることはあるけどね」

「お前が入ったことで俺たちが助かってる部分だってあるさ」

「え？」

　ちょっと意表を衝つかれた。ＺＯＯに入って以来、皆みなに救われたりかばわれたり手を貸してもらったりしたことは何度となくあっても、その逆はなかった。マリアローズが何か役に立っているとすれば、ＺＯＯの面々は基本的にボケが多いので、無限ボケ地じ獄ごくに陥おちいらないように適度なツッコミで歯止めをかけていることくらいか。なんて微び々びたる貢こう献けん度だろう。

「……や、僕が入ってきみたちが助かってるって、そんな、ないでしょ。それは」

「いや、そうでもないぞ。前より頻ひん繁ぱんに集まるようになったしな。ちょっとお前を鍛きたえてやろうとか、どこに連れて行ってやろうとか、まあ、きっかけか。あるとないとじゃ大違いだ」

「何だよ、それ。裏返せば、ようするに僕がきみたちより経験不足でしょぼいってだけのことじゃないか」

「お前はまだ若いんだ。経験が少ないのはしょうがないさ」

「それはそうかもしれないけど──そういうレベルの問題でもないような……」

「どういうレベルも何も、お前だってずっと一人でやってきたんだろう。たいしたものだと思うぞ」

「きみにそんなこと言われても、嫌いや味みにしか聞こえないんだけど」

「嫌味か。あまり得意じゃないが」

「だろうね」

「面めん倒どうだしな。お前は苦手でもないんだろう」

「それなりにね──って、悪かったね。性格悪くて」

「そうは思わんがな」

　よく言うよ。そんな、心にもないことを。わかってるんだ。自分のことは誰よりも自分が一番よくわかってる。僕は口が悪いし。すぐ罵ののしるし。弱いくせに舌ぜつ鋒ぽうだけは鋭するどくて。小こ狡ずるくて、猪ちよ口こオざいで、いじけ虫で。なんでこんなすごい人ばっかりのクランに、僕みたいなのが。

「何にせよ」

　トマトクンは小さく息をついて首の骨をポキポキ鳴らした。

「お前は俺たちの仲間だ。それが重要なことだしな。何がどうだとか、どうしたとか、たいした問題じゃない。まったく関係ないとは言わんが、たいがいどうにかなるもんだぞ」

「……なんか、楽観的すぎ」

「ＺＯＯうちの流りゆう儀ぎだ」

「園き長みの、じゃないの」

「かもしれんが」

「いいけどね。べつに……」

　マリアローズはうつむいて前まえ髪がみを引っぱった。きっとものすごく赤くなっているに違いない顔を見られたくなかった。お前は俺たちの仲間だ、なんて。どうしてそんなことを臆おく面めんもなく言えるんだろう。恥はずかしいったらない。信じられない。でも、それがＺＯＯうちの園長マスターだ。だからこそ、僕は今ここにいられるのかもしれない。

　面倒なことも、わずらわしいことも、悩なやむことも、いろいろあるけれど、それでもやっぱりよかったと思える。

　ＺＯＯに入ってよかった。

　みんなと出会えて本当によかった。

　声に出して言うことはできそうにないけれど、心の底からそう思う。

　ほっと息をついた。

　少し、じゃない、かなり気が楽になった。

「……きみの言うとおり、ずっと一人でやってきたからさ」

　そのせいで口が軽くなったのかもしれない。

「他ほかの人との距きょ離りのとり方っていうのかな。どうするのがいいのか、どうしたらいいのか、よくわかってないんだよね。たぶん。慣れてないっていうか……それこそ経験不足だしね。たとえばカタリみたいに、こっちがぐずぐずしたり腰こしが引けたりしてもかまわないでがんがん押してこられると、どうするもこうするもなくて、かえってめんどくさくないんだけどさ。うざいけどね。たまに。どうしても我が慢まんできないってほどじゃないし。普ふ通つうは。これ以上無理ってときは、ぱっと言えちゃったりするし。そういう意味では……それこそ、意外と助かってるかな。なんか、やなかんじだけど。カタリに助けられてるとか。でも、事実は事実だし、認めないといけないし、自分なりに認めてるっていえば認めてるんだけど……やっぱり、こういうことがあると、考えちゃうんだよね。なんていうか、こう……みんなに受け容いれてもらうっていうか、受け止めてもらうっていうか、きみもさっき言ったでしょ、みんなが僕のこと鍛えてくれようとしたり、どっか連れてっ

てくれようとしたり、それはうれ……や、ありが……てゆうか、まあ、いいんだけど、それだけじゃなくて、こっちからもアクションを起こすっていうか、能動的に働きかけるっていうのかな。ちょっとしたことでもいいのかもしれないけど、そういうのも必要なんじゃないか、とか……」

　はっと我に返った。

　僕ってば何語っちゃってるんだ。

　咳せき払ばらいをして、あ、ははは、と笑ってみた。我ながらぎこちない笑い声だった。無理に笑ってごまかそうとしたのだから当然だ。

「ごめん、今のなし。聞かなかったことにして。忘れて。長々と勝手に喋しやべりまくっといてあれだけど、ほら、なんていうか、その、きみは一応園長マスターなわけだし、同じクランのよしみってことで━」

　ね、と隣となりのトマトクンを見た。

　照れ笑いが凍こおりついた。

　びっくりだよ。

　ひょっとしたら最近びっくりした出来事ベスト10に入っちゃうかもしれないよ。

　ランクインだよ。

　てゆうか、初登場で堂々一位だよ。

　ぶっちぎりだよ。

　文句なしだよ。

　トマトクンは目をつぶっている。

　ゆっくりとした静かな鼻呼吸だ。

　ありえない。

　寝てるよ。

寝ちゃってるよ、この人。

「……む」

子こ守もり歌代わりの打ち明け話が途と切ぎれたことにようやく気づいたのか、それともマリアローズの剃刀かみそりよりも鋭するどい視線を感じたのか、トマトクンは瞼まぶたを押しあげてこっちを見たが、見事なまでに目がしょぼしょぼしている。マリアローズは引きつった笑え顔がおをそのままに、右の拳こぶしを握にぎりかためた。

「おはよう」

さすがのトマトクンもいきなりぶん殴なぐられるとは思わなかったのか、マリアローズのアッパーカットは狙ねらいあやまたずねぼすけ唐とう変へん木ぼくの顎あごをガッチリとらえた。座った体勢からだし、体重差もあるし、多少手加減もしたので、さして効かなかったかもしれないが、驚おどろかせてやっただけで十分だった。マリアローズはぽかんとしているトマトクンには目もくれず、素す早ばやく立ちあがって早足で歩きだした。なんで怒おこってるんだ、あいつ、みたいな呟つぶやき声が聞こえたような気がした。さあ、なんでだろうね。普通わかると思うけどね。わかんないならいっぺん人間やめてみたほうがいいかもね。頭にくるよ、もう。寝るなんて。人が話してるのに寝ちゃうなんて。いいけど。べつに。結果的には聞かれなかったってことだし。恥ずかしいし。それはいいんだけどさ。人間としてどうなのかなってね。思うよ、そりゃあ。信じられないよ。何考えてるんだよ。てゆうか、何も考えてないんだよね。最低だよ。超最低ＳＵＣＫだよ。

歩いているうちに落ちついてくるのではないかと思っていたのだが、ダメだ。トマトクンが追いかけてきたりしなくて、かえってよかった。今のマリアローズではそうとうひどいことを言ってしまいそうだ。というか、めちゃくちゃ言い募つのってやりたい。罵ののしりまくりたい。心がポキンと音を立てて折れるまで罵ば詈り雑ぞう言ごんの嵐あらしを浴びせてやりたい。でも、いけない。そんなことはするべきじゃない。よりにもよってあんなタイミングで居い眠ねむりをしたトマトクンには、もちろん腹が立っているというか、呆あきれるしかないというか、とにかくむかついているけれど、それ以上に自分だ。本音トークをしようとした、いや、未み遂すいだったらどんなによかったか、既き遂すいだ、してしまった、ぺらぺら喋ってしまった自分自身が何よりも許せない。愚ぐ行こう

だ。恥はじだ。恥ち辱じよくだ。一生の汚お点てんだ。だから、トマトクンを罵ば倒とうしたいというのは、半分八つ当たりだ。そんなことを実際にしてしまったら、よりいっそうみじめになる。冗じよう談だんじゃない。耐たえられない。現状でもかなりやばいのに、本格的に顔向けできなくなる。ようするに、そうなるのがいやで、僕は逃にげたんだ。

　めんどくさいな。

　ほんとにめんどくさい。

　他人とうまくやってゆくには、こんなことを延々と積み重ねてゆかないといけないのかな。

　きっとそうなんだ。

　だからやなんだ。

　こんなことなら一人のほうが気楽だ。

　でも、もう二度とみんなに会えないとしたら、どうだろう。

　ぞっとした。

「──いっつぅ……」

　何、これ。

　痛いよ。

　鋭いものが突つき刺さったかのように、ここが痛い。

　胸が。

　肋あばら骨ぼねの奥が。

　心臓が。

　知らずに足が止まっていた。

　笑いたいけれど、笑えなかった。

　ため息をついてみた。

わざとらしいため息だった。

どうせ誰も聞いてないだろうから、小声でそっと呟いてみた。

めんどくさいけどね、たしかに。

やっぱり、やだよ。

今さら一人きりなんて。

みんなに会えないなんて。

「……あー、もう……」

恥はずかしいやつだ、僕ってば。

こんな街中で、道の真ん中で、通行人も大勢いるのに、ひとりごとなんか言って、一人で赤面して、何やってるんだ。

もう一度、今度は正しょう真しん正しょう銘めいのため息をついて、ほとんど駆かけ足に近い速度で歩きだした。そんなことをしても無意味だとわかってはいるけれど、一刻も早くこの場を立ち去りたかった。とくにあてはなかった。方向さえ適当だった。どこでもいい。とにかくここから少しでも離はなれたかった。そうはいってもエルデンだ。悪名高いサンランド無統治王国の首都だ。警けい戒かいは怠おこたっていなかった。すれ違ちがいざまにいきなり襲おそいかかってくるようなクソ野郎モウフオも珍めずらしくないのだ。ぼんやりしていたら、命がいくつあっても足りない。不意に背後から声をかけられたときも、その直前に反応した。

「マ——」

「何の用だっ……！」

マリアローズは振ふり返りつつ腰こしの鞘さやから偽にせ劫ごう火かを抜ぬき放った。

不届き者はそう悪くない反射神経の持ち主らしく、とっさに飛びのいたが、マリアローズの斬ざん撃げきを完全にかわすことはできなかった。

不届き者、いや、不届き半魚人の鼻の頭に赤い横線が走ってい

る。

「な──」

　迂う闊かつな半魚人は鼻を手でこすり、自分の血がついた指をじっくり見つめると、たった今飛びすさった距きょ離りの約二倍を両足跳とびしてマリアローズにつめよってきた。

「何すんねんワレェ！　いきなり斬きりつけよるボケがどこにおんねや！　死ぬがな！　いっくら不死身のわしかてなあ！　死んでまうわ！　ズッパリ斬られてもうたらな……！」

「うっさいな突とつ然ぜん後ろから声なんかかけてくるから悪いんだろ！　そんなやつはぶった斬るのが常識！　あたりまえ！　至し極ごく当然！　何年この国にいるんだよ、このバカ魚！　それくらいわかるだろ！　あ、わかんないか、そりゃそうだよね、脳も魚並みだもんね！」

「アホダラァ！　誰が魚やねん！　ナンボなんでも魚よりかはマシやっちゅうねん！」

「結局、魚と競せりあう程度だってことでしょ！　そんな力強く主張するようなことでもないと思うけど！　よく恥ずかしくないよね！」

「恥ずかしいわ！　そらなあ！　わしかて人としてなあ！　もうちびぃっとこう、高いレベルで勝負できたらなあとか思わんでもないけどな！　しゃあないやろが！　生きとし生けるモン誰にでも何にでも、超こえようにも超えられへん限界っちゅうのんが──ってなんでわしが魚と人との狭はざ間まで苦く悩のうせなあかんのじゃボケェッ！　わしはどこもかしこも人間レベル満たしとるわ！　一部わりとぎりぎりかもしれへんけども！」

「ねえ、自分で言ってて悲しくならない？」

「うぐしっ。な、泣いてへんで。ぶしっ。こ、こんなんただの塩水や。ひぐしっ。た、たとえ少ぉーしばかり悲しくてもなあ、人前で涙なみだはよう見せん。わしは漢おとこや……！」

　両りよう眼めから滂ぼう沱だとあふれる涙にしか見えない塩水を手でぬぐいながら、顔を真っ赤にして鼻をぴくぴくさせているカタリを前にしていると、ものすっごく疲つかれてきた。マリアローズ

は背負い袋ぶくろからハンカチを出してカタリに渡わたし、今や身体からだの隅すみ々ずみまで侵おかそうとしている脱だつ力りよく感に耐たえきれず、深くて大きなため息をついた。

「……で、何か用」

「お？　むおあ、ふまんのう、ふぐしっ、ふんっ、ふんっ、ふぃ～ん、ぬぐあっ」

「ちなみにそのハンカチ、返さなくていいから」

　きみが奇き声せいっていうか変な音発しながら洟はなかんだり血とか涙とか鼻水とかぬぐったりしたハンカチなんて三十回洗せん濯たくしてから完かん璧ぺきに殺さつ菌きん消毒しても使いたくないから、とまでは言わないでおいた。さすがにそこまで言ってしまったら、いくら相手がバカスカ半魚人でも少々角が立つだろう。ここは自制だ。大人になれ。イメージしろ。そうだ。僕は大人だ。たいていのことでは怒おこったりしない。何事も余よ裕ゆうを持って対処する。悠ゆう然ぜんと。むしろエレガントに。

「──それで、何か用？」

　無理だ。

「って、何回訊きかせるんだよ！　三度目だよ、これで！　さっさと用件を言え！　ないなら今すぐ消えろ！　はい、悪あく霊りよう退散！　しっしっ！」

「何やねんお前じぶん！　古来短気は損気っちゅうてなあ！　あるがな！　用事的なモンはあるけどなあ！　用があらへんかったら声かけたらあかんのかい！　ええやろ、そんくらい！」

「……いいけどさ、べつに」

「そ、そんないきなりトーンダウンされてもな……調子狂くるうやろ、わしとしても。なんや、何かあったんかい」

「な、ないよ。何も。ぜんぜん。ないから、気にしないで。てゆうか、するな」

「ほぉ～う……？」

カタリは半魚眼を疑わしそうに細めてマリアローズの顔をじろじろ見たけれど、それ以上、追つい及きゆうしてはこなかった。

ひょっとして、気を遣つかわれちゃったのかな。

何だよ。半魚人のくせに。

生意気な。

「ま、ええわ。ほんで、肝かん心じんの用事やけどな。お前じぶんおらへんかな思て事務所行く途と中ちゆうやったんやけど、どうやらその必要はなさそうや。小遣い稼かせぎがてら、ちょっくらアンダーグラウンド行かへんか」

「え？　きみと僕の二人で？」

「べつに二人でなくてもええねんけど、そんな危ないトコちゃうしな。それに、人数増えたら分け前も減ることになるで」

「じゃ、二人で行こっか」

「……即そつ決けつやな」

「あたりまえでしょ。たしかに世の中にはお金で買えないものもあるけどね。お金がないと買えないものはもっとたくさんあるんだよ。てゆうか、ほとんどそうだから」

「お前じぶん、目がダラーになっとるで……」

「いいよ。どう言われても。儲もうかるならね。痛くも痒かゆくもないし。さ、行こ。早く早く」

マリアローズはカタリの背中を押して進ませた。どこへ行くのかなんて知らなかったし、わりとどうでもよかった。お金が儲かるなら細かいことは気にしていられない。じつは、ＺＯＯに入って以来、当たるとでかいけれど、外れると骨折り損のくたびれ儲けという日々がつづいている。一人でこつこつちまちまアンダーグラウンドにもぐっていたころと比べると、トータルではプラスだが、とにかく安定していない。もしアクシデントに見み舞まわれてしばらく稼げないような事態になったら、どんな悲ひ惨さんなことになるか。そんなことを、たとえば目の前の半魚人に言ったら、何ゆうてんねん、そんときはアレやろ、わしらがおるやろが、とかたわけた

ことをぬかして笑いそうな気がする。でも、そういう問題じゃないんだよね。助けてくれる仲間がいても、ちゃんと自立はしていたいっていうか。そこまで甘えたくないっていうか。平気で他人に依い存ぞんしちゃえるようになるのが怖こわいっていうか。

　ふとしたときに考えてしまう。

　今の状態が永続するわけがない。何かの拍ひよう子しに壊こわれてしまうか、自分から壊してしまって、また一人きりでやってゆかないといけなくなるかもしれない。想定しうる最悪のケースに備えておかないと。覚かく悟ごくらいはしておかないと、いざというときに泣くのは自分だ。

　そうだ。

　泣くのは僕なんだ。

　いけない。わりとどうでもいいなんてダメだ。細かいこともどんどん気にしてゆかないと。お金はたしかに何にも増して大切だし、そのお金を稼ぐことは常に最優先・最重要事じ項こうだけれど、身の安全を確保できなければ何の意味もない。命を失ってしまったら、銀行の預金残高を見てにんまりすることもできないのだ。

「ところでさ、どこ行くの？」

「んあ？　腐ふっ腐っ腐っ。それはアレやなあ、ついてからのお楽しみっちゅうやつや」

　なんだかカタリの笑い声が腐くさっているように聞こえたのが気になった。

　あまりいいとは言えない予感がした。

　カタリはクァラナド歓かん楽らく街がある第九区を左手に見ながら環かん状じよう通を時計回りに進むつもりらしい。ということは、第九区に入口があるＤ９か、それとも第二区に入口があるＤ２か。Ｄ９は半ハー死フデ者ツドたちがうごめく喪そう神しん街オレストロだし、Ｄ２は上層が多種多様な穴あな大だい蛇じやと土竜もぐら人びとの棲すみ家かである穴大蛇の巣で、下層は竜りゆうの寝ね床どこだ。カタリは、そんな危ないトコちゃうしな、と言っていた。アンダーグラウンドで危なくないと言えば、まずメリクル迷めい宮きゆうが思い浮うかぶが、それならＤ５かＤ６なので、環状通

からマーベラス・グッダー・ストリートに入って西へ向かうか、環状通を逆時計回りに進むかするはずだ。だとしたら、どこだろう。Ｄ３？　いや、あそこは。じゃあ、もしかして、Ｄ４か。もしくは、Ｄ２に穴場があるとか。

　予想はすべて外れた。

　第八区はエルデェＭイニオンＥ機術士匠合Ｕやら錬金士Ａ組合ＧやらのエルデンⅠ支部があったり、デザイナーズブランドの工こう房ぼうがあったり、各種工場があったりする工業地域だ。今やα大陸における最大の流行発信地と呼んでも大おお袈げ裟さではないだろうエルデンの、ある意味では心臓部とさえ言えるかもしれない。無数の煙えん突とつを生やした大きな建物が密集していたり、輸送専用の大型馬車が行き交かっていたり、ピシッとした服装の男女が忙いそがしげに歩きまわっていたりして、ちょっと独特の雰ふん囲い気きがある街並みなのだが、そうは言ってもエルデンだし、この街の十三に分けられた街区にはそれぞれ地上とアンダーグラウンドとを結ぶ出入口が存在する。全街区のうち第七区だけは例外で二つあるのだが、他ほかは一つずつだ。

　繰くり返しになるけれど、第八区にもアンダーグラウンドへの出入口はある。

　ただ、見てのとおり、その出入口の前も、そこまでの坂道にも、まったくひとけがない。

　人気がないからだ。

　というか、はっきり言って、はあ？　Ｄ８ィ？　誰がそんなとこ行くか畜生フアツク、冗じよう談だんじゃない、そんなとこ行くくらいならなあ、下水ドブさらいでもしてたほうがずっとマシなんだよ、マジで、といったあたりが、この閑かん散さんとした出入口から入りこめるアンダーグラウンドＤ８怪かい虫ちゆうの坩堝るつぼガンズゲイルに対する侵クラ入ツ者カーたちの一いつ般ぱん的な評価だ。

「──うん。やっぱ帰ろっと」

「待てや！」



踵きびすを返したら、カタリに襟えり首くびをつかまれて息がつまった。

「ぐ、ぐるじいってば……！　は、放せ！　帰る！　やだ！　なんで僕がガンズゲイルなんて、何が悲しくてこんなとこ……！」

「せやから小こ遣づかい稼かせぎやっちゅうとんのやろ！　お前じぶん、金めっちゃ好きやんか！」

「お金はそりゃあ好きだけど！　かなり！」

「儲かるでえ！　ターゲットは七色黄おう金ごん虫ちゆうの羽や！　まあ、七色黄金虫はめったに見つからへんのやけども、黄金虫やったらそうでもない！　その殻からっちゅうたら一枚千ダラーくらいから上物やったら一万ダラー程度で売れよる！　せやけどわしは黄金虫には興味はない！　狙ねらいはあくまでたまあに黄金虫に紛まぎれとる七色黄金虫や！　他はぜえんぶマリアローズ、お前じぶんの取り分っちゅうことでええ！　わしが七色黄金虫探すの手伝ってくれよるんやったらな！」

「じゃ、行こっか」

「変わり身早ッ」

「何やってんの？　行くんでしょ。ほら、さっさとして。きみが前で、僕はその後ろに隠かくれるから。せいぜいしっかりばっちり盾たてになってね。何？　不満なの？　バカじゃない？　てゆうか、バカ確定だね。手伝ってやるんだから、それくらいあたりまえでしょ？」

「……え、ええねんけどな。べつに」

「いいんだったらうだうだ言ってないで早く。さあ。時は金なりだよ。さあ。さあ！」

「わ、わかったがな！　お、押すな！　押さんでも行くっちゅうねん！」

　カタリは半円形のＤ８出入口に向かって歩を進めた。普ふ通つう、アンダーグラウンドの出入口といったら、効果のあやしい魔ま法ほう陣じんだの魔法円だのが描えがかれていたり、落書きがあったり、貼はり紙があったりするものだが、ここには一いつ切さいそのたぐいのものがなく、味もそっけもない単なるトンネルといったおもむきだ。閑散としていることもあって、むしろ、多少人の手が加えられている洞ほら穴あなと言ったほうが近いか。もちろん中は真っ暗のようだ。カタリは出入口の手前で、じゃーん、とか言いながら、ＺＡＵ１のおしゃれなバッグから筒つつ型がたの携けい帯た

い照明器具らしきものをとりだした。

「何を隠そうこれがミソやねん。ただのライトに見えるかもしれへんけどな。黄金虫の外骨格にふくまれとるハイキチンっちゅうモンに反応するようにできとんのや。ハイキチンっちゅうのんは錬れん金きん術じゆつでも生成可能で、いろんな用よう途とで使われとんのやけど、天然モンのほうが質がええ。このライトも錬金術でハイキチンを大規模生成しよる際に使うグッズなんやで」

「能書きはいいからさっさと行って。ほら」

　カタリは不満そうに口を尖とがらせながらスイッチを入れてライトを点灯させた。なんだか少し緑色がかっているが、光量はなかなかのものだ。これなら暗くら闇やみの中を歩きまわることくらいは十分できるだろう。カタリは振ふり向かずに、ほんなら行くで、と言ってからごくりと唾つばをのみこみ、いよいよＤ８に足を踏ふみ入れた。その瞬しゆん間かんだった。

　サアアッともザアアッともガサガサガサッともつかない音がした。

　耳みみ障ざわりなくらい、かなり大きな音だった。

　その音とともに、闇が退いていった。

　Ｄ８の中は依い然ぜんとして真っ暗なのに、マリアローズはそう感じた。

　だって、ほら、カタリがライトをあてた遠くの壁かべが、奥のほうへ向かって動いている。

　じつのところ、その不思議な現象の正体について、推測というかほとんど確信していると言ってもいいくらいのものが、すでにマリアローズの頭の中には浮うかんでいた。あの音やてらてらと黒光りしている姿などからして、もしかしたらアレかもしれない、まあアレだろう、アレに違ちがいないと断定せざるをえない状じよう況きようではあったのだが、認めたくなかった。認めてしまうと、精神が崩ほう壊かいしてしまいかねない。聞かなかったことにしたい。見なかったことにしよう。黒くて脂あぶらっぽくて気持ち悪くて嫌きらいで大嫌いで生理的に受けつけないアレの大群が、壁と言わず床ゆかと言わず天てん井じようと言わずほぼ全面にびっしりと張り

ついて密集していて、カタリがＤ８に入った途と端たん、一いつ斉せいに逃にげだしたなんて、きっとマリアローズの妄もう想そうにすぎない。そんなはずがない。そういうことにしておこう。

「……ほ、ほんなら行くで」

　半魚人も同意見らしく、少しどもりつつさっきと同じことを言ったわけだが、やりなおしというか仕切りなおしというか、ようするになかったことにしましょう、という言外の提案だとマリアローズは理解して、うん、とうなずいた。それ以外に何ができるだろう。正直、たぶん、もう思考能力が半分くらい破壊されてしまっている。身体反応にも変調をきたしているようだ。鳥とり肌はださえ立ってないって、変だし。どうでもいいか。考えないほうがいい。

　今は頭をからっぽにして、ただひたすら半魚人のあとをついてゆこう。

　からっぽに。

　死体になったような気分で。

　無理だ。

　できっこない。

　怪かい虫ちゅうの坩堝るつぼガンズゲイル。

　その名のとおり、ここは怪虫ガウンドと呼ばれる節足動物に似た異界フリー生物クスたちの巣そう窟くつらしい。

　それから、一説によると、地上だけでは飽あきたらず地下にまでその勢力をのばしているアレのアンダーグラウンドにおける最大の棲せい息そく地帯で、根こん拠きよ地ちでもあるという。

　だからといって、まさかあそこまですごいというか、ものすごくひどいとは思わなかった。

　ここが侵クラ入ツ者カーたちの間で絶不評なのもうなずける。

　誰が好きこのんでこんなところにくるものか。

　Ｄ８に入ってから、もう百メーテルくらいは進んだだろうか。す

でにアレの気配は遠ざかり、このあたりは単なる無人の洞どう窟くつといった風ふ情ぜいだけれど、油断は禁物だ。何が待ちかまえているかわかったものじゃない。できれば知らないままでいたい。知らずにすむのなら知らないほうがいいことも、世の中にはたくさんあるのだ。ただ、お金が欲しいか欲しくないかと言えば、めちゃくちゃ欲しい。稼ぎたい。大おお儲もうけしたい。マリアローズをＤ８に繫つなぎ止めているのはそれだけだ。お金。ダラー。一万ダラー。十万ダラー。百万ダラー。千万ダラー。

「……お前じぶんなあ、金額ブツブツ呟つぶやきながら歩くのんはやめえ」

「じゃあ、気が紛まぎれるような小話でもしてよ。もちろん、おもしろいやつね。つまんなくて笑えなかったら罰ばつ金きん一万ダラーもらうから」

「なんでわしがお前じぶんに一万ダラーやらなあかんねん」

「罰金払はらう方向で話が進んでるっていうのは、一応、自覚があるって判断していいのかな」

「ダァホ。わしの頭ン中はなあ。ネタの宝庫やで実際。おもろうてたまらんネタがざっくざっくのわっしゃわしゃや。売るほどあるっちゅうねん」

「にわかには信じがたいね。試ためしに披ひ露ろうしてみてよ。当然、つまんなかったら罰金だよ。いいでしょ？　ネタの宝庫らしいし、僕を笑わせる自信くらいあるわけだよね？」

「おお、ええで。望むところや。よっしゃ。コレなんかどや。あんなあ、昔々のことやねんけどな、山ン中にな、まあ、中くらいの山や、その麓ふもとにな、ありょ？　わし、山ン中ゆわへんかったか。ゆうたな。麓や。訂てい正せい、訂正。そこにやで、年老いた夫ふう婦ふが住んどったわけや。老夫婦っちゅうことやな。ほんでな、その老夫婦の、どっちやったかな、ええと、どっちでもええか、この際、とりあえずじーさんでええわ、そのじーさんがやな──」

「何それ。最初から失しっ笑しょう狙ねらい？」

「ちゃうがな！　こっからがええとこや！　じーさんが川で洗せん

濯たくしとるときにやな、上流のほうからやで、あたりまえやけどな、こう、むっちゃでかっ、ちゅうかんじの竹が、た、竹？　竹やったかな。まあ、ええわ。でっかい竹がやな、こう、ぶぅーん、ぶぅーんて……」

　カタリがいきなり足を止めた。

　ぶぅーん。

　ぶぅーん。

「……何ぶーんぶーん言ってるのさ。てゆうか、なんで止まってるの？」

「い、いや。わ、わしはゆうとらん」

「じゃあ、誰が」

「だ、誰っちゅうか――」

　何か思うところでもあったのか、カタリがライトを斜ななめ上に向けた。

　魂たましいが抜ぬけそうになった。というか、たぶん半分くらい抜けた。

　でかい。

　ただでかいだけでこんなに気持ち悪いなんて。

　蠅はえだ。

　くそでかい蠅だ。

　どれくらいでかいかと言うと、普ふ通つうの蠅の何倍、というよりも、人間の子供くらい、という説明の仕方のほうがわかりやすいだろう。

　そんな蠅が飛んでいる。

　しかも、一匹ぴきではなかった。

　ライトの光に照らされて見えただけでも三、四匹はいる。

「い、一応、ゆうとくけどな……？」

　カタリはあとずさりかけて、踏ふみとどまった。

「そんな、害はないらしいで？　襲おそってきたりもな、せえへんっちゅう話や。よっぽどのことでもないかぎりはな。フツーの蠅と同じでな。こう、飛んできよって、ぶつかったりはするかもせえへんけど、とくにな、攻こう撃げきっちゅうわけやないみたいやし……」

　一万ダラー。十万ダラー。百万ダラー。千万ダラー。僕は今こそ試されている。この恐きよう怖ふに打ち克かてるかどうか。負けてしまえば、お金は手に入らない。一ダラーも。ゼロ。無だ。それはやだ。冗じよう談だんじゃない。がんばれ。がんばるんだ、僕。

「す、進むで」

「す、進めば？」

「す、進むからなっ。ええんやなっ」

「しつこいってのっ。さっさと進んでよっ」

「よっしゃあっ！　行っくでえっ……！」

　カタリが唾つばをのみこんでから足を一歩前に踏みだした。その直後だった。是ぜ非ひもない。マリアローズは思いきりカタリの背中を蹴け飛とばした。カタリは、のうわっ、と叫さけびながらつんのめった。感謝して欲しい。おかげで、轟ごう音おんと言ってもそれほど大おお袈げ裟さではない羽音を立てながら急接近してきた巨きよ大だい蠅ばえの突とつ撃げきを食くらわずにすんだのだ。ただ、カタリにしてあげられることはここまでだった。マリアローズはカタリの背中を蹴った反動を利用して踵きびすを返した。

「きゃあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　半魚人の嘘うそつき。嘘つき腐くされ半魚。何が襲ってこない、だ。あの蠅。巨大蠅。怪虫ガウンドというやつの一種か。間ま違ちがいなく逞たくましい顎あごでカタリに噛かみつこうとしていた。もしそうではなかったとしても、やっぱり無理だ。あんなやつらが飛び交かっているなか、黄おう金ごん虫ちゆうだの七色黄金虫だの

を探すなんてできっこない。物理的には可能でも、精神的に不可能だ。それに、アレ。ああ、思い出したくない。アレの大群。大脂羽蟲ゴツキー。ダメだ。ダメダメだ。ダメすぎる。ここは絶対に無理だ。マリアローズは駆かけた。必死で駆けた。無む我が夢中だったけれど、半魚人の不細工な悲鳴は後ろから聞こえつづけていたような気がする。どうやら、怪虫ガウンドどもに群がられ食い散らかされ半魚人ができあがったりはしていないようだから、振ふり返らずにひたすら駆けた。

　やがて外に出た。

　地上だ。

　日の光だ。

　新しん鮮せんな空気だ。

　アンダーグラウンドに巣くっている異界フリー生物クスたちは、キング・グッダーの古代九く頭ず竜りゆうの呪のろいによって地上には出てこられないので、もう安心なのだが、マリアローズは足を止めなかった。走りつづけずにはいられない気分だった。ああ、生きてるってすばらしい……！　そんなふうに、自分自身の中に息づいている生命の躍やく動どう感やみずみずしさや大切さをしみじみと実感している今この瞬しゆん間かんが、バカバカしくてしょうがない。

　何やってるんだ、僕ってば。何だよ、この一日。一人で勝手にドツボにはまってうじうじ悩なやんだりして。とんでも園長マスターなんかに相談してバカを見て。お金に釣つられてアホアホ半魚人の腐れ仕事につきあって痛い目に遭あいかけて。間ま抜ぬけだ。大間抜けだ。特大間抜けだ。超ちよう絶ぜつ膨ぼう大だい間抜けだ。こんなはずじゃないのに。地道、堅けん実じつ、謹きん厳げんが僕のモットーなのに。や、嘘じゃないって。本当だってば。バーン！　ドーン！　ドカーン！　みたいなのは僕の趣しゆ味みじゃないんだ。趣味じゃないっていうか、そういうのは僕にはあわないんだ。できないし。そんな能力はないってことはよく知ってるし。賭かけ事なんかにも手を出したことがないし。一生やらないと思うし。一ダラーを笑う者は絶対一ダラーに泣くと思うし。時間を無む駄だにするのがとことん嫌きらいだし。てゆうか、許せないし。暇ひまがあればお金を稼かせぎたいし。暇なんてそもそもないし。好きな言葉は「生産性」だ。生産性があることが大好きだ。生産性がないこ

とには興味がない。それから、「効率」だ。なけなしの力で、最大限の成果を上げないといけない。だから、効率をよくしないといけないんだ。それなのに、どうだ。この一日。生産性。ない。何もない。皆かい無むだ。効率。悪すぎる。てゆうか、成果がゼロなんだから、かけた労力にかかわらずゼロだ。いずれにせよ、評価に値あたいしない。費ついやした時間も体力も知力もぜんぶ、何もかもが無駄だったということだ。その間に一人でメリクルでもぷちぷち狩かっていれば、数百ダラーか、うまくすれば数千ダラー、もしかしたら一万ダラーくらい稼げたかもしれないのに。ようするに、マイナスってことじゃないか。損だ。まいったよ。損だよ。損しちゃったよ。大損だよ。何だよ。やってられないよ。何だよもう。最悪だよ。超最低ＳＵＣＫ。

いつの間にか走るのはやめて歩いていた。

結構長い距きょ離りを移動したようだ。

第五区か。

鉄てつ鎖さの憩いこい場だ。

公園がある。ベンチだ。あいている。座ろう。疲つかれた。ものすごく、疲れた。

うなだれて、気がすむまでそのままじっとしているつもりだった。

といっても、いつになったら気がすむんだか。

わかんないけど、いいや、どうでも。きっとそのうち復活するでしょ。このごろ失敗っていうかダメな日ばかりだし。ぜんぜんうまくいかないし。今日はいいかんじかな、とか思っても、次の日は最低だったりするし。そんなの慣れっこだしさ。

何もないよりは、いいのかもしれないし。

新しい発見だってないわけじゃないし。

自分に対しても、ＺＯＯの人たちに対しても、あ、こういうところもあるんだ、とかね。そういうのはしょっちゅうだし。

一人だったころは何もなかった。同じようなことを繰くり返すだ

けの毎日で。それに満足しているとか、不満だとか、そんなことは関係なく、生活のためにそうせざるをえなくて。考えることも、感じることも、億おつ劫くうっていうか、遠くて。どこか投げやりだった。あきらめていた。そんなに落ちこむこともないかわりに、嬉うれしいことも、楽しいこともほとんどなかった。

「──マリア？」

　今は違う。

　顔を上げると、少し灰色がかった青い目と翡ひ翠すい色の目に見下ろされていた。

「あ……ユリカ。それに、サフィニアも」

「どうしたの？　こんなところで。様よう子しゅが変だったけど……何かあった？」

「え？　そ、そお？　そ、そおかな、べ、べつに何もないよ？」

「……本当……ですか……？　本当の……本当に……？　嘘は……あまり、いい結果を……招かないと思いますが……」

「や、サフィニア、それ、なんか微び妙みように脅おどしっぽくて怖こわいんだけど……」

「……す、すみません……そういう、つもりは……ただ、わたしの……周りでは……そうしたことが……よく起こるので……」

「そ、そうなんだ。き、気をつけるよ」

「……そうして……ください……お願いします……」

　サフィニアの眼まな差ざしは真しん剣けんそのものだ。正直、ちょっと引く。でも、サフィニアにしてみれば、自分がいるだけで周りに迷めい惑わくがかかるのではないかと本気で危き惧ぐしているらしいので、真ま面じ目めにならざるをえないのだろう。その点はすでにマリアローズも了りよう解かいしているし、茶化す気にはなれない。サフィニアの前では口が裂さけても言えないけれど、本当に思いがけない不運に見み舞まわれたりしたらたまらないし。

「で──僕のことなんかよりも、二人は何してるの？　買い物と

か？」

「正しえい解かい」

　ユリカがにっこり微笑ほほえんだ。黙だまっていてもかわいいけれど、笑うと余計に、ため息をついてしまいそうになるくらい、ものすごくかわいい。

「サしやフィニアに、服を選んでもらおうと思って」

「服？　なんでサフィニアに？」

「……じちゅは、わたし、服とかあまりよくわからなくて。でも、いちゅも医い術じゆちゆ士し服ふくだけでしゅごしゅわけにもいかないでしょう。しょれで、必ひちゆ要ようなときは、だいたいサしやフィニアにちゅきあってもらうことにしてるの。ね」

「ええ……わたしで、よければ……というかんじですが……ユリカの服は……かなり、選び甲が斐いがあるので……」

「あ。それ、わかる。だって、ユリカ、何着ても似合いそうだもん。それだけに、あれもこれも着せてみたい、ってかんじになるよね」

「しょ、しょうかしら」

「……そうなんです……本当に……ユリカと一いつ緒しよだと……お店の人も……とても、協力的というか……盛りあがって……」

「あ、あれはただ、おもしろがってるだけじゃないの？　みんな楽ししょうだから何も言わないことにしてるけど、なんだか玩具おもちやにしゃれてるみたいで、ちょっと苦手で……」

「や、それはもう、誰が見てもそれだけの素材ってことだよ。ほんと。絶対。間ま違ちがいないってば。あー。パリティヒップスっていうブランドがあるんだけど、そこの服とか、ユリカ、すっごい似合うだろうなあ。知ってる？　カンダヴァストリートの手前の角にシギストっていうビルがあるんだけど、そこにお店が入ってるんだよね」

「……いえ……シギストは、知っていますが……」

「行ってみてよ。四階だから。ちっちゃいお店だけど、すぐわかると思うよ」

「しょれなら、マリアも一緒に行かない？」

「へ？」

　まったくの不意打ちだったので、びっくりして思いっきり目を見開いてしまった。数秒してから、ユリカの言葉を反はん芻すうした。一緒に行く。どこへ？　ユリカの服を買いに。シギスト。パリティヒップス。ああ。楽しそう。すっごく楽しそうだ。本当は憧あこがれていた。どうせ高いモノなんて買えないから、せめて見るだけでも、という気持ちでお店回りをしているときに、いかにも友だち同士といった雰ふん囲い気きの人たちがきゃっきゃきゃっきゃ騒さわぎながら服を選ぶ様子を眺ながめていると、友人一人いない我が身のわびしさが骨身にこたえた。そういう経験が一度もないだけに、うらやましくてたまらなかった。それに、デザイナーを名乗る人物にモデルをやらないかと誘さそわれたときは、揺ゆれまくる心を抑おさえるのに死ぬほど苦労したくらい、かわいい服もきれいな服も大、大、大好きなのだ。ユリカの服を選ぶ。それも、サフィニアと一緒に。どきどきしてきた。行きたい。是ぜ非ひご一緒したい。でも、僕なんかが行ってもいいのか。



「──あ、もちろん、マリアにも都ちゅ合ごうがあると思うから、無理にとは言わないけど……」

　ユリカの表情が少し硬かたくなった。いきなり黙りこくったものだから、急な誘いにマリアローズが困っているのではないかと思ったのかもしれない。ある意味、困ってはいるんだけど。めっちゃ行

きたくて行きたくてたまらないんだけど、勇気が出てこないっていうか。自分ごときが交ざっていいのか、とか。邪じや魔まにならないかな、とか。何しろ、繰くり返しになるけど、そういう経験がないものだから、何か失礼なことをしたりして、嫌きらわれちゃわないかな、とか。悪いほうに悪いほうに考えちゃって。

　でも、ここで断ったら、絶対、間違いなく、後こう悔かいする。

　マリアローズはうつむいて、深呼吸をした。

　ダメだ。顔が熱い。緊きん張ちようしてる。どうしよう。ちゃんと喋しやべれないかも。だけど、がんばろう。一いち巡じゆん月げつ前の僕だったら、きっとがんばれなかっただろう。でも、今は違う。ちょっとかもしれないけれど、少なくとも、変わりたいと思っている。そうだ。がんばるんだ。

　顔を上げるのと同時にベンチから立ちあがった。

「い、行く。行くよ。てゆうか、行きたい。行かせて。め、迷惑じゃなければ、だけど」

「迷惑だなんて」

　ユリカがまばゆいばかりの笑顔でマリアの右みぎ腕うでをとった。

「しょんなはじゅないじゃない。バカね、マリアったら」

「……はい……心強い、です。わたしなんかより……くわしそうだし……」

「や、そ、そうでもないよ？　期待されると、ちょっとアレだけど……まあ、好きなことは好きなんだけどね……？」

「しょれじゃ、行きましょう！」

「……あと……買い物が、終わったら……どこかで、甘い物でも……マリアさんが、お嫌いじゃなければ、ですが……」

「好き好き！　大好き！　やばいくらい好き！　いいね！　それ、最高！」

思わずあいている左手をサフィニアの右腕にかけてしまった。やりすぎかな、とも思ったけれど、サフィニアはいやがるそぶりを見せなかった。だったら、放すのもかえって変かな。変だよね。楽しいし。とっても楽しいし。

右にユリカ。左にサフィニア。三人で腕を組んで歩いた。

頭の中はユリカに着せたい服と、みんなで食べる甘い物のことで一いつ杯ぱいで、他ほかのことはすべて消し飛んでいた。

今日はいい一日になりそうだと思った。

それどころか、もうとっくにいい一日だ。

最高の日だ。



memory of hysteric youth

　この吹ふき溜だまりの街で、ちっぽけな現実のために僕らは戦う。

　たとえばそれは金だ。

　露ろ店てんで挽ひき肉にく入りのパンをあがなうための十ダラー真しん鍮ちゆう貨かだ。

　明日の明日を、見えもしない未来を買うための一万ダラーＧＭ合金貨だ。

　夢を追ってこの街にたどりついた者は、やがて夢よりも足あし許もとばかり見るようになる。

　彼はたまに地面に転がっている一ダラーアルミニウム貨を求めているのだろう。

　あるいは、人の足許を見て五百ダラー銀貨か千ダラー金貨をゆすろうとしている。

　くる日もくる日も飽あくことなく、僕らは現実のために戦う。

　見果てぬ夢はもう捨てた。

　現実以外の何かのために戦うなんて正気の沙さ汰たじゃない。

　青くさい餓が鬼きか、道理を知らない愚おろか者か、よほどの物好きの所業だ。

　餓鬼や馬ば鹿かや物好きは恥はずかしげもなく白昼堂々夢を見て、むなしくその影かげを追う。

　たとえば名声を、名めい誉よを、勇名、美名、英名を。

　そしてたまには称しよう号ごうを。

hysteric youth
ヒステリック・ユース

竜殺しリュー

「──ドラゴンスレイヤぁぁ？」

　まーたこのバカはぬけぬけとアホなことをぬかしちゃってる。正直も何もそんな感想しか抱いだきようがなかった。何しろ半分ほど人間じゃないからしょうがないのかもしれないが、ヤツ的にしょうがないからといって、やさしく受け止めてやる義理なんかマリアローズにはない。それに、バカにはバカだとわからせてやるほうが親切というものだろう。

「そぉーんな自分の頭の中身はからっぽですって公言するようなこと言ってないで、どうせなら、なんかさ、こう、もっと現実的な話をしようよ。ちゃんと実のある話をさ」

「ようゆうわ。ようするにお前じぶんの現実やら実やらっちゅうのんはいっつもアレやろ。早い話がゼニやろが」

「その、なに？　どらごんすれいやあ？　だっけ？　とかいうのよりは、実際、お金のほうが遥はるかに現実的だと思うんだけど」

「ふっふーん。せやけどダイジョーヴイッ」

「なーにがヴイッ、だよ」

「ヴイッ。ヴイヴイッ」

　お昼前の動物園事務所で調子に乗りまくって両手でＶサインを作ってグイグイ迫せまってくる半魚人のボケナスカボチャをいったいどうしてくれよう。てゆうか、めっちゃキモイんですけど、その動作。かなりうざいし。なんだかやたらと頭にくるし。半分じゃなくぜんぶ魚なら煮にるなり焼くなりして食べてしまえばいいのだろうが、いや、もし完全無欠に魚でも顔がこのままだったりしたら、やっぱりとうてい食欲がわいてこないし、生きがよくてもなんとなく腐くさっていそうなので食用にはなるまい。

　かくなるうえは一つだ。

　大脂羽蟲ゴツキーと同じだ。

　撃げき退たいするしかない。

「寄るな！　さわるな！　息をするな……！」

「ヴギッ」

　マリアローズはヴイヴイヴイッと接近してくる腐れ半魚人の喉のど仏ぼとけに手刀を叩たたきこんだ。半魚人は喉を押さえてうずくまった。わりとクリーンにヒットしたから、これでしばらくおとなしいだろう。ちょっとだけすっきりした。人がいやがってるのにやめないからだ。当然の報むくいだ。ざまあみろ。

「まったく」

　マリアローズは第二王立銀行内動物園事務所名物大円えん卓たくを囲む椅い子すに座りなおしてため息をついた。ユリカが棚たなの整理をしながらくすくす笑っている。マリアローズの隣となりの椅子に腰こしを下ろしているサフィニアの目にはさっきから、というよりもずっと一人の人物しか映っていないようだ。その人物は椅子に座ったまま腕うで組ぐみをして目をつぶっている。眠ねむっているのか。眠っているのだろう。どこでも寝ねられるのだ。ＺＯＯうちの園長マスターは。それはもう、ありえないくらいどこでも。ついでに、いつでも。即そくだ。瞬しゅん間かん的に入にゅう眠みんできてしまう。あれはもう才能だ。睡すい眠みん障害持ちにとってはさぞかしうらやましいだろう、ただ、マリアローズとしては実害をこうむったというほどではないが、何度も思わず「ふっ」と笑ってしまうというか笑うしかないというか、むしろ走りだすしかないというか、そんな目に遭あったので、うらやましいというよりは恨うらめしい才能だ。まあ、園長マスターの才能がそれだけならまるっきり園長マスターの資格がないわけだが、これがまた、あながちそうでもないからタチが悪い。とりあえず、園長マスターの隣の椅子にちゃんと座っているのにあまり気配を感じさせない、だが、目を凝こらしてよく見れば忠犬的なオーラを出しまくっているラハン大陸出身の元アッサシンを心しん酔すいさせてしまうような、ある種の魅み力りよくというか、カリスマ、そうしたものを備えていることは間ま違ちがいない。

　それにしたって昼寝のしすぎだと思うけどね。

　まだお昼になってないし。

　てゆうか、このクランの人たちってば、せっかく集まってるのに何もしないんだろうか。

　そうは思うのだが、自分自身がその何かを提案するのは少々はばかられる。なにしろマリアローズは新参者だ。正しよう真しん正しよう銘めいの新人だ。新入りのペーペーだ。期待のニューフェイスだ。いや、期待の、かどうかは正直かなり微び妙みような線というか、おそらく期待はべつにされていないだろうが、とにかく言いだしっぺになるのは結構勇気がいる。

　いろいろと考えてしまうのだ。

　マリアローズに考えつくことといったら、アンダーグラウンドのメリクル迷めい宮きゅうに行ってメリクルをしばき倒たおしたいとか、地中砦とりでアヴァシーで亜人ボーグをこづきまわしたいとか、テトルアープで下等蜥蜴とかげ人じんを虐ぎゃく殺さつしたいとか、せいぜいその程度でしかない。ＺＯＯのみんなにしてみれば、そんなのぜんぜん物足りないんじゃないか、相手がショボすぎて、臍へそで茶をわかしちゃうんじゃないか、とか。だいたい、どれも侵クラ入ツ者カーの狩かり場、稼かせぎ場だ。べつにおもしろいわけでも楽しいわけでもない。マリアローズは実際、お金が大好きだし、一ダラーでも二ダラーでも多く稼ぎたいのだが、みんなをそれにつきあわせていいのか、とか。

　いろいろなことを考えてしまう。

　考えれば考えるほどドツボにはまって、そもそも、仲間って何？　みたいなめんどくさいことまで考えはじめて、頭を掻かきむしりたくなり、もうどうでもいいや、やめ、やめ。いっそ投げやりになってしまいたいのに、なりきれず、だって、投げ捨ててしまうには惜おしいから。

　頭を悩なやませて、転げまわったり叫さけびそうになったりするけれど、それでも楽しいから。

　仲間の定義なんてよくわからないけれど、とにもかくにも彼らはここにいるから。

　これは甘い罠わなだ。

　どうにもこうにも抜ぬけだせない。抜けだそうという気にもいまいちなれない。まんまとはまってしまったのが運のツキだ。

「……お、あ、あー、おー。声は出とるみたいやな」

　カタリが喉をさすりながら立ちあがってマリアローズをにらみつけた。

「あー、いったぁ。何すんねんお前じぶん。無敵で不死身のわしやなかったら死んどるとこやで。喉は地味に急所なんやからな。頼たのむでホンマ」

「無敵で不死身のわしっていうか、きみの場合、無益で不気味なイワシってかんじだよね」

「誰が無益で不気味じゃアホダラァッ！」

「イワシは否定しないんだ」

「そんなんわざわざ否定せんでもやな！」

「顔を見たら、魚類だってことはーいち目もく瞭りよう然ぜんだもんね」

「せやな。こう、目ぇがな。離はなれとってな。唇くちびるあたりもな。いかにもっちゅうかんじやしな。エラなんかもあるしな──て、エラなんかあるかい！　唇も目ぇも人間仕様や！　わ、し、は、ニ・ン・ゲ・ンじゃああああぁぁぁぁっ……！」

「そんなに力説しなくても。なんか、気の毒になってくるし」

「わしもわしが気の毒や！」

「だろうね。ご愁しゆう傷しよう様さま」

「お悔くやみの言葉はやめえ！　死んどらんがな！　ぴちぴちしとるっちゅうねん！」

「ぴちぴち跳はねてるの？」

「跳ねとらんっ！」

　カタリはぜいぜい息を荒あららげている。あからさまに叫びすぎだ。見ているだけでも疲つかれるので、つきあっていると十倍以上疲ひ労ろうする。そんなわけで、こっちは主に精神的に疲労困こん憊ぱいしているというのに、あっちは半魚人のメガスタミナでわりと短時間で回復を果たして、ぐふふ、と気色の悪い笑い声をもらし

た。

「マァァァァリアローズ。お前じぶんがそないなふうに余よ裕ゆうシャクシャクっちゅうかんじでいられるんも今のうちや。長らく中断の憂うき目に遭っとったわしの話のつづきを聞きよったら、お前じぶんは間違いなく目の色を変える。わしに感謝さえすることやろう」

「そんなに自信があるなら、聞いてやらないこともないから、早くその話のつづきとやらをしてくれない？　いいかげん飽あきてきたんだけど。きみの顔を見てるのとか、きみの声を聞いてるのとか、そのあたりに。かなり」

「ずいぶんなゆわれようやな。せっかくひとが儲もうけば──」

「そういうことを先に言わないから、きみはいつまでたっても人類に進化できない半魚人なんでしょ？」

「まだ言い切っとらんがな！」

「さ、詳しよう細さい、詳細。きびきび説明してね。要領よくね。はい、はい、はい、早く早く！」

　というわけで、マリアローズたちＺＯＯの一行はアンダーグラウンドＤ２にやってきた。

　Ｄ２上層は穴あな大だい蛇じやの巣と呼び習わされている。一説によると、穴大蛇は手足が退化した下等竜りゅうだと言われていて、レトロドラゴンという呼び名もあることから、「このエリアをレトロドラゴンズバロウと呼ぼう運動」みたいなものを誰かが盛りあげようとしたこともあるらしいが、結局、定着しなかったようだ。それはそうだろう。レトロドラゴンズバロウなんて、とくに呼びやすいわけでもないし、ものすごくかっこいいわけでもない。穴大蛇の巣で十分だ。

　実際、いかにも穴大蛇の巣というかんじの場所でもある。

　簡単に言えば、このエリアは、穴大蛇が作った直径三～四メーテルくらいのトンネルが入り組みまくっていて、そこに棲すみついた土竜モール人マンどもがさらに小さなトンネルを縦じゅう横おう無む尽じんに掘ほりまくっている、穴だらけの迷路みたいな洞どう窟くつだ。

　ちなみに、穴大蛇はかなり臆おく病びようなタチらしいので、その気になって探そうとしないかぎり、めったなことでは出会えない。土竜人も好戦的とは言いがたい異界フリー生物クスで、彼らのほうから襲おそいかかってくることはほとんどないようだ。人間の存在を感知すると、だいたい逃にげてしまうから、侵クラ入ツ者カーの獲え物ものにはなりづらい。それでも何かうまみがあるようで、穴大蛇や土竜人を執しつ拗ように狙ねらいつづける侵クラ入ツ者カーもいるみたいだが、圧あつ倒とう的な少数派だし、経験や専門的な知識がないと稼げない狩り場だろう。そんな一部の専門家以外にとっては、穴大蛇の巣は通り抜けるだけの道でしかない。メリクル迷宮を遥はるかに上回る迷路っぷりなので、通り抜けて下層にたどりつくのもそうとう大変ではあるのだが。

「こういう道順なんかを身体からだで覚えちゃえるのは、たいしたもんだと思うけどね」

「もっと褒ほめてくれたってもええんやで？」

「や、これ以上褒めるのは空を飛ぶよりずっと困難なんで、期待されても」

「つまらんのう。わしは褒められてのびるタイプやのに」

　カタリは懐かい中ちゆう灯で行く手を照らしてふんふんふんふん鼻歌をうたいながら、どんどんどんどん穴大蛇の巣のトンネルを突つき進んでゆく。そんな半魚人のあとをぞろぞろとついてゆくのは、マリアローズ、ユリカ、それから約三名だ。ちなみに、この約三名の内訳は、ＺＯＯの園長マスタートマトクンと元アッサシンのピンパーネル、凶きよう星せいの下もとに生まれた天才魔ま術じゆつ士しサフィニアなのだが、わけあって三人とも赤で「×」と描かかれたマスクを装着している。マスクはカタリが用意した。その意味あいは、まあ、今回はお休み、員数外、いることはいるんだけどいないということにする、といったあたりだ。よって、発言禁止。隊列は常に最さい後こう尾び。そこから動かないこと。それなら事務所に残ってもらえばいいのに、三人にも一応ついてきてもらったのには、前述したとおりわけがある。

「しっかし、ドラゴンスレイヤー、ねえ……」

「どや。いよいよそのときが近づいてくるに従したごうて、お前じぶんも胸が躍おどってきたんちゃうか」

「ぜんっぜん」

「夢がないのう。ドラゴンスレイヤーっちゅうたら漢おとこの浪漫ロマン、その定番中の定番やで。まあええわ。わしの目的はその称しよう号ごう。お前じぶんの目的は竜が隠かくし持っとるお宝──」

「しょれで、わたしはしょのおちゅきあいなのね」

「ご、ごめんね、ユリカ。やっぱりユリカは興味ないよね。竜りゅう狩がりなんて」

「いいのよ、マリア。カタリにあちこち連ちゆれまわしゃれるのは慣れてるもの」

　ユリカに微笑ほほえみながらそう言ってもらえるとほっとする。つい勢いで半魚人の話に乗ってしまったが、考えてみたら馬ば鹿か話ばなしだ。Ｄ２下層竜のドラグ寝床レアで竜を狩る。それ自体は素す敵てきなアイディアだと思う。あくまで、それが可能なら、の話だが。

　だって、相手は竜だ。マリアローズが一人でせかせか侵クラ入ツ者カー稼か業ぎように精を出していたころは、竜どころか下等竜でさえ標的の候補に挙げたことすらない。巣に財宝をためこんで、その質や量で自分の優ゆう越えつを誇こ示じするという竜の習性は有名だし、それゆえに竜狩りは一いつ攫かく千せん金きんの近道なのだが、命あっての物もの種ぐさだ。エルデンには星の数ほどの侵クラ入ツ者カーがいるのに、竜を狩ったと公言する者は大勢いても、実際に竜殺しの証しよう拠こを掲かかげて見せる者はほとんどいないのだ。一方で、意い気き軒けん昂こうとして竜の寝床へ向かい、二度と戻もどらなかった者は決して少なくないという。竜の眷けん属ぞくではあるものの、水に映った月と水に浮うかべた小皿ほども差があるといわれている下等竜ですら、マリアローズのような二流、三流の侵クラ入ツ者カーにとっては、天変地異よりもずっと恐おそろしい異界フリー生物クスだ。

　自分が竜に挑いどむ日がくるなんて、正直、思ってもみなかった。

　わしがゲットしたスペシャル情報によると、ちょうどまだ若わこうてヨワヨワの狙い目の竜がおんねん。そんなカタリの一言がなければ、さすがにその気にはなれなかっただろう。

　竜は年をとるごとに大きく、強く、逞たくましく、さらに賢かしこくなってゆく。若い竜は体格も知能も下等竜とさして変わらないのだという。それでも竜なので、巣を作って稀き少しよう鉱物や宝物をためこむ習性はある。若いだけでれっきとした竜だから、その喉のど元もとにはちゃんと逆鱗シグルマと呼ばれる器官がある。それを持ち帰れば、竜狩人かりうど、ドラゴンスレイヤーを名乗っても、嘘うそつき呼ばわりされることはないわけだ。

　カタリが言うには、竜狩りを専門に行う侵クラ入ツ者カーの集団がある。その名も逆シグ鱗ルマ会リスという歴史の古いクランで、彼らは若い竜の巣を見つけると、すぐには狩らずにある程度まで育つのを待つらしい。その期間は十年とか二十年に及およぶというから驚おどろきだ。

　なんでも、その逆シグ鱗ルマ会リスのメンバーにカタリの知りあいがいて、ある会合の酒の席で、最近、若い竜の巣を見つけた、という話をその男から聞いた。ところが逆シグ鱗ルマ会リスの見立てでは、その巣の作り方がいかにもまずい。近くに成竜の巣がある。あれではそのうち成竜の怒いかりを買うだろう。若い竜は成竜に殺されてしまうに違ちがいない。よくあることだし、逆シグ鱗ルマ会リスには「年若い竜は殺さない」との規定があるので仕方ないが、まったくもってもったいない──というようなことを、その男はカタリを焚たきつけるように語ったらしい。

　もちろん、あくまでカタリの見解だ。その男にそんな意図があったかどうかは疑わしい。ただ、マリアローズとしても興味深い話ではあった。竜自体はどうでもいいが、竜のお宝は垂すい涎ぜんの的だ。しかも、ＺＯＯには戦力がある。古竜や成竜ならどうかわからないが、下等竜とさして変わらないという若い竜なら、さして無理をせずに狩ることもできるのではないか。

　例によって例のごとくマリアローズは何の役にも立たないだろうが。

　若じやつ干かん、いや、だいぶ心苦しいけれど、物欲には勝てなかった。

　そうしてＤ２の出入口にたどりついた瞬しゆん間かん、腐くされ半魚人のクソバカがどこからかあのマスクをとりだして、トマトクン、ピンパーネル、サフィニアの三人に装着するよう命じた。マリアローズとしては、え、え、何、どういうこと、という気持ちだっ

た。実際、そんなふうに口走った覚えもある。すると半魚人は、さも当然みたいな魚顔をして、何ゆうとんねん、と鼻で笑ってみせた。トマトクンやらピンパーネルやらサフィニアやらの力ぁ借りてもうたら、わしにドラゴンスレイヤーの称号名乗る資格はあらへんやないか。地力に差ぁがありすぎやからな。ちゅうわけで、今回はわしとマリアローズ、お前じぶんと、あとは治ち療りよう要員っちゅうことでユリカ、この三人でのぞむで。やるでえ！　気合い入れてなあ、いてこましたるでえ……！

　━とか何とか言っておきながら、しっかり三人を連れてきたのは、もしものときのための保険ということだろう。

　その保険がなかったら、マリアローズといえども絶対にこんなやばそうなところまできたりはしなかった。

　トンネルの先にくすんだ橙だいだい色いろの光が見える。

　カタリが懐中灯を消した。

　風を感じる。

　奇き妙みようになまあたたかい風だ。

　光に向かって歩いてゆくごとに、風は強まって気温も上がっていった。

　もともと下り勾こう配ばいだったが、かなり傾けい斜しやがきつくなってきた。

　これはもう急斜面といっても言いすぎではないだろう。

　とうとうトンネルから出たときは、地上に戻ってきたかのような錯さつ覚かくを起こした。

　そこは起き伏ふくの激しい、激しすぎる赤せつ褐かつ色しよくの荒こう野やだった。

　いや、違う。そうじゃない。一見、広々としているように見えるし、たしかに広いことは広いのだが、荒野とはいえないだろう。ここはやはりアンダーグラウンドだ。サンランド無統治王国首都エルデンの地下にある空間にすぎない。視線はちゃんと岩がん壁ぺきに突つきあたるし、もちろん空が見えるわけでもない。松明たいまつ

やら何やらの照明もない。それなのに、どうしてこんなにも明るいのか。

　カタリが思いっきり息を吸いこんで吐はきだした。

「ん～～～～～これこそまさしくっ！　竜ドラ界ガンドの空気や！　ねばっこく感じるくらい濃こゆいこの空気には、発光成分を始め有効成分や栄養素がぎょうさんふくまれとって、おかげで竜は何も食わんでも三巡じゆん月げつや四巡月は平気で生きられよるらしいからな。わしら人間かて、きっと健康になれるはずやで！　ドラァァァゴン・パゥワァーでのお！　ガッハハハハ！」

「へえ……なんか、たしかに濃いね。でも、健康になるどころか、逆に息苦しいかも」

「しょうね。肺にたまって、息を吐いてもちゃんと出ていかないような気がしゅるわ」

「そんなんはなあ、所しよ詮せん、慣れや、慣れ！　ようするに気合いやで！」

「ふごふごふご」

「あーっ！　あかんがな！　トマトクン！　ゆうたやろ、発言は禁止や！　あれやからな！　トマトクンとピンパーネルとサフィニアの三人は、まあ、ここにおることはおるんやけども、おらんっちゅうことになっとんのやさかい、頼たのむでホンマ！」

「ふご」

「せやから、あかんっちゅうとんのやないか！」

　カタリはトマトクンを黙だまらせてから、念のためということか、ピンパーネルとサフィニアをにらみつけた。三人とも、こんな馬ば鹿か半魚人のたわけた所業につきあってやらなくたっていいのに、律りち儀ぎというか、間が抜ぬけているというか、何というか。マリアローズとしては、トマトクンが何か警告や忠告でも口にしたのではないかというあたりが気になるのだが、カタリにそんなことを考えろと言っても無む駄だだろう。だって、顔にしても、頭の中身にしても、人間基準にはぜんぜん達してないわけだし。

「さあさあ、何はともあれ、レッツラゴーや！　竜がおるんはもっ

と向こうやからな！　この竜のドラグ寝床レアは、異界の扉とびらがあるっちゅうよりも、バッチリゴッキリ竜ドラ界ガンドとつながってもうてるんや！　その意味では、わしらはもう竜ドラ界ガンドに足を踏ふみ入れとるっちゅうても過言ではあらへんのやで！　つまーりィィッ！　気分は微び妙みようにドラゴンスレェェイヤァァァッ！　否いな！　半分くらいはドラゴンスレイヤーっちゅうてもええやろ！　ぐえへへへ！　もてるでえ！　女の子にモテモテや！　何？　死語やて？　知らんがな！　モテモテ王に、わしはなるッ……！」



「……結局、そういうのが目的なわけね」

「ほんなら行っくでえ！　皆みなの衆、わしについてくるんや！」

「無視ですか」

「おっしゃー！　ゴーゴーゴーやッ！」

　カタリは呵か々か大たい笑しようしながら駆かけだした。マリアローズたちが出てきた先はわりと急な斜面の途と中ちゆうだったので、駆け降りていったと言うべきか。いや、すぐに当然のごとく足を滑すべらせて盛せい大だいにすっ転んだので、
「あぁぁぁぁぁぁぁぁれぇぇぇぇぇぇぇぇ」と叫さけびながら転がり落ちていったと言ったほうが正しいだろう。というか、これ以上くわしく述べようがないくらい正確な状じよう況きよう描びよう写しやだと思う。

　マリアローズは半魚人ほどの慌あわて者でもうっかり者でもアホでも愚ぐ図ずでも魯ろ鈍どんでもないので、ユリカ、それからマスクを装着させられているトマトクン、ピンパーネル、サフィニアと順々に顔を見あわせて、深々とため息をついてから、慎しん重ちように足場を確かめつつ斜面を降りていった。その途中で気づいたのだが、ここの岩が赤褐色に見えるのは、岩自体の色だけでなく、どうやら空気にふくまれているという発光成分が赤みを帯びているせいもあるらしい。おかげで、岩だけでなく、仲間たちまですこし赤っぽく見える。色はまあいいとしても、この濃い空気には当分馴な染じめそうにない。地上の夏とはまた違う、なんだか押しつけがましい暑さにも閉口した。はっきり言って、かなり不快だ。こんな環かん境きようでふだんどおりの動きができるだろうか。正直、自信がない。いつもどおりに動けたって、ぜんぜん足りないっていうのに。

　斜面の下まで転げ落ちたカタリは、信じられないことに打ち身や擦すり傷程度の怪け我がしかしておらず、治療の必要はなさそうだった。半分人間じゃないだけあって、無駄にタフだ。

「モテモテ王になるまで死なれへんからな！」

「マジで死なないでよね。迷めい惑わくなんだからさ」

「しょうよ。しょうなったらしょうなったで、こっちは大変なんだから」

「こ、この扱あつかい……！　し、しびれるゥゥゥッ！　なんやもう、だんだん快感に……」

　マリアローズたちは変態半魚人を先頭にして竜界との境界地帯を

目指した。おそらく、本来ならば、竜の巣が多く存在するその一帯こそが竜のドラグ寝床レアと呼ばれるべきなのだろう。その場所までたどりつくには、思っていたよりも長い距きょ離りを歩かなければならなかった。三十分ではきかない。一時間。それ以上かかった。上層の穴あな大だい蛇じやの巣を抜けるだけでも一時間半はゆうに消費したので、この時点でアンダーグラウンドに入ってから約三時間が経過したことになる。ということは当然、帰りにも三時間かかるわけだから、往復だけで六時間か。

「きみさ、これでそれ相応の収しゆう穫かくがなかったら、永遠にモテモテ王にはなれないと思ったほうがいいよ」

「大だい丈じよう夫ぶやて。もうすぐわしはドラゴンスレイヤーのモテモテ王で、お前じぶんは億万長者や。信じろや。信じれば夢は叶かなうもんやで。浪漫ロマンや。それが漢おとこ道みちの神しん髄ずいや」

「そんな暑苦しそうな道、僕は歩きたくないけどね」

「もう歩いとる、歩いとる。気づかんうちにのう。ほれ、この先が漢道の曲がり角や」

　それが漢道かどうかは微妙というか絶対にそんなことはないと思うが、バカみたいに高く険しい岩壁を回りこむようにして右に曲がると、とうとう頭上に空らしきものが広がった。地上と違ちがって青くはない、オレンジ色の空だ。夕焼けや朝焼けのようでもあるが、それにしては明るすぎる。あの色は例の空気のせいか。雲まで赤っぽい。

　空に浮うかんでいる、まばゆいばかりに輝かがやくピンク色の丸い物体、あれはもしかして太陽なのだろうか。

　なんてことだ。

　もしそうだとしたら、ここには太陽が二つもある。

「これが、竜ドラ界ガンド……」

「ちゃうちゃう。ちゃうで、マリアローズ。ホンマの竜ドラ界ガンドはやな、ここから十五日ばかり歩いて、日照りのマルグレ千本柱トアラスっちゅう場所を越こえた先にあるんや。わしはまだ行ったことあらへんねんけど、竜ドラ界ガンドには太陽が十一個あるらし

いで。この境界地帯には、そのうちでも輝きの強い二個の光しかよう届いてこおへんのや」

「じゅ、十一個も？　てゆうか、どれだけ広いんだよ、竜ドラ界ガンドって」

「そらトーゼンあれやろな。わしらの世界よりかはずっと広いんちゃうか。竜はボデーがでっかいからのう。ちなみに、竜っちゅうのんは共食いするんやで。なんせ、竜ドラ界ガンドには竜と下等竜しかおらへんからな。毎日ばっくばく食う必要はないみたいやけど、竜同士は互たがいに捕ほ食しよくしあう関係なんや。弱肉強食っちゅうことやな」

「竜もいろいろ大変なんだね」

「せやで。一いつ般ぱんに、竜が成竜になるまで百年、古竜になるまでは三百年かかるとゆわれとるわけやけども、古竜になれるのんは一ひと握にぎりの一握り、あとはぜえんぶ他ほかの竜に食われてまうっちゅう話や。古竜にまでなりよると、身体からだの大きさだけやなく、だいぶ賢かしこうもなるさかい、あとはもう悠ゆう々ゆう楽々長生きコースみたいやけどな」

「ふうん……」

　マリアローズたちは言ってみれば峡きよう谷こくの底のような場所にいる。竜ドラ界ガンドまで十五日ということは、まだまだ歩かないといけないのだろう。侵クラ入ツ者カーとして、いつもそれなりの備えはしているので、たとえここで一いつ泊ぱくや二泊することになっても問題はないが、想像していた以上の大仕事になりそうだ。若い竜とはいえ、竜退治だし、軽く考えていた、というよりも欲に目がくらんでいたマリアローズが悪いのだが、もっと悪いのは、もちろん言いだしっぺの半魚人だ。そうはいっても、ここまできてしまった以上、手ぶらで帰るなんて冗じよう談だんじゃない。ごちゃごちゃ考えていても仕方ないし、ここはもう腹をくくって行くところまで行くしかないか。

　そのつもりでカタリに導かれるまま赤せつ褐かつ色しよくの硬かたい地面をてくてく歩いていたのだが、不意に保険組の一人が足を止めてふごふご言った。

「せやから、喋しやべったらあかんて──」

　カタリはすかさず振ふり向いて注意を与あたえようとした。まったくたかが半魚人ごときに何の権限があって、という話だが、今回ばかりは思いなおしたようだ。

　トマトクンが前方を指さしている。

　マリアローズは半魚人よりも早くそちらに目をやった。

　たぶん、トマトクンが示そうとしているのはあれだろう。だいたい三十メーテルくらい先に転がっている大きな岩がん塊かいだ。高さは約三メーテル、幅はばも同じ程度か。見たところ、崖がけの上か途と中ちゅうから転がり落ちてきた岩のかたまりといったかんじだ。とくにあやしい様子はないが、我らが動物園ＺＯＯの園長マスターには独特の嗅きゅう覚かくが備わっていて、人や生き物の気配を察知する能力に長たけている。そのトマトクンがわざわざ知らせようとしているのだ。まだよくわからないが、きっと何かあるに違いない。

「よっしゃ、ピンプ──は、おるようでおらんのやったな。せやった、せやった。わしとしたことが。フム。ほんならここはいっちょわしが」

「いいよ。僕が行くから。きみは存在自体がうるさすぎるし。てゆうか、うざいし。ユリカ、サポートお願い」

「まかしぇて」

「う、うざいって何や！　どういうことやねん！」

「そういうところがうるさくてうざいんだけど」

「……えらいすんまへん」

「わかってくれればいいんだよ。どうせすぐ忘れちゃうにしてもね」

「いくらわしかて、そんなすぐにはよう忘れんわ！」

　もちろん呆あきれたが、同時にちょっと感心してしまった。本当に、こんなにすぐ忘れてしまうなんて、いったいどんな頭の構造をしているんだろう。

いずれにしても、こんな抜ぬけ作半魚人に嫌いや味みを言ったり叱しかりつけたりしていても疲つかれるだけだ。マリアローズは、しぃっ、と唇くちびるに人差し指をあてて脳のう腐ぐされ半魚を黙だまらせるなり、足音を忍しのばせて岩塊に近づいていった。後ろにはユリカもついてきてくれているので、緊きん張ちよう感かんはあっても、おかしな緊張の仕方はしていない。視野が広いようなかんじがするし、音もよく拾えている。ほどよく力が抜けて、その上でちゃんと集中できているようだ。

岩塊に背中をつけて、ユリカに手信号と表情で合図した。

（じゃ、行くね）

（気をちゅけて）

（うん）

マリアローズは息をひそめて静かに、ゆっくりと岩塊を回りこんでいった。なんとなくだが、何かがいそうな気はする。ほとんど勘かんだ。物音は聞こえない。ひょっとしたら、相手も気配を殺そうとしているのか。だとしたら、こっちに気づいていることになるが、そのへんについては何とも言えない。でも、たぶんいる。もういるとしか思えない。果たして、それは人間か。あるいは、人間以外か。

もうすぐ裏側が見える位置だ。

マリアローズは立ち止まってほんのすこしだけ顔をのぞかせてみた。すぐに戻もどした。

いた。

おそらく人だ。

地べたに座って岩塊に背中をもたれさせていた。

もう一度見てみた。すぐに顔を引っこめて、また出した。じっと見つめた。

大きな外がい套とうを身につけて、フードを目ま深ぶかにかぶっているので、顔はわからないが、体形からすると男だろう。薄うす汚よごれた編み上げ靴ぐつはだいぶ底がすり減っている。着ている

ものだけでなく、男の脇わきに置かれているずいぶんでかいバックパックもふくめて、全体的に旅りよ塵じんにまみれているといった風ふ情ぜいだ。旅の途中？　こんな場所で？　そんなことはべつにどうでもいいのだが、男はぴくりともしない。もしかして、死んでいるのか。いや、待て。よく見ると、かすかに肩かたが上下している。息はあるようだ。耳をすますと、すう、ひゅう、ぐう、みたいな、これって寝ね息いきじゃないのか。寝ちゃってる？　ここで？　一人で……？

　マリアローズが手て振ぶりで合図をすると、ユリカがやってきて隣となりから顔を出した。

（眠ねむっているのかしら）

（そうみたい）

（どうしてこんなところで）

（さあ）

　二人で目と目を見あわせて少し考えたが、どうもユリカは放ほうってはおけないと思っていそうな顔つきだ。ユリカらしいといえばユリカらしいのかもしれない。しょうがないか。

　マリアローズはまず咳せき払ばらいをしてみた。男は動かない。舌打ちが出た。

　今度は、あの、と声をかけてみた。少しだけ反応があった。男は身じろぎして、だが、それだけだった。ため息が出た。

　仕方ないので、次は声の音量をかなり上げてみた。

「あの！　ねえ！　そこでのんきに寝ちゃってるバカ——じゃない、そこの人！」

「……んふ？」

　ようやく目が覚めたようだ。

　男はゆっくりとあっちを向いて、それからこっちを向いて、しばらく静止していたかと思うと、いきなり「ダアアアアアッ」と叫さけびながら飛び起きた。よくわからないが、大おお慌あわてで何か

探しているのか。どうもそのようだ。それは地面に転がっていた。剣けんだ。かなり大きい。トマトクンの大剣には及およばないが、古びた両手持ちの剣だ。男はその柄つかを両手で引っつかんで、構えようとしたが、その前にもう一度、マリアローズとユリカを見て、「ほうあっ」と素すっ頓とん狂きような声を出し、両手剣を放り投げて尻しり餅もちをついた。

　その拍ひよう子しにフードが外れて、あらわになった顔はまだ若い。髪かみはぼさぼさで、ずいぶん垢あか染じみているが、肌はだには張りがあるし、無ぶ精しよう髭ひげもちょぼちょぼ生えているだけだ。ひょっとしたら、二は十た歳ちになっていないかもしれない。

「あ、あわわわ、あわ、あわわわわ……」

「大だい丈じよう夫ぶ？」

　ユリカが声をかけると、男はぶんぶん首を縦に振った。その振り方が異様だ。というか、いつまで振ってるわけ？　いつまでも？　止まらないの？

　間もなくカタリと保険組もやってきた。

　男は地べたに座ったまま高速で首を縦に振りつつマリアローズたちを見上げている。

「なんや、コイツ」

　カタリが鼻をこすりながら首をかしげた。

「ひょっとしたらアレか。噂うわさに聞く首振り族っちゅうやつかい」

「……一度も聞いたことないんだけど。首振り族なんて」

「わしもあらへんけどな」

「あっそ」

「ちゅべたいのう。なんやお前じぶん、日を追うごとに、どんっどんどんっどんわしに対して厳しゅうつめたぁーなってきてへんか？　わしの気のせいか？　そのうちアレやで、いくらわしかて身

も心も凍こごえてまうで、ホンマ」

「きみが寒いこと言うからでしょ」

「なんっもわかっとらへんなあ、お前じぶん。これが最近流は行やりのギャグスタイルなんや。クールクールからいきなりホットでドカーンと大だい爆ばく発はつっちゅう寸法やねんか。つまり、さっぶいトークは布石やねん。ちいっとハイラヴェルすぎて、素人しろうとにはわからへんか」

「しょんなことより、この人、平気なのかしら。首の振りしゅぎで脳のう震しん盪とうとか」

「だ、だだだ、だだだだ大丈夫っすっ！」

　男が出し抜けに立ちあがって両手で自分の頭頂部と顎あごを挟はさみこむように押さえた。それで首振りを止めようというのか。てゆうか、そうしないと止まらないってのは、人としておかしいと思うんですけど。

「す、すすす、すすすすすいません！　こ、こここ、こここここんなとこでひひひひ人に会うとはおおおお思ってなかったんで！
し、ししししかも、こここここんなにきききききれいな女の人になんてっ！」

　男の視線は縦に微び動どうしながら、明らかにユリカではなくマリアローズに向けられている。そもそも、ユリカの外見年ねん齢れいを考えると、その実年齢を知らない者が「きれいな女の人」なんて呼ぶとはちょっと思えない。もちろんサフィニアも女性だが、マスクをしているので、顔が半分以上隠かくれている。

　ああ、そう。そういうことね。

　マリアローズは両りよう眼めをすぼめて片方の眉まゆをつりあげてみせた。

「念のために言っておくけど」

「は、はははははいっ？」

「僕は女じゃないからね。生きながらえたいなら、それだけは間ま違ちがえないで」

「えっ！　じゃ、じゃじゃじゃじゃじゃあ、オカマ……？」

「へえ。早死にしたいんだ？」

　マリアローズは偽にせ劫ごう火かを鞘さやから抜いて男に斬きりかかろうとしたが、ユリカとトマトクンとピンパーネルとサフィニアに四人がかりで羽は交がい締じめにされた。そんなろくでもない出会い方をした無礼で不作法で不ぶ躾しつけな男と、なにゆえ行動をともにすることになったのかといえば、それはもう完全にうちのくそったれな半魚人のせいだ。あの考えなしで脳に白子並みの皺しわさえなくて見当違いで了りよう見けん違いの馬ば鹿か半魚が、あろうことか男と意気投合しやがったのだ。

　あのあと、わりと長い時間をかけてどうにか落ちつきを取り戻もどした男は、なぜ一人で竜の寝床にいるのか、何をしているのか、等々、問うてもいないのに訥とつ々とつと語った。マリアローズにはまったく理解も共感もできなかったけれど、その内容が半魚人の心の琴きん線せんに、まあ、そんなものがあればの話だが、とにかく心の琴線的なものにふれたらしい。曰いわく──、

「──オレは……ピンチカっていう国からきたんですけど、その……中部ミツ諸国ドラ域ンズにあって、マイナー国なんで、知らないと思いますけど、オレ……農家のセガレで。ただ、オヤジは昔、冒ぼう険けん者しやで、オフクロと出会って、それで、安定した暮らしを求めて冒険やめたらしくて、それで、農家っす。でも、オヤジ、近所の人たちに超ちようバカにされてたんす。なんでかっていうと、オヤジ、酒飲むと冒険者だったころの話とかするんすけど、それ、誰も信じてくれなくて。オヤジ、ムキになって、本当だ、本当だって、それが余計に嘘うそくさいとか言われて。オレは……もちろん、信じてます。オレのオヤジっすから。ムスコのオレが疑ってどうする的な。でも、マホタカさんも、カヅラさんもオヤジを笑いものにするだけで。オレ……悔くやしくて。当然、オヤジが一番悔しいはずなんすけど、で、そのオヤジが、去年──」

　お亡なくなりにでもなったのかと思ったら、博ばく打ちで借金を作ったあげく、行方ゆくえをくらませたのだという。ろくでもないオヤジだ。

「──オヤジ、悔しかったんだと思うんす。冒険者としては一流だったんすけど、農家としてはちょっと、ていうか、実際、かなりアレで……みんなを見返してやる的な。それできっと、オヤジ……男な

らここらでいっちょーいつ攫かく千せん金きん、とか考えて、こっそり博打に……」

　百歩譲ゆずってそうだったとしても、いや、そうだったとしたら余計ろくでもないオヤジだ。

「借金は、返したんす。畑とか家財道具とか、ぜんぶ売って……あと、オフクロの親に金借りて。それで……オフクロと妹は、実家に帰ったんす。もう村には住めないって……近所の目とかもあるし、どうせオヤジも帰ってこないって、オフクロは……妹も……でも、オレは……オレは、信じてるんす、オヤジのこと。オレは農家のセガレっすけど、オヤジ、オレが小さいころからよく言ってました。もし、おまえが何かを夢見ることがあったら、その夢は捨てるなって。なりたいものがあるなら、農家なんか継つがなくていいって。もう……継ぎたくても継げないっすけど。と、とにかくオヤジは……でっかい男でした。スケール的に。オレ、それだけはちゃんと証明したくて。よく話してくれたんす。竜りゅうを殺したときのことを。その話が、オレ、大好きで。いっつもせがんで話してもらって。マホタカさんもカヅラさんも、笑ってばかりで信じてくれなかったけど。それなら……てことでオレ、決めたんす。オヤジはいなくなっちまったけど、だったらオレが……今度はオレが、竜を殺す！　オレがこの手で！　親が竜殺しなら子も竜殺し！　親子二代で竜殺し！　オレはやる！　やってみせるぜ……！」

　そんなわけで、男は伝聞だけを頼たよりにエルデンくんだりまでやってきて、アンダーグラウンドＤ２に入り、何日もかけて竜のドラグ寝床レアまでたどりついたらしい。あからさまにツッコミどころ満まん載さいだが、一言でいえばアホだと思う。二言でいえばアホでバカだ。三言以上はいらない。言葉の無む駄だ遣づかいだ。それが一いつ般ぱん的な感覚だと思うが、半魚人にそんなものを期待してもしょうがない。わかってはいるのだが、やっぱりどうにかして欲しい。

「準備はええかぁッ！　ええなッ！　ええんやなぁッ！　行っくでえ、リューッ！　この先がいわゆる一つのわしらが目指す竜の巣やッ！」

「マジっすか、カタリさんッ！　この先が竜の巣っすかッ！　こいつぁ縁えん起ぎがいいや！　オレの準備はモチ完かん璧ぺきっす！　いつでもやれますよ！　かかってこいってかんじっすよ！」

「おおッ！　気合い入りまくりやな！　ええで！　その調子や！　よっしゃッ！　アレいくでえ！　ええな！　バッチリあわせてみせえ！　漢おとこならぁぁぁァ────────ッ！」

「やァァァッてみせるぜッ！　ホトトギィィィ─────スッ！」

「その意気や、リューッ！」

「はいッ、カタリさんッ！」

「ガッハハハハハハッ！」

「アハハハハハハハッ！」

　何がおもしろいのか楽しいのか知らないが、肩かたを組んで大笑いしている二人に向けて言っておきたいことが一つだけある。

　死んでしまえ。

「……てゆうかさ。悪い予感がするんだよね。あいつらのせいで、なんかとんでもないことになって、僕らまで巻きこまれたりとか……予感っていうか、容易に想像がつきすぎて怖こわいくらいなんだけど」

「でも、元気がないよりはいいんじゃない？」

　ユリカはやさしいから微笑ほほえみさえ浮うかべてそんなことを言うけれど、そこまで人間ができていないマリアローズには、ピンチカだかピンカラだかキンピラだか出身のリューとかいうアホが加わったことで、獅し子し身中の虫が二匹ひきになって、降りかかってきそうな火の粉は四倍くらいになったとしか思えない。

　とはいえ、目的の竜の巣はもうすぐそこだ。竜という異界フリー生物クスはじつに多種多様な巣を作るようだが、標的の若い竜は穴を掘ほって巣穴としているらしい。半魚人が言うには、マリアローズたちの目の前にそそり立っている高さ五十メーテルほどの丘おかの中腹にその巣穴があるとのことだ。丘の斜しゃ面めんはそう急でもないし、ごつごつしていて足場はいくらでもありそうだから、たやすく登れるだろう。巣穴がちゃんとあるのなら、そこまで行くだけは行けそうだ。ただ行けばいいってものじゃないだろうけど。相手は若くたって竜なんだし。なんてことを考えている間に、カタリとリューは勝手に丘を登っちゃっている。あっそう。もういいや。

二人で行かせようか。そう思ったりもしたが、ユリカが二人のあとを追いはじめたので、マリアローズも仕方なく足を進めた。保険組も無言でついてきてくれている。それだけが心の支えだ。

　丘を二十五メーテルほど登るのに要した時間は十分程度だった。

　マリアローズたちは、ごつごつした岩場でなんとかそれぞれ足場を確保して、丘の斜面に張りつくようにして立っている。

　若い竜の巣だという穴が口をあけているのは前方約十五メーテルの場所だ。

「……緊きん張ちようするね、さすがに」

「しょうね。気を引きしめてかからないと」

　ユリカもやや厳しい表情だ。それもむべなるかな。ここにくるまでの間、二度、空を飛ぶ竜の姿を見たのだが、姿形がはっきりと識別できないほど遠かったのにもかかわらず、ものすごい迫はく力りよくだった。まず、あれだけ遠くてあの大きさか、という驚おどろきがあって、その力強い翼つばさの運びと飛行速度に度ど肝ぎもを抜ぬかれて、どう考えてもあんなの絶対無理だから、と強く思わずにいられなかった。さいわいと言っていいのかどうか、彼らは成竜か、もしかしたら古竜かもしれないとのことだったが、これから狩かろうとしている年若い竜も、順調に育てばいつかはあんなふうになってしまうのだ。そのポテンシャルたるや、「恐おそるべし」を百回連続で唱えても足りない。今ごろになって心配になってきた。本当に大だい丈じよう夫ぶなんだろうか。

「ほな行くで、リュー。漢の花を咲さかすんや。大輪の花をのう。わしについてこいっ」

「はいっ、カタリさんっ」

　とくにあの二人が大いに心配だ。

　や、嘘うそです。本当はちっとも心配なんかしてないです。思ってることは一つです。

　いっそ、死んでしまえ。

　放ほうっておいても死んじゃいそうだけどさ。

　まだ打ちあわせも何もしてないのに、あの大おお馬ば鹿か野や郎ろう二人というか一人と一匹ぴきというか、もう二匹でいいか、超ちよう馬鹿野郎二匹は穴に向かって突とつ撃げきしやがったし。

「──って、ちょっ……いくらなんでも……！」

　マリアローズは超馬鹿野郎二匹を追った。ユリカも遅おくれずについてきた。保険組はどうだろう。確かく認にんする暇ひまがない。超馬鹿野郎二匹は無む駄だに無意味に速くて、もう穴に突入しようとしている。マジで？　嘘でしょ？　やめてよ。いいかげんにしてよ。アホだよ。アホすぎるよ。ありえないよ。最悪だよ。超最低ＳＵＣＫだよ。殺そう。あの半魚人は始末してしまったほうが世のため人のためＺＯＯのためだ。そうだ。殺す。絶対殺してやる。まあ、その必要はないかもしれないけど。

「うおおおおおおおぉぉぉぉぉっ……！」

　明らかに穴に突つっこんでいった超馬鹿野郎の片割れの声だった。なんだかものすごくびっくりすることがあったみたいだ。それが何かは知らないが、引き返したほうがよさそうな気がして仕方なかった。でも、ユリカは行くだろう。もちろんまったく似ていないけれど、カタリとユリカは姉し弟ていみたいに仲がいいのだ。ちらりと振ふり返ってみた。保険組もしっかりいる。一人だけ逃にげるわけにはゆかない。いくらマリアローズでもそこまではできない。くそ。なんでこんな。マリアローズは舌打ちをして、あきらめ半分で腹をくくって穴に飛びこんだ。

「──いいいいいいいやあああああああああああああ
あぁぁぁぁぁぁぁっ……！」

　ひどい。

　ひどすぎる。

　ダメだ。

　こういうことを許しちゃいけない。

　思いっきり悲鳴を上げながら心に去来するのは、驚きよう愕がくよりむしろ絶望と悲しみと、それから特大の怒いかりだった。

　岩を何らかの手段で掘くつ削さくして作ったのだろう穴の入口あ

たりは、幅はばがだいたい五メーテルで高さも同じくらいなのだが、奥のほうはずいぶん広そうだ。上から明かりが射さしているところを見ると、天てん井じように丘の上まで達する穴があいているのかもしれない。

彼または彼女は、その奥の広間みたいな場所に身を横たえ、首だけをもたげて、炎ほのおのように爛らん々らんと輝かがやく両りよう眼めでこちらを見ていた。

てゆうか、でっかいよ。

でかすぎだよ。

聞いてないよ。

何だよ、あれ。

竜りゆうだよね。

うん。それはわかってる。わかってるんだけどね。

マリアローズは、正直、立っているだけでやっとだった。さしもの超馬鹿野郎二匹も、入口から三、四メーテルも行かないところで呆ぼう然ぜんと立ちつくしている。マリアローズを追い越こしてすぐ足を止めたユリカが、ふう、とため息をついた。

「若い竜でも、じゅいぶん大きいものなのね」

「……そうだといいんだけどね」

「え？」

「や……僕の気のせいだといいんだけど……あれ、若い竜だとはどうしても思えないんだよね。竜のことなんてよく知らないし、はっきりした根こん拠きよがあるわけじゃないんだけど……」

「ふごふごふご」

トマトクンがマスク越しに何を言ったのか、知りたいような、知りたくないような、聞かなくてもだいたいわかるような。だから、よりにもよってそういう告白の仕方はどうかと思う、というかやめて欲しい。絶対にやってはいけないことだ。

「てへ☆」

　半魚人が振り返って、照れたような笑えみを浮うかべた。

「うっかり間ま違ちがえてもうたわ☆　こっちは成竜の巣やった☆」

　無理だから。これって、そんな気色の悪い笑顔とか、☆がついちゃいそうな口調とか、そういうのでごまかせるような軽けい微びな過失じゃないから。本気で償つぐなうつもりなら、その安い命の一つや二つや十や百は差しださないとダメだから。そんなもの断じていらないけどさ。

　それにしても、巣穴に超馬鹿野郎二匹ひきはともかくとして人間が五人も入りこんできたというのに、成竜は悠ゆう然ぜんとしている。その青あお紫むらさき色いろに輝く鱗うろこに覆おおわれた全長十メーテル以上の巨きよ体たいが下した敷じきにしているのは、血星ジグネ曜石ヴイアなどの稀き少しよう鉱石や、人間が作った金属製の武具や装そう飾しよく品ひんだろう。マリアローズでも知っているくらいなので有名な話だと思うが、かつて人間は何度も竜ドラ界ガンドに入りこんで竜たちと激しく戦ったらしい。もちろん、ずっと昔、魔導王時代の出来事だ。魔導王の軍門に降くだった竜もいたという。そうした時代の名残なごりで、竜ドラ界ガンドには人間の古道具がたくさんあって、それらは竜たちのコレクションになっているようだ。当然のことながら、ただの古道具じゃない。魔導王時代の人間が遺い棄きしたものだ。なかには秘宝に属するような貴重品もあるに違いない。あるなら、是ぜ非ひ欲しい。喉のどから手が出るほど欲しいけれども、そのためにあの成竜をどうにかしないといけないのだとしたら、ちょっと、いや、だいぶ考えてしまう。

「提案があるんだけど」

「おう。何やねん」

　この期ごに及およんで微び妙みように偉えらそうな半魚人のクソ生意気な態度には温おん厚こうなマリアローズもブチキレかけたが、今はそんなことを言っている場合じゃない。

「なんか、あっちからガーってくるかんじでもないし、それってすごくラッキーっていうか、何があっても見み逃のがしちゃいけない

幸運だと思うんで、ようするに逃げちゃわない？」

「いやだッ！」

　昔々あるところに、半魚人より先にぶんぶん首を横に振りつつ叫さけんだ馬鹿がおりました。

　昔っていうか今なんだけど、とりあえずその前に勘かん違ちがいしてもらっては困る。

「や、あのね、きみに意見なんて求めてないから」

「いやだ！　いやだいやだいやだッ！」

「……あーうっさい何なんだよもうこいつ、てゆうか何がそんなにやなんだよ！」

「オレはッ！　逃にげるのはいやだッ！　敵がすぐそこにいるのに！　スタコラサッサと逃げるなんて！　そんなの男のやることじゃなァァーい！　オレの言ってること！　違いますか、間違ってますか、間違ってないっすよね、カタリさんッ！」

「を？　お……おお、そ、そらまあ……」

「オレ、元農家のセガレっすけど！　男の──いやッ！　漢おとこが！　漢としてどんな道を歩くべきかっていうのは、わかってるつもりっす！　漢なら、逃げちゃダメだッ……！」

「せ、せやで！　そうや！　ようゆった！　ゆいよったな、このう！　それでこそや！　それでこそわしが見こんだ漢や……！」

「カタリさんッ！」

「リューッ！」

「行きましょうッ！」

「漢の道をぉぉぉぉッ！」

「どこまでもォォォッ！」

「そして永遠にぃぃぃぃヤハアァッ……！」

超ちよう馬ば鹿か野や郎ろう二匹は先を争って駆かけだした。一応、半魚人のほうは両手に愛用の変形斧おのを一本ずつ持っているし、元農家のバカセガレは両手持ちの大たい剣けんを半分引きずって走っている。あんなのが突とつ進しんしてきたら、さすがに成せい竜りゆうも黙だまってはいないだろう。マリアローズは頭を抱かかえたくなったが、ぐっとこらえて保険組を振ふり返り、マスクを外す仕し種ぐさをしてみせた。トマトクンとピンパーネル、サフィニアも心得たもので、打てば響ひびくような反応だった。すぐさまマスクを外して投げ捨てると、三人はもう危ないときの保険どころか頼たよりになりすぎる主戦力以外の何ものでもない顔つきになっていた。

「青エイ色ンジ竜アってやつだな」

　トマトクンが巣穴の奥に目をやって大剣の柄つかに手をかけた。

「あのでかさなら百年は生きてるだろう。わりと手て強ごわいぞ」

「へえ……わりと、ねえ……」

「まあ、なんとかなるさ」

　トマトクンは唇くちびるの片かた端はしをつりあげて、気を抜ぬくなよ、と皆みなに声をかけるなり走りだした。超馬鹿野郎二匹はもう青エイ色ンジ竜アのすぐそばにいる。のんびりしてはいられない。のんびりなんてしてないけどね？　この状じよう況きようでゆったりくつろいだ気分でいられるほど肝きもが太くないしね？　とにもかくにも、マリアローズはトマトクン、ピンパーネルの次くらいに駆けだした。ユリカはマリアローズの少しあとくらいで、サフィニアは最さい後こう尾びについた。青エイ色ンジ竜アがとうとう起きあがった。あんなに身体からだがでっかいのに、気味が悪いほど素す早ばやい身のこなしだ。

　ＧＹＨＹＹＹＹＹＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨ……！

　そして、このすさまじい咆ほう哮こうはどうだ。もちろん音量自体かなり大きかったのだが、それだけじゃない。聞く者の全身を芯しんから震ふるわせる低音に、金属質の神経に障さわるような高音も混じっていて、驚きよう愕がく以上に心がかき乱され、生まれてきてごめんなさい、みたいな気分にさせられる。正直、マリアロー

ズは一度、完全に立ち止まってしまったし、そのあとふたたび足を動かすまで体感的には何秒もかかった。追い抜きざま名前を呼んでくれたユリカの、それから肩かたを押してくれたサフィニアのおかげで、なんとか正気に返ることができたようなものだ。少々情けない気もしないではないけれど、しょうがないじゃないか。相手は竜なんだ。てゆうか、なんでこの僕が竜なんかと。バカげてる。夢でも見てるんじゃないの？　ちょっと前までメリクルあたりがお似合いな孤こ高こうの、というよりも寂さびしい孤こ独どくな侵クラ入ツ者カーだった僕がこれから竜とやりあおうとしてるなんて、やっぱり間ま違ちがってるよ。うん。間違ってる。信じられないくらい間違いまくってる。

　ちなみに、こんな途と方ほうもない状況下にいるマリアローズ並みかそれ以上に間違っている半魚人と元農家のバカセガレは、青エイ色ンジ竜アの足あし許もとで尻しり餅もちをついていた。あの咆哮を至近距きょ離りで聞いたのだ。その程度ですんで御おんの字といったところだろうが、ぼやぼやしてたら踏ふまれちゃっても知らないよ？　ほら、言ってるそばから、言ってないけど、青エイ色ンジ竜アが左の前まえ肢あしっていうか左ひだり腕うでを持ちあげたりしてるし。それって踏み潰つぶそうとしてるんじゃないの？　やばくない？　やばいよね？　トマトクンとピンパーネルも間に合いそうにないよ……？

「━━ムウォォッ！　あかんッ！　リュゥゥゥゥゥゥゥゥーッ……！」

　間かん一いつ髪ぱつだった。カタリが飛び起きざまにリューを蹴けり飛ばして自分も地面に倒たおれこみ、ゴロゴロ転がってすぐまた起きた。もう少しのところでカタリとリューをぺしゃんこにしそこねた青エイ色ンジ竜アは、だが、慌あわてず騒さわがず首を左右に曲げてあたりに視線を巡めぐらせた。きっとそれでトマトクンたちの姿が目に入ったはずだ。青エイ色ンジ竜アは、ふうん、やるっての？　あっそう、じゃあやるかい？　めんどくさいけど、まあ相手してやるよ、とでも言いたげな態度で一つ伸びをした。やばいかんじがビンビンしてしょうがない。ものすごく怖こわいのだが、なぜか近づけば近づくほど現実感が薄うすれてゆく。でかすぎるのだ。それに、いかにもドラゴン、これこそドラゴン、やっぱりドラゴンという見た目で、なんかこう、逆に嘘うそっぽい。だからといって勇気がわいてくるわけでもなく、さりとて逃げるわけにもゆかず、マリアローズはとにかくひたすら足を動かしてサフィニアを

追い抜き返した。前を行くトマトクンとピンパーネルが奥の広間に突入した。やや遅おくれてユリカが、それからマリアローズがつづいた。

「散開しろ……！　各自、サフィニアだけはカバーしてやれ！」

　トマトクンがそう叫さけびつつ大剣を肩にかつぐように構えて青エイ色ンジ竜アにまっすぐ向かっていった。ピンパーネルは右側面か後背に回りこむつもりのようだ。ユリカは素早く周囲を見まわして、サフィニアの右斜ななめ前に位置どった。カタリは向かって左側から両手に持った斧を振りまわして青エイ色ンジ竜アに突とつ撃げきしようとしている。リューも負けじと両手剣で地面を削けずりながら、カタリのあとを──って、あのバカセガレ、散開しろって言われたばっかりなのに。死んでしまえ。



「ぬうううううあああああああっ……！」

　残念ながらバカセガレが死んでしまう前にトマトクンが振りおろした大剣を、青エイ色ンジ竜アは華か麗れいにバックステップを踏んでかわした。着地するなり回れ右をしたその速度も並なみ大たい抵ていじゃない。もちろん、ただ単に回れ右をしたわけではなかっ

た。尻尾しっぽだ。青エイ色ンジ竜アは回れ右をしながら尻尾を振るった。青エイ色ンジ竜アの右側にいたピンパーネルは身を低くしてぎりぎりでこれをかわしてみせたが、トマトクンはそもそも回かい避ひする気がないようだった。なんとトマトクンは、青エイ色ンジ竜アの尻尾を大剣で迎むかえ撃うった。

「──むうううううあああああっ……！」

　なんだかもうものすごい音がしたような気がする。一いつ瞬しゅんのことだったので、はっきりとは聞こえなかったが、トマトクンの大剣は間違いなく青エイ色ンジ竜アの尻尾をとらえた。ただ、大剣の一撃でちょん切るには、あの尻尾は太すぎた。せいぜい半分くらいだった。その半分くらいまで切れた尻尾がトマトクンを激しく、とても激しく打ちすえた。トマトクンは吹ふっ飛ばされた。岩がん壁ぺきに叩たたきつけられて、それでもすぐに起きあがった。どれだけタフなんだよ！

「次はわしらや！　行くで、リューッ！　合体攻こう撃げきや……！」

「はいっ、カタリさんッ！」

「しゃぁッ！　我が流りゆうッ！　風林火山ッ！」

「かざ……？　た、竜たつ巻まき旋せん風ぷうぅぅッ！」

「旋風ッ？　い、一刀両断んんッ……！」

　長たらしい技わざの名前（？）も呆あきれるほどぐだぐだだったが、その技（？）自体も見事なまでにぐだぐだだった。どうも、カタリが先に突つっこんで、リューはその後ろに隠かくれ、一人だと思わせておいて、青エイ色ンジ竜アの目前でカタリがパッと右に移動し、リューと二人並んでそれぞれの得物を青エイ色ンジ竜アに叩きつける、というような目もく論ろ見みだったらしいが、そもそも青エイ色ンジ竜アの頭は高い位置にあって見下ろされているし、二人であんなに大騒ぎしておいて、一人だと思わせるなんて無理だ。いまいち息があわず、カタリが右に移動する前に、リューが左に移動してしまったあたりもなかなか無残だった。あげくの果てに、超ちよう馬ば鹿か野や郎ろう二匹ひきとも空から振ぶりに終わった。青エイ色ンジ竜アはひょいと脚あしを上げただけで、やすやすと二匹の攻撃をかわしてしまった。そうなるともう、二匹にできること

といえば、青エイ色ンジ竜アの逆ぎやく襲しゆうから逃のがれるべく踵きびすを返すだけだった。

「ウヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イィィィィィィィッ……！」

「ここここここここここここここここここ怖えええええええええええええええええッ……！」

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　バカどもがそんなアホなことをやっている間に、サフィニアはしっかり準備をしていたということだ。水晶クリス様材タリンの杖つえの先から放たれた幾いく条じようもの稲いな妻ずまは、青エイ色ンジ竜アの顔面にビッシバシ襲おそいかかった。これにはさしもの青エイ色ンジ竜アも目をつぶって怯ひるんだ。

　そう。

　怯んだだけだった。

　サフィニアが得意としている爆ばく雷らい索さくは結構高等な要素魔ま術じゆつなのに、そんなバカな。

「……さすがに、竜……ですね……」

「しょうねえ。あんなに大きいんだもの」

　てゆうか、サフィニアとユリカ、わりとのんきに会話しちゃってるような気がするんだけど、僕の気のせい……？

　てゆうか、僕、地味になんっにもしてないんですけど。

　まあ、どうやらサフィニアの護衛役を買って出ているらしいユリカも、今のところは何もしてないわけだし、いっか。

　や、あんまりよくはないんだろうけど。

　何か。何かできることはないのか。何か。考えている間に青エイ色ンジ竜アが飛びのいて、人間なら五、六人くらいは丸のみできそうな大きな口で深々と息を吸いこんだ。

「━気吹ブレスだ……！　全員やつの正面から離はなれろ……！」

　トマトクンはそう命じておきながら、自分はむしろ青エイ色ンジ竜アの真ん前に躍おどりでた。何だよ、それ。自分が囮おとりになるってこと？　なんかさ。そういうのって、ちょっと違ちがうような気がするっていうか、違うかどうかなんて僕が判断できることじゃないんだけど、いまいち納なつ得とくできないっていうか。でも、ユリカもサフィニアも弾はじかれたように動きだした。カタリまでリューの外がい套とうを引っぱって離れてゆこうとしている。ピンパーネルはどこに行ったのか、姿が見あたらないけれど、一人だけじっとしているわけにはゆかない。マリアローズはユリカたちを追いかける恰かつ好こうで青エイ色ンジ竜アの右側面に向かって駆かけた。青エイ色ンジ竜アがついに息を吐はきだした。

　ＶＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨ……！

　よくわからないが、たぶん何か声を出してしまったと思う。気吹ブレス。あれが気吹ブレス。話には聞いていたけれど、竜りゆうって本当に炎ほのおの息を吐くんだ。いや、あれは炎なんてかわいらしいものじゃない。火か炎えんだ。それじゃあ炎とあまり変わらないか。だったら、猛もう火か。猛火炎。ただ、青エイ色ンジ竜アの気吹ブレスは思ったよりも細かった。たとえて言えば、猛火炎の槍やりを吐きだしたようなかんじだった。そうは言っても、直径一メーテル以上、二メーテルくらいはあったに違いないが、囮になったトマトクンは間かん一いつ髪ぱつ、前方に転がって見事に気吹ブレスをかわし、その勢いのまま一気に青エイ色ンジ竜アの懐ふところに入りこんで、大たい剣けんを右下から豪ごう快かいに振りあげた。青エイ色ンジ竜アは下がってよけようとしたが、尻尾しつぽが岩壁にぶつかった。巣穴の広さという厳然とした物理的な制限のせいで下がりきれなかった青エイ色ンジ竜アの胸、いや、腹か、とにかくそのあたりをトマトクンの大剣が斜ななめにズォグジャアアァァッと斬きり裂さいた。

　傷はさして深くなさそうだ。

　それでも真っ赤な血が飛び散った。

　青エイ色ンジ竜アはすかさず腕うでを振りまわして、これはおそらくトマトクンを追い払はらおうとしたのだろうが、明らかに判断ミスだ。トマトクンはこれさいわいとばかりに青エイ色ンジ竜アの

腕を斬って斬って斬りまくった。切断まではゆかないが、青エイ色ンジ竜アの両腕は傷だらけだ。てゆうか、何？　いったい何なの、あの人？　ＺＯＯうちの園長マスターだけど。でも、相手は竜だよ？　ドラゴンなんだよ？　しかも、成竜だよ？　一人で成竜と互ご角かくにやりあっちゃってるんだけど？　変態……？

「よっしゃあぁぁぁッ！　今やッ！　一気に畳たたみかけるでぇぇぇッ……！」

「はいッ！　カタリさんッ！」

　カタリがリューと一いつ緒しよに再度突とつ撃げきの態勢に入った。ユリカも極クライ限マツクス九ナイ手ンポ棍ールを握にぎりしめて前進しようとしている。サフィニアはもう魔術の準備にとりかかっているようだ。その瞬しゆん間かんだった。ようやくわかった。

　違うんだ。

　さっきのはただトマトクンに任せたんじゃない。

　みんな、トマトクンを信じたんだ。

　信じているからこそ、仲間はちゃんとやってくれるはずだと思い、その仲間のために自分もやるべきことをきっちりやらないといけないと思う。

　だとしたら、僕が今、しないといけないことは？　カタリとかユリカみたいに青エイ色ンジ竜アに突進する？　違う。爆薬液ハーレムゴードン入りの小こ瓶びんを投げつけて爆発させて、なんとなく一仕事したっぽい体てい裁さいを取り繕つくろう？　ぜんぜん違う。僕はもともとショボイ侵クラ入ツ者カーだ。はっきり言って、肉にく弾だん戦にはまったく自信がない。特とく殊しゆな才能もない。みんなとは違う。でも、そんなちっぽけでしょっぱい僕にだって、できることの一つや二つくらいある。考えろ。すぐにわかるはずだ。ユリカはなんでサフィニアの護衛役を外れようとしているのか？　そうしても大だい丈じよう夫ぶだと思っているからだ。どうして？　僕だ。僕がいるからだ。いざというとき、魔術の準備中で無防備になっているサフィニアをかばうことくらい、僕にだってできるんだ。

　まあ、あまりかっこよくはないし、やみくもにハーレムゴードンを投とう擲てきするほうが派手だけれど、あれは材料費が結構高い。お金がもったいない。それに、無理にかっこつける必要なんてない。かっこよくなくて何が悪い。少なくとも、ユリカは僕を信じてくれているんだ。僕はそれに応こたえないといけない。

　マリアローズはサフィニアのそばまで走っていって視覚と聴ちよう覚かくに神経を集中させた。まずは見る。そして聞く。把は握あくする。判断する。必要とあれば動く。誰にでもできそうなことだ。自分にできないはずがない。さあ、見ろ。青エイ色ンジ竜ア。巣穴の奥の奥に追いつめられているように見える。トマトクンの斬ざん撃げきは一ひと振ふりごとにますます鋭するどさを増しているし、青エイ色ンジ竜アは明らかに大剣をいやがっている。それどころか、辟へき易えきしているようでさえある。さらに、二匹ひきの超ちよう馬ば鹿か野や郎ろうが向かって左側から、ユリカが右側から青エイ色ンジ竜アに迫せまった。これは存外、青エイ色ンジ竜アにとって厄やつ介かいな展開だ。なぜなら、トマトクン以外に気を配れば、トマトクンに押される。トマトクンに集中しようとすれば、超馬鹿野郎はともかく、ああ見えてユリカも巨きよ大だいな生き物を相手にするのはわりと得意なのだ。あの棍こんは伊だ達てじゃない。鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術の使い手であるユリカが、魂たましい集あつめというバカでかい疑ぎ似じ生命体を横転させる場面を見たことがある。そのあたりを見み越こしての行動というわけではないだろうが、青エイ色ンジ竜アも手を打ってきた。不意に後うしろ肢あしだけでなく、傷ついた両腕まで駆く使しして地面を踏ふみしめ、何をするのかと思ったら、青エイ色ンジ竜アはバーンと跳ちよう躍やくした。ほとんど真上だ。移動のため、逃にげるためじゃないのか。じゃあ、何のために？　青エイ色ンジ竜アが落下してくる。その下には──そうだ、トマトクンがいる！

「逃げて……！」

　当然、マリアローズが叫さけぶまでもなく、青エイ色ンジ竜アが落ちてくる前にトマトクンは後退していた。ユリカたちもいったん接近するのをやめて距きよ離りをとった。地じ響ひびきを立てて着地した青エイ色ンジ竜アは咆ほう哮こうをあげながら激しく身み震ぶるいした。だいぶ怒おこっているようだ。あたりまえか。でも、時間は稼かせげた。そろそろだ。何がって？

「寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

魔ま術じゆつだ。サフィニアが魔術を発動させた。縛ばく氷ひよう獄ごくだ。水霊Ｈｙｄと時霊Ｘｅｏが共きよう謀ぼうして、青エイ色ンジ竜アの首から上を見る間に霜しもで覆おおってゆく。青エイ色ンジ竜アはいやいやをするように首を左右に振ったが、あからさまにその動きがとろくさい。ＦＵＧＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＮ……！　みたいな声もやや力なく、ちょっぴり情けなかった。とはいえ、竜だ。サフィニアの縛氷獄をもってしても、その動きを鈍にぶらせただけで、生命活動を停止させるまでには至らなかった。それでもよかった。十分だ。

青エイ色ンジ竜アの首をするすると駆かけのぼってゆく者がいる。

いったい彼はどこから現れたのか。今までどこにいたのか。

驚おどろくなかれ、彼は後背に回りこんで青エイ色ンジ竜アに接近どころか密着し、つまり、その身体からだにしがみついて、虎こ視し眈たん々たんとこの機会をうかがっていたのだ。

そんな芸当をやってのけられるのは彼しかいない。

「──がんばれ、ピンパーネル……！」

声せい援えんなんて必要ないに違ちがいないけれど、思わず声が出てしまった。心配はしていなかった。やってくれると思っていた。そのとおりだった。

ピンパーネルはあれよあれよという間に青エイ色ンジ竜アの頭頂部に到とう達たつして、雌し雄ゆうーいつ対ついの短たん剣けんを縦じゆう横おう無む尽じんに舞まわせた。狙ねらったのは青エイ色ンジ竜アの目だった。青エイ色ンジ竜アも分厚く頑がん丈じような瞼まぶたを閉じて眼球を守ろうとしたようだが、サフィニアの縛氷獄がきいている。とろい。とろくさい。雄おすのグレアデと雌めすのリレッザが冷れい酷こくで残酷な協奏曲を奏かなでた。青エイ色ンジ竜アの二つの眼球は斬り裂かれ、表面を剝はがれ、抉えぐられ、掻かきまわされた。ＧＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＧ……！　青エイ色ンジ竜アが吼ほえた。あるいは、激痛が、さらには目をつぶされたことによる精神的な衝しよう撃げきが青エイ色ンジ竜アの中の何かを強きよう烈れつに刺し激げきしたのかもしれない。青エイ色ンジ竜アの首から上を覆っていた霜が一瞬で蒸発して、大量の水蒸気が撒

まき散らされた。ＧＵＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＮＮＮＮＧ……！　ＶＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮＮＮＧ……！　青エイ色ンジ竜アは身をよじりながら激しく首を振ふった。ピンパーネル！　思わず走りだしそうになったが、マリアローズが行ったところで何ができるわけでもない。そうはいっても、青エイ色ンジ竜アは岩がん壁ぺきにガッツンガッツン身体をぶつけて大暴れしている。ピンパーネルは青エイ色ンジ竜アの右目の上、あれは眉まゆ毛げなのか、とにかくそんなかんじの細いものにつかまっているようだが、揺ゆられるがまま、振りまわされるがままといった状態だ。トマトクンやカタリ、リュー、ユリカはなんとか青エイ色ンジ竜アに近づこうとしているが、あそこまでむやみやたらに暴れられるとさすがに無理だ。しかも、青エイ色ンジ竜アの翼つばさがぶるるっと震えた。マリアローズはとっさに叫んだ。

「──飛んじゃう……！」

「ピィィンプッ……！」

　トマトクンが大剣を放ほうり投げて両りよう腕うでを広げてみせた。

　それから一秒もたたないうちに、ピンパーネルは青エイ色ンジ竜アの眉毛から手を放した。

　ピンパーネルの身体が宙に投げだされた。

　トマトクンが身にまとう全身鎧よろいの炎ほのおを揺らめかせて疾しつ駆くした。

　無茶だ、とはこれっぽっちも思わなかった。

　トマトクンは滑すべりこむようにして着地点に入り、ピンパーネルをがっちり受け止めた。

　青エイ色ンジ竜アはすでに飛び立っていた。目が見えないせいだろう。岩壁にゴッツゴツ身体をあてながら、それでも上へ上へと飛んでゆく。逃げてゆくと言ったほうがいいかもしれない。竜りゆうは巣をつくると、そこに稀き少しよう鉱物や財宝などの光り物を集めて自分の力を誇こ示じする。半魚人が言うには、竜は竜を捕ほ食しよくするのだが、ただ殺して食べるだけじゃない。巣にある光り物を奪うばって自分のものとする。竜にとって、巣とそこにためこ

んだお宝は命の次に大事なものだ。なかには巣を守り抜ぬくために何頭かで巣をかまえる竜もいるという。視覚を奪われてパニックになったのか、慌あわてながらも苦く渋じゆうの決断を下したのか、そのあたりはわからないが、青エイ色ンジ竜アは大切な巣を捨てて巣穴の天てん井じようにあいた穴から外に飛びだしていった。もしマリアローズたちが竜であれば、青エイ色ンジ竜アは自分の巣に押し入られて逃げだした哀あわれな敗残者だ。勝った竜はしてやったりとほくそ笑えんで青エイ色ンジ竜アのお宝を頂ちよう戴だいするだろう。いや、竜でなくてもそれは同じだ。

「……待って。落ちつけ、僕。そうだ。冷静に。冷静にならないと」

　マリアローズは深呼吸をしてから、まずはサフィニアと連れ立ってトマトクンたちのところへ向かった。ユリカがピンパーネルの身体を調べているが、どうやら大きな怪け我がはしていないようだ。マリアローズが声をかけると、ピンパーネルは、ワタシ・大だい丈じよう夫ぶでス、と静かに微笑ほほえんでくれた。当然、トマトクンもぴんぴんしている。それを確かく認にんしたサフィニアが、海より深いかもしれないため息をついた。息を吐はきすぎて苦しそうだった。超馬鹿野郎二匹も大脂羽蟲ゴツキーのようにしぶとく生きのびている。まあ、やつらのことなんかどうでもいい。それより大事なことがある。

「じゃ、悪いけど、みんな手を貸して？　高く売れそうなもの、貴重そうなものから順に、持てるだけ持って帰らないといけないからさ。一応、急がないとね。うん。ぱっぱとね。要領よくやらないと。あの竜がそのうち戻もどってくるかもしれないし」

「今回は結構な稼かせぎになりそうだな」

　トマトクンが片方の眉まゆをつりあげてみせた。べつに嫌いや味みを言っているわけではなさそうだけれど、仮にそうだとしてもかまうものか。

「そうだねー。いやー。でもさ、たまにはやっぱりちゃんと儲もうけないとね？　サフィニアだって魔術を使うたびに触しよく媒ばいとか消費するわけだし。バカにならないでしょ、実際。強力な魔術ほど貴重な石だの珍めずらしい動物の骨だのが必要だったりするみたいだしさ」

「……はい……それは……そう、ですね……今のところ、間に合ってはいますが……」

「蓄たくわえはいくらあってもいいわけだしね」

「しょうね。しょのあたり、マリアはしっかりしていて、現げん実じちゆ的てきね。前から思っていたけど、わたしたちって、ちょっと浮うき世よ離ばなれしているところがあるから」

「うん。そこはね。僕も力説したいね。声を大にしてね。もう少しね。庶しよ民みんの暮らしとかもわかって欲しいっていうか。はっきり言って、普ふ通つう、エルデンで家とか持てないしね。そんなの富ふ豪ごうだよ、富豪。金も力もある大金持ちじゃないと無理だから」

「そうなのか」

　トマトクンはすっとぼけているのだろうか。それとも、本当に自覚がないのだろうか。どうも読めない男だ。

「そうだよ。てゆうか、地味にお金も力もあるんだけどさ。きみってば。あんまりそうは見えないけど」

「ふむ」

「ま、いいや。さっ。はいはいっ。作業作業。始めるよ。さっさと。動いて。ほら、そこの腐くされ半魚人も。それから、リューだっけ。きみもちゃんと手伝ってくれれば分け前はあげるからさ。一稼ぎしてお母さんと妹さんに少しでもいい暮らしさせてあげたら？」

「……いやだ」

「へ？」

「いやだッ！　いやだいやだいやだッ……！」

　あの、アホアホ半魚人でさえマリアローズの指図を受けて財宝の山へと向かおうとしているこのときに、なに一人で熱くなっちゃってるんですか。

「ダメだッ……！　オレにはできないッ！　だって、オレたち

はッ！　あの竜をあと一歩のところまで追いつめたってのに……！」

「や、きみはほとんど何もしてないけどね？　僕もだけどさ……」

「それなのにッ！」

「………………」

「あいつを追わないでッ！　お宝ゲットかよッ！　それでいいのかよッ！　結局、金か！　金なのかァッ！　それだけなのかよッ！　夢はどこへ行っちまったんだァァッ！　オレの、そう、オレの、オレたちの夢はッ！　カタリさんッ……！」

「を、をうっ？」

「言ったじゃないっすかァァッ！　一いつ緒しよに竜を殺そうってッ！　それが漢おとこの道だってッ！　漢の道を二人で突つき進むんだってッ！　あれは！　あれはッ！　あれは嘘うそだったんですか、カタリさんッ！　そこんところどうなんすかッ！」

「いや、あ、え、そ、その、あのな？　ええと……ようするにやで、まあ……」

「あんた……まさか……ホントは漢なんかじゃなかったのか……？」

「え？　お？　ま、待ちいな、そんな、わしは……」

「なあんだ……漢じゃなかったのかよ……そうかよ……オレの独り相撲ずもうかよ……」

　リューはうなだれて首を左右に振ふったかと思うと、両手剣けんを引きずって歩きだした。

「ちょッ、ちょい待ちいッ！　お前じぶん、どこ行くつもりなんやッ！　リューッ！」

「決まってるでしょう」

　カタリに呼び止められて振り返ったリューは、なんだか知らないが涙なみだぐんでいた。

「あいつを追うんですよ」

「なッ──」

「オレはやるっすよ。たとえ一人でもね。やってみせるぜ……！　だってオレは漢だから！」

「リュー……」

「漢だからァッ……！」

「漢……」

「漢ォ～だァ～からァァ～」

　なんで歌うの？　てゆうか、一人で行くんだったらさっさと行けば？　もしかして、本当は一人で行きたくないとか？　カタリもさ、進退きわまった、みたいなうざい魚顔でこっち見るのやめてくれない？　知らないよ。そんなの。好きにすれば？　自分で決めることもできないわけ？　あっそう。わかったよ。わかった。

　マリアローズはカタリに笑いかけてやった。

「きみも漢なんでしょ？　なんっかよくわかんないけど、きみ、いっつもそんなかんじのこと言ってるし。漢ならやっぱり行くしかないんじゃない？」

　カタリはものすごくいやそうな顔をして、それでも必死にカクンカクンうなずいた。

「……せ、せやな……漢やしな……」

「いってらっしゃーい」

「いっでぎばず」

　後半は涙声だった。

　カタリはビッと敬礼して、涙を飛び散らせながら身をひるがえした。

「──ほんなら……ほんならなぁぁッ！　ほんなら行くでッ！　リューッ……！」

「カタリさんッ！」

「相手は手負いやッ！　気ぃつけなあかんけどなッ！　漢に不可能はあらへんッ！」

「はいッ！」

「進むで突き進むで突とつ進しんやで驀ばく進しんするで漢の道をぉぉぉぉッ！」

「どこまでもォォォッ！」

「そして永遠にぃぃぃぃヤハアァッ……！」

　二人の背中が、声が、遠ざかってゆく。

　マリアローズは、だが、そんなものはもう見ていなかったし、聞いてもいなかった。

「さあさあやるよ！　まずはあからさまに高そうなものから！　あ、それ、血星ジグネ曜石ヴイアのでっかいかたまり！　めっちゃ高いから！　サフィニア、必要なぶんだけとって！　あとは売りさばくから！　あと、その剣！　なんか高そう！　その兜かぶとも！　うわ、あれって──」



memory of hysteric youth

　あいつが敵でこいつが味方だなんて誰が決めた？

　僕らは何も鵜う呑のみにしちゃいけない。

　自分の目で確かめて、自分で決めなきゃいけない。

　それがただ一つのルールだ。

　ルールを守るなんてまっぴらごめんでも、やっぱりルールはあるんだ。

　それが人の世だ。

　クソ食くらえだ。

　自由でいたくてこの街にしがみついて、不自由にならざるをえない。

　むしろ僕は空を飛びたい。

　飛んでゆきたい。

　どこまでも。

　いつまでも。

　ずっと。

　──一人で？

hysteric youth

ヒステリック・ユース

真・鳥人ROCK

しごくあたりまえのことではあるけれど、太陽は一つじゃない。たくさんある。この巨きょ大だいな縦穴の奥底にある黄色みを帯びた異界のアナザー太陽・サンも、そのうちの一つだ。

穴の側面に自生している木々は、その太陽めがけて競きそうように下へ下へとのびている。いや、実際、より多くの日光を浴びるために競っているのだろう。幹や枝を思いっきり横に張りだすことで、その競争に打ち勝とうとしている樹木もある。そうした巨きょ樹じゅには、さまざまな寄生植物がびっしりと絡からみつき、ほとんど一体化していて、上から見ると、まるで巨大な台や棚たなみたいだ。それらは棚シエルフ樹ツリーと呼ばれ、このアンダーグラウンドＤ11フリアウ逆密林を訪おとずれる物好きな人間、侵クラ入ツ者カーたちにとって、絶好の足場になっている。まあ、そんなものでもなければ単なるでっかい穴にすぎないから、縁へりから顔を出して太陽を直視して「うわっ眩まぶしっ」みたいに大おお騒さわぎするか、命の保証はできないというかまず間ま違ちがいなく死ぬだろう、まさしく決死のダイビングでも楽しむというか飛び降り自殺するくらいしかやることがない。

もちろんマリアローズたちは、異界のアナザー太陽・サン見物にきたわけではない。自殺志願者の群れでもない。侵クラ入ツ者カーとしてフリアウにやってきた。

侵クラ入ツ者カーの本分は、ようするに略りゃく奪だつだ。相手が人間ではないので、強ごう盗とう、強ごう姦かん、殺人を旨むねとする悪党バスターよりはいくらかマシのような気もするけれど、気のせいかもしれない。侵クラ入ツ者カーたちに標的、獲え物ものと見なされている異界フリー生物クスにしてみれば、悪逆非道の侵しん略りゃく者しゃにすぎないだろう。なんてことをいちいち考えていたらきりがないので、そのあたりは割りきって仕事に精を出すしかない。異界フリー生物クスにしたって、おとなしく狩かられてくれるわけじゃないし。今でこそキング・グッダーの古代九く頭ず竜りゅうの呪のろいで地下に封ふうじこまれているけれど、大昔は人間世界に版図を有するれっきとした敵対生物だったらしいし。つまり、もともとは彼らこそが異界の扉とびらを通って人間世界に攻せめこんできた侵略者だったわけで、フリアウの穴の先が異界に通じているのだとしても、地下とはいえここは人間の世界で、人間の土地なのだから、こっちが容よう赦しゃしてやる理由なんてどこにもないのだ。

　てゆうか、むしろこっちが容赦してもらいたい。

「キーキーキーキー」

「ガーガーキー」

「キーガーガー」

「キーキキキキキー」

「ガーキーガーガキー」

　このフリアウ逆密林の各所に巣を作って群ぐん棲せいしている鳥人ジャドーは、身体からだが羽う毛もうで覆おおわれていて、羽と腕うでの機能をあわせ持つ翼よく腕わんで鳥のように飛ぶ異界フリー生物クスだ。ちなみに、フリアウは彼らの言葉で、我らの王国、という意味だとか。真しん偽ぎの程ほどは不明だし、どうでもいいと言えばどうでもいい。それどころじゃない。

　マリアローズたちはジャドーの大群に見下ろされていた。

　キーキー鳴きながら一いつ対ついの翼腕を羽ばたかせて飛びまわっているジャドーがいる。

　二対か三対の翼腕を駆く使しして停空ホバ飛翔リングしているジャドーは雌めすだろう。

　ジャドーについては、異界フリー生物クス研究家ゲルル・デッドハント氏の有名な著書があって、マリアローズも読んだことがある。その『私と鳥人ジャドーと愛人と元妻』によると、ジャドーの社会は完かん璧ぺきなまでに女じょ尊そん男だん卑ぴだ。雄おすは生せい殖しよくのための道具であり、雌の意のままに立ち働く下僕しもべでしかない。身体も雌のほうが大きく、雄と違って翼腕以外の上半身の大部分は地じ肌はだを露ろ出しゆつしている。顔は鳥というよりも人間の女性に近い。頭には色とりどりの飾かざり羽根を生やしていて、多種多様な装そう飾しよく品ひんを身につけてもいる。雄はどいつもこいつも似たような姿形をしていて見分けがつかないのに、雌の外見はじつに個性的だ。当然のことながら母であり、政治的な統とう率そつ者しやであり、霊れい的てきな指導者であり、同時に優ゆう秀しゆうな戦士でもある雌は、通常、十頭から二十頭の雄を率いて行動するらしいが、その雌が、見たところ、ひい、ふう、みい──四頭もいる。ということは、ジャドーはぜんぶで

何頭いるのか。五十か。六十か。数えられそうにない。ちゃんと数える気にはとうていなれない。

「いやいやいやあ」

　それなのに、なんでこの半魚バカは、愛用している二本の変形斧おのをくるくる振ふりまわしながら嬉うれしそうにしているのか。

「腕が鳴るでえ。鳴りよるでえ。鳴りまくるでえ。こんだけぎょうさんの敵をいっぺんに相手するチャンスなんてなあ。めったにないやん、正味の話」

「そうだね。そうそうあってたまるかってかんじだよね」

「なんやお前じぶん、えらい景気悪い顔しとんなあ。どないしたん」

「どないしたもこないしたも……」

　まずはこの半魚阿あ呆ほうを始末してしまったほうがいいのではないかと思えてならなかったが、その手間が惜おしかったし、もはや半魚顔を目にするのもいやだ。いっそ半魚人の存在自体を意識の中から抹まつ消しようしてしまおう。いや、消すのはさすがにちょっと難しいか。いることはいるんだし。だったら、存在ごと■■■黒塗りにしてしまおう。そうしよう。

　マリアローズは偽にせ劫ごう火かの柄つかを握にぎりしめている右手に力をこめて深呼吸をした。前にはトマトクンがいる。その後ろに、魔ま術じゆつ士しのサフィニアを真ん中に置いて、右にマリアローズと■■■、左にユリカがつき、最さい後こう尾びはピンパーネルだ。

「──で、雌の飾り羽根をぶんどればいいんだったか」

　トマトクンは剣けん身しん波打つ琥こ珀はく色いろの大剣でぽんぽんと肩かたを叩たたいた。

「四匹ひきいるな。雑ざ魚こが邪じゃ魔ましてきそうだが」



「■■■■」

「目的はたしかにそれだったんだけどね。そういうこと言ってる場合じゃないと思うんだよね。明らかに。まずはこのピンチを切り抜ぬけないとさ。地味に結構、絶体絶命気味だよ？」

「■■■■■■■■」

「まあ、それもそうだな。たしか、どこかにＤ13に抜けられそうな場所があったな。あそこまで退くか」

「■■■■■」

　なんだか■■■がいちいち口を挟はさんできてうるさいような気もしなくはないけれど、無視だ、無視。そんなことよりも、たしかにトマトクンが言ったとおり、少し前、このＤ11と隣りん接せつしているＤ13まで通じていそうな横穴の近くを行きすぎた。『私と鳥人ジャドーと愛人と元妻』にも、鳥人ジャドーとＤ13の蜥蜴とかげ人じんはすこぶる仲が悪く、たびたび衝しよう突とつしているが、種族対種族の大抗こう争そうに発展することをさけるため、ふだんは互たがいの領域を侵おかさないようにしているとの記述があった。Ｄ13に逃にげこめば、ジャドーたちは追いかけてこないかもしれない。

「■■■■■■■■■■■■■■」

「あっちの棚シエルフ樹ツリーだったよね」

　マリアローズが左前方、斜ななめ上にある棚シエルフ樹ツリーを指さすと、トマトクンはちらりと振り返ってうなずいてみせた。

「よし。ひとまずＤ13に退たい避ひだ。いいな」

「了りよう解かい」

「はイ」

「わかったわ」

「……はい……」

「■■■■■■■」

　四人＋■■■が応じるなり、トマトクンが大剣をかつぐように構えて走りだした。四人＋■■■も遅おくれずに駆かけだした。トマトクンが先頭で、マリアローズとユリカと■■■は逆三角形の陣じん形けいを作ってサフィニアを守り、しんがりにピンパーネルがつく恰かつ好こうだ。今までも十分やかましかったジャドーたちが、より

いっそうけたたましくギーギー鳴きはじめた。あいやあやあふうるうるう、みたいな、鳴き声というより声も聞こえた。雌めすか。どうやらそうらしい。剣みたいなものを持った翼よく腕わんをさかんに振って、雄たちに何やら指示を出しているようだ。連中の言葉はわからないけれど、その内容はだいたい想像がつく。攻こう撃げき開始、といったところだろう。案の定だった。旋せん回かいしていた雄たちがこっちめがけて飛んでくる。雌と違い、一対の翼腕しか持っていない雄は、飛びながら武器を扱あつかうような真ま似ねはできないが、彼らの足は地上の猛もう禽きん類るいのそれよりも遥はるかに力強く鋭するどい爪つめを備えている。急降下してきて、その爪を獲え物ものに突つき立て、引き裂さく。また、場合によっては、一頭の雄が持ちあげて離はなし、別の雄がこれを空中でキャッチして離し、さらに別の雄が、という具合に繰くり返して、獲物をズタボロにしてしまうのが連中の常じよう套とう手段だ。

もちろん、マリアローズとしては絶対そんな目には遭あいたくないので、懸けん命めいに足を動かした。ただ、速度をサフィニアにあわせないといけない。怖こわいからといって、全力疾しつ走そうするわけにはゆかない。どうせできっこないのだが。だって、棚シエルフ樹ツリーは岩やら土やらの地面とは違ちがう。植物が密集しているだけだから、硬かたい部分もあれば、やわらかい部分もあって、出っぱりもあれば、足がズボッとはまってしまうような窪くぼみもいたるところにある。転ばないように、よっぽど注意して走らないといけない。さいわいまだ誰も転てん倒とうしていないけれど、いつまでもその幸運がつづくとはかぎらないし、とかく不運というやつは弱気になった途と端たんに牙きばを剝むいて襲おそいかかってくるもので、マリアローズの隣となりを走っていたサフィニアがいきなり「──はぅっ……！」と声をもらしてつんのめった。倒たおれたというよりも何かが折れた、あるいは砕くだけたような音がした。マリアローズは慌あわてて足を止め、引き返そうとして、愕がく然ぜんとした。

一いつ瞬しゆん、サフィニアの姿が見あたらなかったからだ。

よく見ても、手だけだった。

すぐに理解した。

穴だ。どうやら棚シエルフ樹ツリーに穴があいていて、サフィニアはそこに落ちた。もしくは、サフィニアが足をかけた拍ひよう子しに、もともと薄うすかったか、脆もろくなっていたその部分が崩

ほう落らくしたのかもしれない。駆けよると、穴は一メーテル四方くらいで、サフィニアは左手だけでなんとかその縁ふちにつかまっていた。右手は水晶クリス様材タリンの杖つえを握りしめている。マリアローズは同じく駆けよってきたユリカと顔を見あわせた。■■■も視界の隅すみに入っていたが、それだけだった。

「トマトクン……！」

　声をかけると、トマトクンはすぐに立ち止まって振ふり返った。ユリカがつづけて、サしやフィニアが、と言っただけで事情を察してくれたようだ。

「カタリ、ピンプ、迎げい撃げきだ！　マリアとユリカはサフィニアを……！」

　トマトクンがそう命令を下した瞬間、マリアローズは襲いくるジャドーどものことを頭から追い払はらおうとした。ジャドーはトマトクンたちに任せておけばいい。大だい丈じよう夫ぶだ。■■■はともかく、トマトクンとピンパーネルが絶対に守ってくれる。実際、素す早ばやくマリアローズたちの近くまで移動したトマトクンが、猛もう然ぜんと突っこんできた三頭か四頭のジャドーを大剣の一振りでズガジャジャジャッと一挙にぶった斬ぎってみせた。その横にすっと進みでたピンパーネルも、すれ違いざまに二頭のジャドーを解体した。■■■も、まあ、一応、それなりにがんばってはいるようだ。

　マリアローズは偽にせ劫ごう火かを鞘さやに収めつつユリカに目配せをしてから、しゃがんでサフィニアの左手首を右手でつかんだ。腕うで一本で軽々と引きあげることができればいいのだが、あいにくマリアローズはそこまで力持ちじゃない。ユリカが後ろからマリアローズの腰こしのあたりに両手を回した。すかさずマリアローズはさらに左手をのばそうとした。

　ぐらっとした。

　足あし許もとだ。

「え」

　やばい、と思った。

「きゃっ」

　ユリカの声だ。

　マリアローズもおそらく何か悲鳴をあげた。

　そりゃあ悲鳴の一つや二つ、あげるって。

　だって、どこからどう見ても、どう考えても、落下しちゃってる。

　なんで？　どうして？　ひどいよ。やめてよ。そんな、落ちるなんて。崩くずれるなんて。ああ、でも、サフィニアがあんなふうになっていたわけだから、もっと気をつけるべきだったのかもしれない。不注意だったのかもしれない。僕が悪かったのかもしれない。ようするに、自じ業ごう自得ってやつ？　サフィニアは絶望を絵に描かいたような顔をしている。ユリカはどうだろう。見えないけれど、マリアローズの腰にしがみついている。三人もろとも落ちている。上を見ると、棚シエルフ樹ツリーに大きな穴があいていた。下を見ると、別の棚シエルフ樹ツリーがある。というか、もうすぐそこだ。激げき突とつする。先にサフィニアだ。サフィニアがぺしゃんこになっちゃう。どうにかしないと。どうにかって？　どうしようもない。何もできない。気が遠くなりかけた。ダメなのかな。どうやらダメっぽい。信じられない。信じたくないけれど、現実は非情だ。

　サフィニアが足から棚シエルフ樹ツリーに落ちた。

　思いっきり叩たたきつけられた。

　そうじゃなくて、めりこんだ。

　いや、ズボッと貫かん通つうした。

「──はいっ……!?」

　とか言っている間に、今度は自分の番だった。マリアローズもユリカと一いつ緒しよにサフィニアが棚シエルフ樹ツリーにあけた穴へと突っこむ恰かつ好こうになった。バキバキ折れたりズザズザッとこすれたりする音がした。衝しよう撃げきも多少はあった。でも、薄い。あっという間だった。突き抜ぬけた。まさかこんなに薄い棚シエルフ樹ツリーだったなんて。わからないものだ、なんて感心している場合じゃなかった。サフィニアはすでに次なる棚シエルフ樹ツリーにぶちあたろうとしていた。ああ、やっぱり幸運なんて

ものがそうそうつづくはずがない。見ていられない。マリアローズは天を仰あおいだ。といっても、見えたのは穴があいた棚シエルフ樹ツリーだった。それだけだと思っていたら、大間違いだった。
え？　嘘うそ？　なんで？　どういうこと……？

　落ちてくる。

　見間違いなんかじゃない。

　ピンパーネル。

　カタリ。

　トマトクンも。

　三人とも、図はからずも落ちてしまったマリアローズたちとは様子が違う。なんていうか、あれ、落ちちゃった、というかんじではなくて、すすんで落ちました、穴に飛びこんで、今、落ちてます、もちろん覚かく悟ごのうえで落下してます、みたいな。

　そんなことを思っているうちに、今度こそサフィニアが棚シエルフ樹ツリーに激しく叩きつけられるおぞましい音が──しなかった。貫通する音でもなかった。マリアローズが下を向いたときにはもう、サフィニアの姿は見えなかった。それなのに、棚シエルフ樹ツリーはある。ちゃんと存在している。サフィニアが消えた。いなくなってしまった。そんなバカな。たしかにバカなことだ。ありえない。消えるはずがない。でも、実際、いない。ということは、僕は、ユリカは、おそらく僕らのあとを追ってきたトマトクンたちは、いったいどうなっちゃうわけ？　消える？　もしかして、消えちゃう……？

　種明かしの時間はすぐにやってきた。

　マリアローズは身体からだを丸めて棚シエルフ樹ツリーに突つっこんだ。

　死ぬかと思った。

　大だい丈じよう夫ぶだった。

　死にはしなかった。

　ただ、まったく予想していなかったので、何がなんだかさっぱりわからなかった。

「うううううううわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ……！」

　口を開けると何か青くさいものが入ってきた。さりとて叫さけばずにはいられなかった。何これ。どうなってるの？　何も見えない。ズザザザズザザザザ音がする。痛いといえば痛いけれど、激痛じゃない。身体中がこすれている。裸はだかなら、全身に擦すり傷ができてしまいそうだ。何かをつかもうとした。細い、硬かたいものをつかまえても、すぐに手から離はなれていった。

　まだ落ちているんだ。

　落ちつづけている。

　奇き妙みようなことに、棚シエルフ樹ツリーの中を。

　草みたいなものや、細い木だけでできている、やわらかい棚シエルフ樹ツリー……？

　そんなものがあるなんて聞いたことがないけれど、マリアローズはもともとメリクル迷めい宮きゆうあたりを主たる狩かり場にしている孤こ独どくな半はん端ぱ侵クラ入ツ者カーだった。フリアウ逆密林を熟知しているわけじゃない。というか、ここにはＺＯＯに入ってから初めて訪おとずれて、これが二度目だ。あとは読みかじりの知識しかない。知らないことがあってもおかしくない。おかしくないどころか、当然だ。ここはアンダーグラウンドだ。現在、サンランド無統治王国がその大部分を占しめているα大陸の北西部一帯は、かつて混沌とエルデエ恐怖の巷イニオンと呼ばれていた。そのど真ん中に異界の扉とびらだらけの大メガ穴ボロスが口を開けていた。それがここだ。キング・グッダーは大メガ穴ボロスに蓋ふたをする形で首都エルデンを建設して、古代九く頭ず竜りゆうの呪のろいという強力な古代呪じゆ式しきによって異界フリー生物クスたちを封ふうじこめたのだ。そのため異界フリー生物クスは地上に出てこられないが、このアンダーグラウンドは彼らの領域だ。言ってみれば、ここは半分異界なのだ。人間の常識なんか通用しない、わけのわからないことだらけだ。だから、驚おどろくな。びっくりするな。落ちつけ。いや、無理だけどね……？

やわらかい棚シエルフ樹ツリーの層（？）をズパッと突破した。

抜けた。

ここはもう空中だ。

「──わぐっ！」

そうかと思ったら、腰こしやら肩かたを痛打して息がつまった。近くにサフィニアが倒たおれていた。ユリカはまだマリアローズにしがみついている。何だよ、もう、と呟つぶやいたつもりだけれど、ちゃんと声になったかどうか。てゆうか、どこだよ、ここ？　棚シエルフ樹ツリー……？　つまり、やわらかい棚シエルフ樹ツリーのすぐ下に、硬い棚シエルフ樹ツリーがあったってこと？　どうやらそういうことらしい。下は、凹おう凸とつがあったり、少々ごわごわしているものの、それでもだいぶ硬い。見上げると、巨きょ大だいな藻ものかたまりみたいな棚シエルフ樹ツリーが広がっている。立って思いっきり手をのばせば届きそうな距きょ離りだ。たぶん、せいぜい二メーテルといったところだろう。やわらかい棚シエルフ樹ツリーを通り抜ける間にかなり減速して、ここに落ちた。それでどうにか助かった。そういうわけか。

起きあがろうとしたら、頭上のやわらか棚シエルフ樹ツリーが、ガザサッ、と震ふるえた。

次の瞬しゅん間かん、やわらか棚シエルフ樹ツリーを突き破って、砂色の衣ころもを身にまとった男が落ちてきた。

ピンパーネルは、だが、うまくマリアローズたちをよけて着地した。そもそも心配していなかった。人一倍身軽で敏びん捷しようなピンパーネルが、マリアローズたちを下した敷じきにしたりするはずがない。問題はヤツだ。マリアローズはユリカを振ふりほどいて立ちあがり、身構える間も惜おしんで右のハイキックを放った。

「──はぁっ……！」

どんぴしゃだった。マリアローズの右足は、竜たつ巻まきで空高く巻きあげられたあげくワサッと降ってくる魚みたいに落ちてきた半魚人の横っ面つらをバッチリ見事にとらえた。

「ぼげごっ！」

　半魚人は硬い棚シエルフ樹ツリーに叩たたきつけられて、身体をぴくぴくさせている。釣つりあげられてしばらくたち、もう観念しかけている魚みたいだ。本当に観念してくれているといいのだが、半魚人にかぎってそれはないだろう。ともあれ、案の定というべきか、ちょうどマリアローズとユリカめがけて落ちてきた大迷めい惑わくな半魚人の脅きよう威いは、なんとか回かい避ひすることができた。

　でも、あれは無理。

　半魚人程度の雑ざ魚こならともかく、大物すぎるし。

　てゆうか、間に合わないし。

「──む……！」

　両りよう膝ひざを曲げて大たい剣けんをかつぐように構えた体勢でやわらか棚シエルフ樹ツリーから飛びだしてきたトマトクンは、直下のマリアローズたちを目にして、どうにかよけようとしたようだ。身体をひねって、マリアローズとユリカがいる位置からはそれたけれど、そっちには──ピンパーネルならすかさず反応して横にどいてくれただろうし、半魚人だったらどうなってもよかったのに、運悪くどちらでもなくて、サフィニアがいる。

　なんてことだ。

　身の丈たけ百九十サンチの図ずう体たいだ。ただではすまない。

　マリアローズは思わず目をつぶった。

　すぐに、おっかなびっくり、瞼まぶたを開いた。

「……ふう」

　トマトクンが大きく息を吐はいた。

　サフィニアは、押し潰つぶされていなかった。

　一見、トマトクンがサフィニアを組み敷しいているようにも見えるけれど、違ちがう。トマトクンは右手に持った大剣を棚シエルフ樹ツリーに突つき刺さして、左手と両足を突っぱらせていた。覆おおいかぶさる恰かつ好こうにはなっているものの、少しもサフィニ

アの身体にふれていない。

　サフィニアが、う、う、う、と低く呻うめきながらゆっくりと目を開けた。

　途と端たんに全身を凍こおりつかせた。

　耳まで真っ赤っかになった。

「大だい丈じよう夫ぶか、サフィニア」

「……は……は、は、は……は……」

　どうやら、はい、すらも言えないようだ。

　トマトクンは不思議そうに首をひねりながら、自分が立ちあがるついでにサフィニアを抱だき起こした。立たされたサフィニアは、彫ちよう像ぞうみたいに硬こう直ちよくしている。顔のそこかしこに擦すり傷があるくらいで、たいした怪け我がはしていないように見えるけれど、別の意味であまり大丈夫じゃなさそうだ。トマトクンも若じやつ干かん気づかわしげだが、頭すれすれのやわらか棚シエルフ樹ツリーにちらっと目をやってから、黄玉トパーズの瞳ひとみでざっと皆みなに目を配った。

「どうやら全員、無事──でもないか」



　道みち端ばたに捨てられた生ゴミのような半魚人のことだろうか。たしかに、無事とは言えないかもしれないが、あのときはしょうがなかった。ああしなければ、間違いなくこっちに被ひ害がいが及およんでいた。マリアローズだけじゃない。ユリカも危あやうかった。半魚人を差別するわけじゃないけれど、たとえばユリカと半魚人、どちらの命が重いかといえば、やっぱりユリカだろう。そ

んなわけなので、あきらめて、恨うらみつらみは一いつ切さいなしで、安らかに眠ねむれ。

「──て、生きとるがなボケェッ……！」

　半魚人がビョンッと跳とび起きて、マリアローズにつめよってきた。

「お前じぶんなあ！　ナンボなんでもあそこでいきなりハイキックはないやろ！　ちゅうかフツーに痛いやん？　打ちどころが悪うて死んでまうとか、たまにあるやん？　危ないやん？　他ほかにやりようっちゅうかな、あるやろ？　あると思うで？　ないわけないやん？」

「あーそうだねはいはい」

　マリアローズは半魚人を押しのけてトマトクンに向きなおった。

「どうしよう」

「無視かあああああああああああい！　無視するんかああああああああああい……！」

「うむ。そうだな」

「トマトクンまで……！　あんなあ！　大事なことなんやで！　こういうことはなあ、ちゃあんと話しおうておかへんかったら、のちのちシコリが残ったりするモンなんや！　まあ、わしが忘れてまわへんかったらやけどな！　たいがい忘れてまうけどな！」

「どうしたものか。まず、ここがどこかわからん」

「最近、記き憶おく力りよくの低下が激しゅうて激しゅうて……」

「だいぶ下にきちゃったのかな」

「これがあれかのう、巷ちまたで噂うわさの鳥頭っちゅうやつなんかのう」

「よくわからんが、十メーテルは落ちたんじゃないか。もっとか」

「魚顔に鳥頭っちゅうたら、そらもうアレやで、二重苦やでホンマ

──て、誰が鳥魚じゃああああああああああああい……！」

「ジャドーは追ってこないね」

「誰が……！」

「いや、まだそう判断するのは早いぞ」

「誰が……鳥魚……」

「じゃあ、さっさと移動したほうがいいね」

「とーりーざーかーなー……」

「そうだな」

　トマトクンは一つ息をついてあたりを見まわした。マリアローズもトマトクンにならった。ユリカや多少落ちつきをとりもどしたサフィニア、ピンパーネルもきょろきょろしている。馬ば鹿か魚が一匹ぴき、鳥魚鳥魚鳥魚と戯たわけた歌を独唱していてうるさいが、かまうとつけあがることは皆、わかっているので、誰も相手にしない。なんて見事なチームワークだろう。

　現在、マリアローズたちがいる場所は、やわらか棚シエルフ樹ツリーと硬かたい棚シエルフ樹ツリーの間で、高さはだいたい二メーテルくらいしかない。広さは、どうだろう。三十メーテル四方──四角くはないので、四方という言い方はおかしいが、とにかくだいたいそれくらいだ。ちなみに、やわらか棚シエルフ樹ツリーは硬い棚シエルフ樹ツリーよりも狭せまい。逆密林の太陽は下にあるから、やわらか棚シエルフ樹ツリーは硬い棚シエルフ樹ツリーの陰かげにあるということになる。もしかしたら、そのあたりがやわらか棚シエルフ樹ツリーがやわらかいことに何か関係しているのかもしれないけれど、まあ、どうでもいいと言えばどうでもいい。

　棚シエルフ樹ツリーは大きな穴の側面に自生している樹木が大おお本もとだ。当然、たどってゆけば必ず岩がん壁ぺきに突きあたる。侵クラ入ツ者カーたちは、その岩壁に階段みたいなものを作りつけたり、梯子はしごをかけたり、また、樹木から樹木へと伝ったりして少しずつ穴を降り、これまでフリアウ逆密林の探たん索さくを進めてきた。もちろん、マリアローズたちもそうした階段やら梯子やらを利用して百メーテル以上、降りてきたのだが、そこからさらに十メーテル以上、落下してしまった。

　問題は、かつてここまで降りてきた者がいるのか、ということだ。

　いれば、上への階段か何かが見つかるだろう。

　いなければ、自力でどうにかして這はいあがらないといけない。

　それは、正直、かなりきつい。

　ジャドーたちの鳴き声が聞こえる。

　さして遠くはない。

　追ってこようとしているのか。

「穴・ありマス」

　ピンパーネルが岩壁のほうを指さした。

　マリアローズは目を凝こらしてその方向を見た。上下を棚シエルフ樹ツリーに挟はさまれているせいでだいぶ暗いからか、よくわからないが、ピンパーネルは目も耳も人一倍いい。そのピンパーネルがあると言うのだから、間違いなくあるのだろう。

「行ってみるか」

　トマトクンが大たい剣けんを背中に戻もどして大おお股またで歩きだした。マリアローズはユリカやサフィニアと顔を見あわせてからトマトクンを追いかけた。ピンパーネルは皆の背後を守るべく、最さい後こう尾びにつくつもりだろう。まだ鳥魚の唄うたを歌っているアホアホ半魚人はどうするのか。知ったことじゃない。ずっとここで耳みみ障ざわりで傍はた迷めい惑わくな唄を独唱していればいい。そうしていつか朽くち果ててしまえばいいのに、歌声は遠ざかることなくついてきた。

「とーりーざーかーなー。とーりー。とりとりとーりー。とりざかなー」

　半魚人といえども、さすがに一人で、いや、一匹で取り残されるのは心細いのか。でも、ここで折れたら腐ふ敗はい半魚の思う壺つぼだ。引きつづき無視だ、無視。

「とっりー♪　とととととととととっりざっかっなー♪　とっりーざっかっなあー♪」

　徹てつ底てい的に無視。

「とおおおりいいいぃぃぃ♪　とりいいいぃぃぃのさかなはとりざかなあああぁぁぁ♪」

　しっかし、うっさい。マジうざい。

「……すみません」

　サフィニアが下を向いて小走りに走りながら、しぼりだすように言った。

「……わたしのせいです……わたしが……あんなことに……ならなければ……」

「気にしゅることはないわ、サしやフィニア」

「そうだよ。何かヘマをしたわけじゃないんだしさ」

「……ですが……」

「まあ、すっごく崩くずれやすいっていうか、薄うすい場所があって、たまたまそこを通っちゃっただけでしょ」

「ようしゅるに、偶ぐう然じえんなのよね。サしやフィニアじゃなくて、わたしがしょこを通っていたかもしれないわけだし」

「……それは……でも……」

「そうそう。ちょっと運が悪かったってだけで──」

　マリアローズはそこまで言ったところで、慌あわてて口を押さえた。しまった。つい口が滑すべった。おそるおそるサフィニアを見ると、うつむいているどころの騒さわぎじゃない。足は止めていないけれど、身体からだ全体が沈しずみこんでしまいそうになっている。サフィニアの前では、運が悪い、不運、アンラッキーなどの言葉は禁句なのだ。正直、マリアローズは、サフィニアと一いつ緒しよにいたせいで、というような経験をしたことがないので実感がわかないのだが、本人が気に病やんでいるのだから注意するべきだろ

う。迂う闊かつだった。

「ご、ごめん」

「……い……いえ……」

「とりー♪　とっとりー♪　とりざかなー♪　さかなどーりー♪　さかさかさかなー♪」

「カタリ」

　完全にお姉ちゃんが弟を叱しかるときの声こわ音ねだった。

　ユリカだ。

「いい加減にしなしゃい。しちゅこいわよ」

「……えらいすんまへん」

　しゅんとなっても半魚人は半魚人だが、やかましいよりはずっとマシだ。どうもユリカの言うことはわりと聞くみたいなので、どうせならいつも手た綱づなを締しめていて欲しいものだが、そこまで望むのは酷こくか。ユリカもそんなにツッコミ向きの性格じゃないし。ということは、やっぱりマリアローズがなんとかしないといけないのか。もともと、ツッコミを期待されてＺＯＯに入ることになったという部分も、なきにしもあらずだし。というか、そのあたりについては、ユリカにはっきり言われたような覚えもあるし。ユリカも苦労してきたということだろう。なんてことを考えているうちに、岩がん壁ぺきはもうすぐそこだった。穴はたしかにあった。横穴だ。そう大きくはない。むしろ、小さい。直径一・五メーテルくらいの丸い穴だ。しかも、雑多な植物に埋うもれかけていて、近づいても見落としかねない。さすがピンパーネルだ。よくも遠くからこんな穴を見つけられたものだ。

「入るぞ」

　トマトクンはためらうそぶりをまったく見せずに、植物をかきわけながら穴の中へと足を踏ふみ入れた。背の高いトマトクンにとっては狭せますぎる穴だが、屈かがめばなんとか先に行けるようだ。マリアローズたちも一列になってあとにつづいた。穴の中は真っ暗だった。ほとんど何も見えないが、高さも幅はばもないだけに、手て探さぐりで進める。足あし許もとはごつごつしていて歩きづらい

けれど、歩けないことはない。空気がだいぶつめたくなってきた。フリアウ逆密林は、何せ下に太陽があるものだから、アンダーグラウンドの中でも一、二を争うくらい温度が高い。

「まさか、行き止まりってことはないよね」

「それはないんじゃないか」

　前を行くトマトクンが天てん井じように頭をぶつけて、ぬ、と唸うなった。地味にこれまでも何度かぶつけている。身体が小さくてよかったと思うのはこういうときくらいだ。

「空気のにおいがフリアウとは違ちがう。どこかにつながってるんだろう」

「Ｄ13かな」

「わからん」

「方向から考えると、たぶんＤ13だと思うんだけどね。僕もあんまり自信が……」

　よく知られている事実だが、アンダーグラウンドの中では方位磁石が正常に働かない。おかげで正確な方角を知る手立てがなく、地図を作るのにも苦労する。そうした事情もあって、アンダーグラウンドの地図は決して安くない。偽にせ物ものもたくさん出回っている。

「む……」

　トマトクンが足を止めた。

　一いつ瞬しゆん、皆みなの間に緊きん張ちようが走ったけれど、すぐにとけた。

「曲がり角だな」

　トマトクンはまた進みだした。どうやら行く手が六十度か七十度くらい右に折れているようだ。暗くら闇やみの中でもトマトクンの足どりに迷いは感じられない。そのおかげか、不安なんて少しもないとは言わないけれど、暗視鏡を持ってこなかったことを後こう悔かいしていられる程度の余よ裕ゆうはあった。まあ、仕方ないと言

えば仕方ないことではある。太陽があるフリアウ逆密林では暗視鏡なんて必要ない。不必要な荷物を携けい帯たいして重量が増えれば、そのぶん動きが鈍にぶくなるし、戦利品を持ち帰るときの邪じゃ魔まにもなる。いつもギリギリのところでやってきたマリアローズは、徹てつ底ていして無む駄だを省く方法が染しみついていた。生き抜ぬくために、効率よく稼かせぐためには、そうしなければならなかった。手を抜くと、だいたいしっぺ返しを食った。とりかえしがつかない大きな過あやまちを犯おかす前に、ああしよう、こうしよう、こうしなきゃ、と考えるのが習い性しようになっていた。それが悪いことだとは思わない。

　でも、もう少しゆとりを持ってもいいのかもしれない。

　少なくとも、ＺＯＯのみんなと行動をともにしている間は、僕は一人じゃないんだ。

　何もかも自分でやらなきゃいけない。そう思ってきたけれど、じゃあ、何でもかんでもできるのかと言えば、そんなことはない。ありえない。

　わかっていたことではあるけれど、僕はちっぽけだ。非力で、未熟で、雑ざ魚こ中の雑魚だ。いつもカタリのことを半魚人だ腐ふ乱らん半魚だ何だと罵ののしっているけれど、本当はそんなことが言える身分じゃない。実際はカタリのほうがずっと、何倍も、それ以上に腕うでが立つ。お宝やアンダーグラウンドの知識でも勝てない。カタリは、そういう性格だから、ツッコミを入れやすいようにボケてくれているだけだ。いや、そこは半分以上、というか八割か九割くらい天然かもしれないけれど、ツッコミ役が不在だったＺＯＯでずっと一人ボケつづけてきて、それなりに寂さびしさ、むなしさがあったんじゃないかと思う。それで、今は嬉き々きとしてボケている。ツッコミを期待されている。それはわかる。ただ、せっかくクランに入ったのに、求められている役割がそれだけというのはちょっと悲しい。もっと言えば、立つ瀬せがない。じゃあ、どうすればいいのか。何をすれば、ＺＯＯの中で確固たるポジションを築いてゆけるのか。

　正直、これがさっぱりわからない。

　あんなことができそうだとか、こうしたらどうだろうとか、よさそうなアイディアが浮うかんでも、よし、これだ、これしかない、これが最善だ、とまでは思えない。

試ためしに仲間たちと自分を比べてみると、出てくるのはため息だけだ。

それくらい差がある。

絶望的な差が。

ただ、だからこそ、自分一人でどうにかしようなんて考えは捨てるべきなのかもしれない。

そんなふうに思いはじめている。そうするしかないってだけだけどさ。

「どこかに出そうだ」

トマトクンがそう言ったからかもしれないが、前方が開けているようなかんじがした。依い然ぜんとして暗いままだけれど、狭い場所に無理やり押しこまれているかのような閉へい塞そく感が、ふっ、と弱まったというか、急に息苦しくなくなったというか。

どうやら気のせいではなさそうだ。ずっと伝って歩いていた岩の側そく壁へきが唐とう突とつに消えた。右側だけじゃない。左側も同じだ。たぶん、天井も高くなった。それだけじゃない。

「明かりが……」

前方だ。

何かの隙すき間まから、かすかな光がちらちらともれ、揺ゆらめいている。

さらに進むと、たくさんの大きな四角い石が乱雑に積まれていて、その向こうに光源があるらしいことがわかった。

「Ｄ13みたいやな」

カタリがそっと呟つぶやいた。

「下層のダーナムレーンやろ。蜥蜴とかげ人じんは腕のええ石工や。それに、ダーナムレーンには火管シユ・ダっちゅう管状の照明設備が張りめぐらされとる。たぶん、あれは火管シユ・ダの明かりやで」

「腕のいい石工ってわりには、ずいぶん適当に積んであるけど」

「わからんけども、石切場か何かちゃう？」

「蜥蜴人がいるかもしれないね」

「いや」

　トマトクンが首を振ふった。

「気配がない。何もいないんじゃないか。ピンプ、念のため探さぐってきてくれ」

「はイ」

「他ほかはここで待機」

　マリアローズ、ユリカ、サフィニア、カタリがうなずくと、ピンパーネルは闇と同化する影かげのようにすっと離はなれていった。

　砂色の元アッサシンはものの二、三分で戻もどってきた。

「何モ・いまセン」

「じゃあ、明るい場所で少し休むか」

　トマトクンは積まれた石の隙間を通り抜けていった。マリアローズたちもつづいた。そこはたしかに石切場兼けん石加工場といった雰ふん囲い気きの場所で、削けずりだして四角く加工している途と中ちゆうの石が放置してあったり、石の欠片かけらが隅すみのほうにどけてあったりした。積まれているのは、形が整っていなかったり角が欠けてしまったり割れてしまったりしている利用価値のない石材のようだ。火管シユ・ダとかいう管状の照明設備は、奥のほうや天てん井じよう、床ゆかの一部に張りめぐらされているものの、ところどころ光っていない管もあったりして、なんだかさびれた印象を受ける。石材にも埃ほこりが積もっているし、蜥蜴人の姿がないことから考えても、以前は利用されていたのだろうが、少なくとも最近は使われていないようだ。

「なんやこういうのんを見ると、あれやな」

　カタリは加工途中の石材に腰こしを下ろして、ほんの少しだけ魚

顔をゆがめた。

「異界フリー生物クスもわしらとおんなじように生活しとんのやなあとか思て、ビッミョーにビミョーな気分にならんこともないな」

「しょうねえ」

　ユリカはカタリの隣となりにちょこんと座ってため息をついた。

「なんとなく、アンダーグラウンドの中の生き物はじぇんじぇん別べちゆ物もので、どちらかというと敵みたいな感覚でいるけど、わたしたちがここに入りこみしゃえしなければ、あっちから何かしてくるわけでもないし」

「……ですが……」

　サフィニアはユリカの隣に腰かけた。疲ひ労ろう困こん憊ぱいしているようにも見えるけれど、元気がないのはいつものことだ。

「……何かしてこないのは……あくまで、キング・グッダーのおかげで……古代九頭竜の呪のろいがなければ……彼らは地上に出てきて……わたしたち人間にとって……大きな脅きよう威いになると思いますが……」

「もともとエルデェこのイニオンあたりは連中の縄なわ張ばりだったからな」

　トマトクンは別の石材に腰を落ちつけて、ポキリと首の骨を鳴らした。

「連中が俺たちの敵というよりも、連中にとって俺たちは敵なんだろう」

「なんで異界フリー生物クスにとって僕たち人間が敵なの？」

　マリアローズはトマトクンの横に座った。ピンパーネルは立ったままだ。ゆっくりとあたりを見まわしている。皆みなが休んでいる間、警けい戒かいにあたるつもりなのだろう。

「なんで、か」

　トマトクンは顎あごを撫なでた。

「さあな。そんなことは俺じゃなくて、やつらに訊きいてくれ」

「言葉が通じないよ」

「通じるやつもいるぞ」

「あー。メリクルの上位種とか？」

「あれはこの千年で進化したんじゃないか。もともとはペットみたいなものだったからな。それこそ蜥蜴人だの悪あく魔まだのに飼われてたんだ」

「へえ。初めて聞いた。そんな話」

「わしも知らへんかったなあ」

「わたしもだわ」

「……わたしも……初耳です……」

「そうか」

　トマトクンは片かた眉まゆをつりあげて後ろ頭を掻かいた。

「まあ、言葉が通じるといったら、まず悪魔だろうな。ぜんぶじゃないが」

「そういえば、ファッルーカとか赤の男だん爵しやくとか、普ふ通つうに共通語で喋しやべってたね」

「うむ」

「でも、なんで僕ら人間を目めの仇かたきにするのか、なんて訊いたって、真ま面じ目めに答えてくれないような気も──」

「シッ」

　ピンパーネルが右手をあげて、左手の人差し指を唇くちびるにあててみせた。ただちに皆、口をつぐんでピンパーネルの動きに注目した。

　ピンパーネルはフリアウではなく、ダーナムレーンの奥のほうへ身体からだを向けている。視線は斜ななめ上だ。聴ちよう覚かくに

神経を集中させているのかもしれない。

　マリアローズはトマトクンの顔を見た。

　トマトクンは立ちあがって大たい剣けんの柄つかに手をかけているけれど、落ちついているようだ。

　ピンパーネルがトマトクンに目をやった。

「少なイ」

「隠かくれろ」

　ピンパーネルの端たん的てきな説明に負けず劣おとらず、トマトクンの指示は短かった。

　マリアローズたちはできるだけ足音を立てないようにして石切場の隅へと移動し、石材の陰かげに身をひそめた。隠れられそうな場所はいくらでもあったので、苦労はしなかった。さすがに多少は緊きん張ちようした。ただ、恐きよう怖ふはない。一人じゃないから。仲間のおかげだ。

「きよった」

　カタリが小声で言った。

　そのとおりだった。

　奥のほうから石切場に入ってきたのは、全身が青い鱗うろこに覆おおわれているすらっとした蜥蜴とかげ人じんだった。きらびやかな胸当てと、右みぎ肩かたに肩当てをつけて、きらきらした鎖くさり脚きや絆はんを穿はいている。腰に提さげている剣の拵こしらえも見事だ。相手は異界フリー生物クスなので、人間の美的感覚に照らしあわせて判断していいものかどうか迷うところだが、顔立ちにもどことなく気品があって、ひとかどの人物、いや、蜥蜴人物（？）という印象を受ける。たとえば、王子様、とか。まあ、そこまでゆかなくても、いいところの坊ぼつちゃん、みたいな。そんなに年寄りっぽくないし。貴公子。そう。まさしく蜥蜴人の貴公子といったかんじだ。

　貴公子は石切場の真ん中あたりで足を止めた。

ゆっくりと首を巡めぐらしているけれど、見回りにきたとか、マリアローズたちの気配を察知して様子をうかがいにきたとか、そんな雰ふん囲い気きではない。それなら剣の柄に手くらいかけてもよさそうなものだし、あんな身なりのいい蜥蜴人が一人──人間じゃないけれど、まあいいか、一人でパトロールなんてしないだろう。なんていうのも人間的な考え方にすぎないわけで、蜥蜴人の世界ではどうなのか、正直まったくわからないが、やっぱり違ちがうと思う。

だって、貴公子は石材の一つに腰こしを下ろした。さらに、うつむいて、頭を軽く左右に振ふったり、ため息をついたりしている。蜥蜴人も人間みたいにため息をつくんだ。

しかし、いったい何をやっているんだろう。

見たところ、何か考えごとをしているようだ。悩なやみでもあるのか。蜥蜴人に悩み？　いや、ため息をつくくらいだ。悩みの一つや二つ、あってもおかしくはない。トマトクンが言っていたように、異界フリー生物クスにとって人間は敵なのかもしれないし、そうだとしたら結局、人間にとっても異界フリー生物クスは不ふ倶ぐ戴たい天てんの敵でしかないのかもしれないけれど、敵には敵の生活があって、高度な知能を持っていれば、あいつが嫌きらいだ、とか、でもうまくやっていかないと、とか、惚ほれた腫はれた、でも、身分の差が、とか、いろいろあるだろう。貴公子は社会的な地位も高そうなので、たぶんさまざまな面で恵めぐまれているのではないかと推測されるが、高貴な家に生まれついたからといって、脳天気にピンピロポーンという具合に生きてゆけるわけでは必ずしもない。我がＺＯＯの半魚人も、家いえ柄がらはいいのに、なかなかハードな過去を背負っている。本人が望んだわけでもないのに、背負わされてしまった。貴公子にも何かあるのかもしれない。

ぜんぶマリアローズの想像にすぎないわけだが。

てゆうか、どうでもいいっちゃあ、どうでもいいし。

でも、なんか、バッと襲おそいかかって、貴公子をぶち殺して、身ぐるみ剝はいで、みたいな気持ちにはどうもなれない。

あんな人間的な仕し種ぐさを見てしまったせいだろうか。

甘いのかな。

　そうかもしれない。

　マリアローズはトマトクンを見た。視線に気づいたトマトクンが、マリアローズのほうに顔を向けた。声は出せない。目線と表情で言ってみた。

（どうする？　やる？）

（うーむ……）

　トマトクンも迷っているようだ。もっとも、トマトクンが考えているのは別のことかもしれない。たとえば、貴公子は放ほうっておけばそのうちいなくなるかもしれないし、しとめる前に騒さわがれて、他ほかの蜥蜴人を呼びよせられでもしたら、それはそれで厄やつ介かいだ。とりあえず、少なくとも今はまだ貴公子はこちらに気づいていない。だったら、じっとしていたほうがいいのではないか、とか。

（いや）

　真意はわからないけれど、結局、トマトクンは首を横に振ってみせた。

（少し待つ）

（了りよう解かい）

　正直、ほっとした。なんとなく、今、よってたかって貴公子を殺したら、後味が悪そうだ。弱小侵クラ入ツ者カーといえども、それなりに自分の手を汚よごしてきたわけだし、今さら、という気もしないではないが、精神衛生上、いやな思い出は少ないほうがいい。所しよ詮せんはただ生きるため、金のためだけに生き物を殺さつ戮りくしてきた極ごく道どう者ものでしかないとしても、良心みたいなものがまったくないかと言えば、そんなことはないのだ。

　善行を積んで、他人に尊ばれて、自分も嬉うれしくて、幸せで、それだけで清く正しく寿じゆ命みようがつきるまで生きてけるっていうなら、喜んでそうするけどさ。

　ここしかなかった。

　このエルデンしか。

ここで生き抜ぬくためには、こんなやり方しかなかった。

他にもあったのかもしれないけど、思いつかなかったし、いい方法を考えつくまで思案に暮れているような余よ裕ゆうなんかなかった。

ＺＯＯに入ってから、ようやく、少しだけ、自分が何をやってきたのか、とか、自分はどうしたいのか、とか、何をしたほうがいいのか、とか、どんなことをするべきなのか、とか、腰を据すえてじっくり考えることができるようになってきた。

昨日は何ダラー稼かせいで、今日は何ダラー、何にどれだけ使って、収支がどうだ、とか、もっと節約しなきゃ、とか、もうちょっと稼がないと、とか、そんなことばかりじゃなくて、僕はどこへ歩いてゆくんだろう。この先には何があるんだろう。こっちでいいのか。方向は間違っていないか。そんなふうにごちゃごちゃと頭を悩ませるのが、自分にとっていいことなのか、よくないことなのか、じつは、そこのところが一番わからない。

アンダーグラウンドにもぐっている間は、わりと気が楽だったりする。

面めん倒どうくさいことは考えなくてもいいからだ。

目の前の状じよう況きように対処するだけでいい。

今日だって、難しいことは何もなかった。雌めすジャドーの飾かざり羽根が、この先、市場で値上がりする。半魚人がそんな情報を仕入れてきた。なんでも、某ぼう国こくの王がこの飾り羽根をふんだんに使った陣じん羽ば織おりを大量に揃そろえて、みずからの親衛隊に着せようとしているらしい。それで、ひそかに某国の王の命令を受けた御ご用よう商人が、鉄てつ鎖さの憩いこい場の露ろ店てんなどでこっそり飾り羽根を買い集めている。この動きはまだおおっぴらになっていないし、気づいている者はごくわずかのようだが、それも時間の問題だ。いったん情報が広がりはじめれば、フリアウに侵クラ入ツ者カーが殺さつ到とうするだろう。ただ、雌ジャドーは雄おすジャドーのようにたくさんいるわけではない。侵クラ入ツ者カー同士の奪うばいあいも起こるはずだ。飾り羽根の供給量が急速に、爆ばく発はつ的に増えるとは思えない。値段は高こう騰とうする。ある程度の量をあらかじめ確保しておいて、そのときに売り払はらえば一ひと儲もうけできるに違ちがいない。まあ、そう

いう怪かい情報は年中無休で数かぎりなく流れていて、あたることもあれば外れることもあり、信じた者が馬ば鹿かを見て、信じなかった者は嘲あざ笑わらう、といった展開も珍めずらしくないのだけれど、雌ジャドーの飾り羽根はある種の魔ま術じゆつの触しよく媒ばいになるらしい。需じゆ要ようはあまり多くないようだが、無価値では決してない。とっておいても損にはならないだろう。

　その程度の気持ちだったのに、こんなことになるなんて。

　というか、落ちつかないにもほどがある。

　貴公子のことだ。

　立ったり座ったり、うろうろしたり、あたりを見まわしたり、ため息をついたり、もしかしてマジで悩んじゃってる？　思い悩んでる？　懊おう悩のうしちゃってます……？

　いいかげん疲つかれてきたし、黙だまっているのに飽あきてきた。ピンパーネルは黙もく然ぜんとして貴公子の動向をうかがっていて、サフィニアも下を向いてじっとしているけれど、ユリカはちょっと退たい屈くつそうだし、半魚人なんて暇ひまを持てあまして無む駄だに身体からだを動かしたり変な顔をしたりしている。トマトクンは──きみってやつは、あっそう、そうなんだ。ふーん。なるほどねー。そういう人だと思ってたけどね。結構どこでもだもんね。これが初めてってわけじゃないしね。でも、いくらなんでも、やっぱりどうかと思うよ？

　寝ねてるし。

　寝ないでよ。

　寝るな。

　寝るの禁止。

　叩たたき起こしてやろうかと思った。

　ピンパーネルが右手をあげた。

　左手の人差し指はフリアウのほうを指している。

　ひょっとして、フリアウからも何かが……？

　トマトクンが目を覚まし、洟はなをすすろうとして思いとどまった。それから、（何だ？）みたいな顔をしてみせたが、何だ、じゃないよ。何だ、じゃ。そうはいっても、何か起きると、というか起きる前にちゃんと目覚めるあたりは、責任感なのだろうか、勘かんがいいのか、それとも運がいいだけか。

（何かくるかもだって）

　マリアローズはピンパーネルが指しているほうを示してみせた。

（ふむ）

　トマトクンは口をひん曲げて頬ほおを掻かきながら、そっちへ目をやった。どうも緊きん張ちよう感かんがない。いいのかな、それで、と思う半面、トマトクンが張りつめていないと、ついこっちまでリラックスしてしまう。なんか、まあ、トマトクンがこうだってことは、なんとかなるんでしょ、大だい丈じよう夫ぶだよね、たぶん、みたいな気分になってしまうのだ。

　何だろう。

　影えい＞響きよう力りよくというか。空気を変える、自分の色に染めてしまうというか。オーラがある、という言い方があるけれど、そういうのにも近いかもしれない。

　園長マスター、か。

　たしかに、園長マスターなんだよね。

　今ここにいる六人の中で、トマトクン以外が園長マスターなんて、ありえない。想像もできない。

　才能なのかな。

　僕には何かあるのかな。

　ないような気がして仕方ない。

　僕にはきっと、何もない。

　何もないなりに、何かできるかな。できるといいんだけど。何かできないと、僕は。

「ををっ……」

　大きな声ではなかった。ごくごく小さい声だったので、ぶん殴なぐるのはやめておいた。半魚人の半魚頭を殴った音で気づかれてしまったら、元も子もないわけだし。

　フリアウのほうから、雑に積みあげられた石材の隙すき間まを通り抜ぬけて、何かが石切場に入ってきた。

　何か？

　いや──誰か……？

　一いつ瞬しゅん、迷ってしまった。

　だって、まるで人間みたいだ。

　少なくとも、顔は人間の女性と大差なかった。黒目がちすぎるし、白い肌はだの質感が人間のそれとはちょっと異なっているけれど、人間の基準でいえば、間違いなく美女の部類に入るだろう。上半身だけじゃなく、下半身までつるっとしていて、胸や腰こしを覆おおう布は色とりどりの羽根や宝石などで装そう飾しよくされている。とはいえ、彼女はやっぱり人間じゃない。まず、髪かみの毛だ。毛じゃない。あれは羽根だ。彼女の頭は羽根で覆われている。まあ、その羽根も一本一本が細長くて、いわゆる鳥の羽根とはちょっと違うかんじなので、髪の毛みたいに見えないこともない。きれいな飾り羽根も髪飾りのようだ。ただ、三さん対ついの翼よく腕わんがある。彼女はそのうちの二対を背中に折り畳たたんで、一対を腕うでのように使っているみたいだが、あんなものは絶対、人間には生えていない。わかりきったことではあるけれど、彼女は人間じゃない。

　鳥人ジャドーだ。

　ジャドーの雌めすだ。

「……えらい別べつ嬪ぴんやないか……」

　半魚人の目がハートマークになっていた。さすが半分以上人間じゃないだけある。見た目がよければ、何でもいいみたいだ。だけど、変な話、半魚人じゃなくても、あれなら問題ない、ぜんぜんいける、と思う人は結構いるんじゃないだろうか。

　それくらい彼女は美しい。

　問題は、その美鳥人ジャドーが、何をしにＤ13に侵しん入にゅうしてきたのか、ということだ。

　マリアローズたちを追ってきたのか？　一人──人、と言っていいのかどうか、いや、やっぱりここは、一人、と言うべきだろう、彼女一人で？　雄おすどもを引き連れずに？　違ちがうだろう。その可能性はまずない。そんな雰ふん囲い気きじゃない。蜥蜴とかげ人じんの貴公子みたいに、彼女も腰に細い剣けんを吊つるしているけれど、手をのばそうとするそぶりも見せていないのだ。でも、それって変じゃない？　変だよ。絶対おかしいって。

　石切場には、マリアローズたちだけじゃない、貴公子がいる。

　マリアローズたちは隠かくれているので、美鳥人の目に入っているのは、もちろん、貴公子だけだろう。

　美鳥人は、一度、はっとしたように足を止めた。

　貴公子も美鳥人を見て、全身をこわばらせた。

　あいにく鳥人語も蜥蜴語もわからないので、ここからは想像力で補いつつお送りします。実際の様子とは多少異なっているかもしれませんが、ご了りよう承しようください。

「姫ひめ……」※美鳥人はお姫様っぽいので。

「王子……」※美鳥人がお姫様だとしたら、貴公子は王子様だろうと仮定して。

　美鳥人が貴公子に向かって駆かけだした。

　貴公子のほっそりして見える両腕がしなやかに美鳥人を受け止め、きつく抱だきしめた。

「姫……！」

「王子……！」

「ああ、姫」

「待っていてくださったのですね、王子」

「もちろんです、姫。私は姫がいらっしゃるまで、いつまでも待つつもりでおりました。たとえ時がこの身を朽くち果てさせようとも」

「ああ、王子」

　美鳥人は目を閉じて貴公子の胸に顔をうずめた。

「何やら騒そう動どうがあって、ここへくるのが遅おそくなってしまったのです。本当です。言い訳だとは思わないでくださいまし、王子」

「私が姫のお言葉を疑うとでも？」

「いいえ、いいえ、そのようなことは、決して」

　美鳥人は頭を左右に振ふった。

　貴公子はいとおしげに美鳥人の頭を撫なでて、そっと微笑ほほえんだ。

　美鳥人と貴公子は見つめあっている。

　あからさまにいいムードだ。

「……うをををを……そ、そこで、ぶちゅーっと……」

　てゆうか、うっさいんですけど、半魚人。

　でも、美鳥人と貴公子は完全に二人の世界に入りこんでしまっているようで、こっちには気づきそうもない。

　マリアローズもちょっぴりどきどきしたが、二人は結局、それ以上の行こう為いには及およばなかった。だいたい、美鳥人はともかく、貴公子のほうは、たしかに端たん整せいといえば端整な容姿ではあるものの、蜥蜴だ。あの口で、ぶちゅーっ、みたいなことをやるのは、ちょっと無理がありそうな気がする。蜥蜴人や鳥人にそういう習慣があるのかどうかもよくわからないし。絶対にないとは言いきれないけれど。習慣云うん々ぬんよりも、蜥蜴人と鳥人がこういう仲になるっていうのはどうなんだろう。ゲルル・デッドハント

著『私と鳥人ジャドーと愛人と元妻』によれば、すこぶる仲が悪いんじゃなかったっけ……？

　貴公子は美鳥人の手を引いて石材のところまで導き、二人並んで腰かけた。

　また見つめあっている。

　会話はない。

　もしかして、道ならぬ恋こい、というやつなのだろうか。

　何かがきっかけで想おもいを通わせるようになった二人が、同族の目を忍しのんで、打ち捨てられた石切場で密会している。

　どうもそんな雰囲気だ。

　ここからはふたたび想像力全開でお送りします。

「姫」

「はい」

「ここで姫を待っている間、私はずっと考えていました」

「何を考えてらっしゃいましたの、王子」

「私は隠し立てなどすることなく姫とお会いしたい」

「それは……わたくしも同じ気持ちでございます。ですが……」

「そう。私は蜥蜴人で、姫はジャドー。我々は長い年月、いがみあってきた」

「互たがいをよく知りもせぬまま」

「そのとおりです。姫と出会うまでは、私もジャドーは敵だと考えていた」

「わたくしもそう教えられて育ちました」

「姫にも母君がおられ、父君もおられよう」

「父は幾いく人にんもいるのです。ジャドーの女の多くは、大勢の夫を持つものですから……」

「そ、そうか」



「とはいえ、わたくしの心に住まうのは、王子ただお一人」

「私もそうです。普ふ通つう、蜥蜴とかげ人じんの男は、何人もの妻を持つものだが……」

「そ、そうなのですか」

「あ、ああ」

「………………」

「………………」

「……わたくしは、気にしません。たとえ王子が何人の妻をお持ちになろうと。わたくしをその末席に加えていただけるのでしたら……」

「な、何を言う。私は姫だけです。姫以外の者を娶めとる気などない」

「まあ」

「慣習。あくまで慣習なのです。我ら蜥蜴人とジャドーが争ってきたのも慣習のようなものだ。蜥蜴人の一夫多妻もしかり。ジャドーの一妻多夫もしかり」

「そうですわね」

「変えることは難しい。だが、不可能ではないはずだ」

「ええ、もちろんですわ」

「変えるのです。姫のために」

「ああ、王子」

「姫」

　二人は目をつぶってかたく抱だきしめあった。

　まあ、一応、何か話しているようではあるが、台詞せりふの部分はすべて想像に基もとづいているので、まったく違ちがう会話が交かわされている可能性もある、というか、その可能性はきわめて高いけれど、二人が想いあっていることは間違いなさそうだ。

うまくゆくとはとうてい思えないけど。ジャドーも蜥蜴人も凶きよう暴ぼうだし。ジャドーの雌めすや下等じゃないほうの蜥蜴人の知能はそれなりに高いのかもしれないが、やっぱり野や蛮ばんだという印象はぬぐえない。それとも、偏へん見けんなのだろうか。連中が人間を敵視していて、だいたい問答無用で襲おそいかかってくるものだから、そんなふうに見えてしまうだけなのか。貴公子と美鳥人が蜥蜴人とジャドーの架かけ橋になって、両種族の間に友好関係が結ばれる。それはないんじゃないの、と思う。でも、べつに明確な根こん拠きよがあるわけじゃない。ということは、あってもおかしくないのか。どうなんだろう。わからない。

どうでもいいことではある。

仮に蜥蜴人とジャドーが手を結んだとしても、人間にはあまり関係ない。研究者にとっては興味深い変化かもしれないけれど、侵クラ入ツ者カーにしてみればどっちも獲え物ものだ。いや──でも、この事実は情報として貴重だったりしないだろうか。この証言は研究者に高く売れるんじゃないか。明らかに捕とらぬ狸たぬきの皮算用というやつだが、何でも金に換かえるくらいの気構えがないと、エルデンでは生きてゆけない。今はそこまで切せつ迫ぱくしていないにしても、いつ何があって困こん窮きゆうするかわからないのだ。

「……う……う、うう……」

従って、必死に涙なみだをこらえている半魚人の気持ちなんてこれっぽっちも理解できないし、理解する必要は微み塵じんもないと思う。てゆうか、バカじゃないの？　バカでしょ？　バカだよね。完全に。

「悲ひ恋れんやなあ。かわいそうやで、ホンマ。ちゅうか、ええのう、あんな別べつ嬪ぴん。蜥蜴のくせしくさりおって。わしやったら、わしやったらなあ……」

しかも、うらやましがってるし。半魚人が蜥蜴人をうらやんでどうするんだよ。まあ、半魚人と蜥蜴人、どっちがマシかっていったら、かなり微び妙みようだけどね。もし、絶対どっちかにならないといけない、みたいな選せん択たくをしないといけなかったら──どっちもやだけどさ。即そく座ざに半魚人を選べないあたりに、半魚人っていう存在の微妙さが表れてるような気も。

「む」

　不意にトマトクンが片方の眉まゆをつりあげて大たい剣けんの柄つかに手をかけた。

　ピンパーネルも目つきを鋭するどくしている。

　空気が緊きん迫ぱくした。

　ただ、貴公子と美鳥人は相変わらず何か喋しやべりながらいちゃいちゃしている。

（どっち？）

　トマトクンに目で訊きいてみた。トマトクンが答える前に、ピンパーネルがＤ13のほうへ顔を向けて雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣に手をのばした。

　貴公子と美鳥人はまだ気づいていない様子だ。

　やがて足音が聞こえてきた。

　それでも貴公子と美鳥人はちちくりあっている。

　もう勝手にやってろ。

　マリアローズはゆっくりと息を吐はいた。

　きた。

　蜥蜴人だ。

　十か、二十か。

　石切場に入ってきた。

　わりと豪ごう華かな鎧よろいを身にまとって剣や槍やりで武装した蜥蜴人の一小隊といったかんじだ。

　貴公子は仰ぎよう天てんしたように身体からだを硬かたくして、だが、すぐに美鳥人を抱きよせてかばうような体勢になった。

「ＡｈｈｈｈｈｈｈｈｎＧｙｒａｓｈｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ……！」

　蜥蜴人小隊の小隊長とおぼしき恰かつ幅ぷくのいい蜥蜴人が、剣の切っ先を貴公子と美鳥人に突つきつけて何か叫さけんだ。

　貴公子は無言だ。人間なら顔色が真っ青になっているところだろう。まあ、貴公子の鱗うろこは青いので、最初から真っ青なのだが。

　小隊長は憤ふん懣まんやるかたないといったかんじで喉のどを低く鳴らした。

　ここからはまたもや想像力の限界に挑ちよう戦せんしてお送りします。

「王子……！　これはいったいどういうことです！　説明していただきましょう！　王子にはその義務がおありになるはずです！」

「……こ、これは……」

「お、王子」

　美鳥人は不安そうに貴公子の顔をのぞきこんだ。

　貴公子は腹をくくったようだ。

「心配無用です、姫ひめ。いずれはこうなるだろうと思っておりました。どのみちいつまでも隠かくしおおせるものではない。それが本意でもない。これはむしろよい機会だ」

「ああ、王子……！」

「姫……！」

　いや、いいから。その、抱だきしめて抱き返してどうのこうの、みたいなのはもう見み飽あきたし。さっさと話を進めてくれない？

　マリアローズの念が通じたわけでもないだろうが、貴公子は小隊長に向きなおった。

「というわけで、見てのとおりだ！　私は姫を愛している！」

「な──」

　小隊長は絶句した。あからさまに狼ろう狽ばいしている。

「な、な、な、何と申されました、王子、今、何と」

「聞こえなかったのか！　私は姫を愛している！」

「その者はジャドーですぞ！　我ら蜥蜴とかげ人じんの仇きゆう敵てきです！」

「私は仇敵などとは思っていない！」

「ジャドーとの戦いくさで命を落とした蜥蜴人が大勢いるのですぞ！」

「それはジャドーとて同じこと！　だからといってこのまま争いをつづければ、さらに血が流れる！　流れつづける！　流血の連れん鎖さはどこかで止めねばならぬ！」

「だからといって、王子！　王子には××××××様（さすがに聞きとれなかった。というか、このへんも想像なので）という許嫁いいなずけもおりますのに……」

「えっ、さようなのですか、王子」

「えっ、いや、それは、その……」

「王子……？」

「いや、だから、それは、ただ親が決めた相手で……」

「××××××様が悲しまれますぞ、王子！」

「あ、いや、でも、ほら、そのあたりは、言わなきゃわからないっていうか……」

「黙だまっておけと申されるのですか！　口止めしようと！」

「いや、そういうわけじゃないけどね？　そうじゃなくて、なんていうの、空気読めっていうか、ねえ？　あるじゃない、そういうの、やっぱり」

「王子……」

　美鳥人はあからさまに不ふ審しんがっている。

貴公子はどうも柔にゅう弱じやくというか、姿形は立派なので、ぱっと見は理知的で威い厳げんもそれなりにあるのだが、いったん弱よわ腰ごしになるとボロが出るタイプのようだ。

「いや、だから、そういう、ねえ？　まあ、ようするに、あれだよ、あれ、ぼくもさあ、結局のところ、雇やとわれ王子っていうか、いやべつに、雇われてるわけじゃないんだけど、それに近いっていうか、好きで生まれてきたわけじゃないしね？　こういう自分として生まれてきたのは、自分で選んだわけじゃないっていうか、だからその、生まれてきて、すまん、みたいな、そんな気持ちもないわけじゃないわけで、どういうことが言いたいかっていうと、つまり、どう言ったらいいのかな、ええと……」

「王子！」

小隊長が剣けんを振ふりまわしながら怒ど鳴なった。

「今ならまだ間に合います！　しょうがないから、××××××様にはこのことは秘密にしといてあげましょう！　ただし証しよう拠こは隠いん滅めつせねばなりません！　そのジャドーをお引き渡わたしください！　サクッと始末して焼き鳥にでもしてみんなで仲よく食べて、何もなかったことにしましょう！　美人のジャドーはうまいと言いますぞ！　さあ！」

「えっ、ええっ、こ、殺しちゃうの？　そ、それはちょっと、いくらなんでも……」

貴公子は小隊長と美鳥人を交こう互ごに見た。軟なん弱じやく者ものでも、さすがに愛した者をそんな目に遭あわせるのはしのびないと思ったようだ。あくまでぜんぶ想像だけど。

「い、いいいいいいいや！」

貴公子はふたたび美鳥人を強く抱きしめて首を左右に振った。美鳥人はちょっとだけほっとしたようだが、もちろん完全に安あん堵どしきれる状じよう況きようではない。目が泳いでいる。

「いやだっ！　私は、私は、私は、姫を愛してるんだ！　本気だ！　お、お、おおおおおおお前らは、も、もももももももももう帰れっ！　私のことは放ほっといてくれ！」

「そういうわけにはゆきませんぞ、王子！」

　小隊長が号令をかけると、蜥蜴人小隊の全員が一いつ斉せいに剣を抜ぬき、あるいは槍の穂ほ先さきを前方に突きだした。

「先ほども申しましたとおり、ジャドーは仇敵！　しかも、その者は身分ある雌めすジャドーとお見受けいたします！　見み逃のがしたとあっては蜥蜴人の名折れ！」

「だ、だだだだだだだだだだだだめだ！　ひ、ひひひひひひひひひ姫の身に傷一つでもつけてみろ！　ゆ、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ許さんぞお！」

「許されざる行いに手を染めているのは我々ではなく、王子なのです！」

「ゆ、ゆゆゆ許されざるうう……？」

「その雌ジャドーを我々にお引き渡しいただけないのでしたら、我々としても──」

「わ、われわれわれわれがな、なななななな何をするつもりだ何を」

「王子を反逆者と見なすしかありませんな！」

「な、なななななななな、は、ははははははは反逆者あああ あ……!?」

　一いつ触しよく即そく発はつだ。

　小隊長の命令があれば、蜥蜴人小隊はただちに美鳥人もろとも貴公子を討うつだろう。

　貴公子はもう泣きそうだし、美鳥人は怯おびえに怯えてガタガタ震ふるえている。

　こうなってしまったら、貴公子も観念するしかないか。所しよ詮せん、叶かなわぬ恋こいだ。悲ひ恋れんに終わることは目に見えている。なんとなく気まずくなって自然消しよう滅めつし、あとになって考えてみると、ああ、そんなこともあったよね、いやはやあのときはぼくも若かったよね、みたいな形よりも、こういう、ある意味、劇的な幕切れで終わってくれたほうが、見ているこっちとしてはおもしろいのだけれど、当人たちにとってはどうだろう。

貴公子はついに決断したようだ。

へっぴり腰で、それでも剣を抜いた。

小隊長以下蜥蜴人小隊が、怯ひるんだわけではないだろうが、一斉に半歩くらい後退したように見えた。貴公子がここまで抵てい抗こうするとは、彼らも思っていなかったのだろう。それはそうだ。何しろ数が違ちがう。どう考えても無む謀ぼうだ。小隊長も、かなり強い口調で貴公子に迫せまっていたが、きっと恫どう喝かつすれば丸く収まるだろうと高をくくっていたに違いない。火事場の糞くそ度ど胸きようか、破れかぶれか、錯さく乱らんしたのか、深く考えていないのか、とにかく貴公子は小隊長の予想を裏切った。こういうとき、小隊長がとるべき方法は、大きく分けて二つあるだろう。

一つは、交こう渉しよう継けい続ぞくか。

もう一つは、実力行使に出るか。

ここからはまたまた想像を交えてお送りします。

「──王子……」

小隊長はがっくりと肩かたを落として、深いため息をついた。

「残念です。情けのうございます。しかしながら、王子にお仕えして十余年。王子が過あやまちを犯おかされたのはこの爺じいの責任でもあります」

「じ、爺……」

へえ。小隊長って、貴公子にとってはじいやにあたる人だったんだ。いや、想像だけどね。てゆうか、ほぼ妄もう想そうだけど。雰ふん囲い気き的に、じつはそういう間あいだ柄がらなんじゃないかなあって。

「わ、私は……」

「さすれば、やはりこの爺が、この手で王子をお止めせねばなりますまい！」

「えっ、そ、そうなの？」

「当然です！　それが正しき蜥蜴とかげ人じんの責任のとり方と申すものです！」

「いやあ、そんな……ねえ？　責任とか硬かたいことばっかり言ってると、老ふけちゃうよ？　実際、老けてるわけだけど、もっとこうさあ、気楽にね？　人生を楽しむっていうか、ほら、爺だってもう若くないんだし、真ま面じ目めに真面目にってそればっかりじゃあね……？」

「黙だまらっしゃい！　これが爺の生き方でござる！」

「ご、ござるっ……？」

「さよう！　王子のごときペーペーの若造に口出しされるいわれはありませんな！」

「ちょっ、ちょ、ちょっと、それ、どうなの？　その口の利きき方？　無礼じゃないの？　これでもぼかあ王子ですよ？」

「あなたは王子だったのです！　もはやあなたにその資格はない！　今のあなたはただの裏切り者にすぎません……！」

「そ、そっ、そそそそ、そんなあ……！」

　貴公子はあとずさりしようとしたが、美鳥人のつめたい眼まな差ざしにぶちあたって思いとどまったようだ。ああ、ダメだ。もうしょうがない。どうしようもない。どうにでもなってしまえ。そんな心境に至ったのかもしれない。貴公子はぶるぶるっと首を振ふって、手にした剣けんを蜥蜴人小隊に向けて突つきだした。切っ先は揺ゆれまくっているけれど、一応、全員まとめてかかってこい、と言わんばかりの構えだ。いや、できればお一人ずつどうぞ、くらいか。美鳥人も細身の剣を抜いた。貴公子よりは遥はるかに肝きもが据すわっているように見える。貴公子は成り行きでしょうがなく、みたいなかんじだが、美鳥人のほうは二人仲よく討ち死にする覚かく悟ごができているのかもしれない。小隊長も腹を決めたようだ。

「ＳｙｙｙｙｙｙＧｙＳｙｈａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」

　蜥蜴人独特の空気を引き裂さくような小隊長の声は、おそらく、やれ、とか、かかれ、とか、ぶっ殺しておしまい、みたいな内容のかけ声だったのだろう。

蜥蜴人小隊が動きはじめた。

小隊長自身も剣を振りあげて貴公子に突っこんでいった。

「──あかん……！」

そして、半魚人も──、

て、え？

何？

なんで？

どういうこと？

マリアローズはまず我が目を疑った。半魚人が身を隠かくしていた石材の陰かげから躍おどりでていったという事実がどうしても信じられなかったからだ。信じたくなかったが、どうやら幻げん覚かくではないらしい。次に、半魚人がどうしてそんなことをしたのか、その理由、動機といったものを考えた。考えようとした。いっそのこと、一件落着するまでずっと考えていたかったのだけれど、あんな腐くさりかけの生ゴミみたいな半魚人でもＺＯＯの一員だ。とくに脳みそはそうとう腐ふ敗はいが進行しているものと思われるが、舌打ちをしつつトマトクンが、それから無言でピンパーネルが、さらにはユリカが半魚人のあとを追おうとしている。ということは当然、サフィニアもつづくだろう。自分一人だけじっとしているわけにもゆかない。

「もう……！　何なんだよ、いったい……！」

マリアローズはやむをえず偽にせ劫ごう火かを鞘さやから抜いて石材の陰から飛びだした。

カタリが愛用の変形斧おのを振りまわしながら大声を出した。

「ふおおおおおおおおおりゃああああああああああああどおおおお……！」

いや、奇き声せいを発した、に訂てい正せい。まあ、意図はわかりたくないけれど、わからないでもない。半魚人は蜥蜴人小隊の注意を引こうとしたのだろう。その目もく論ろ見みは成功した。奇声

を発しながら猛もう然ぜんと駆かけてくる半魚人を見て、蜥蜴人小隊はとりあえずびっくりしたようだ。それはそうだろう。こんなところになぜ人間が。蜥蜴人にしてみれば、そんな気持ちだったはずだ。

「ＧｙｙｙｙｙｙＳｙＨｙａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」

　小隊長は、だが、迷わず蜥蜴人小隊に新たな指令を出した。蜥蜴語はわからないけれど、小隊長の剣先が半魚人を示している。指令の内容は、うろたえるな、まずはあの人間を血祭りにあげろ、人間？　人間にしてはどうもアレだが、ともかく殺やれ、殺るのだ、といったところか。そんなわけで、蜥蜴人小隊は一いつ斉せいに方向転てん換かんしてこっちへ押しよせてきた。マリアローズとしては、冗じよう談だんじゃない、と叫さけびたい気分だったけれど、あの特大バカはバカだけに違ちがった。

「どっせえええええええええええええい……！」

　半魚人は正面から蜥蜴人小隊に飛びこんでいった。

　まったく臆おくすることなく槍やりをすり抜け、蜥蜴人に体当たりして突き倒たおし、その右みぎ隣どなりの蜥蜴人に躍りかかって二本の変形斧を繰くりだした。

「むおりゃりゃりゃりゃあああああ……！」

　斬きった、というよりも滅めつ多た打うちにした。

「ふんぬうっ……！」

　立てつづけに、左隣の蜥蜴人の膝ひざを蹴けっ飛ばしながら顎あごに斧の柄つか頭がしらの一いち撃げきを見み舞まった。

「でりゃでりゃおおおおおおおおう……！」

　そうして体勢が崩くずれたところに、間かん髪はつを入れず変形斧の三連打を食くらわせた。

　物の数秒だった。

　半魚人はあっという間に一人の蜥蜴とかげ人じんを吹ふっ飛ばし

て二人の蜥蜴人を戦せん闘とう不能に陥おちいらせてしまった。

　蜥蜴人小隊の動きが鈍にぶった。

　半魚人はこれ見よがしに二本の変形斧をくるくる回してみせた。

「おうおうおう！　多勢に無勢とはこのことやないか！　義を見てせざるは勇なきなりっちゅうてな！　見すごせへんで！　わしが相手じゃ！　かかってこいや……！」

「Ｓｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｈｈｈｈ……！」

　まさか人間（一応）の言葉を理解したわけでもないだろうが、小隊長が半魚人に突つきかかっていった。これがまた鋭するどい突きだった。鋭すぎて、マリアローズにはよく見えなかった。半魚人も仰ぎよう天てんしたようだ。尻しり餅もちをついて、なんとかよけた。

「──ひいぃっ……！」

「下がれ、カタリ……！」

　カタリの頭上すれすれの位置を、トマトクンの大剣が轟ごうッと音を立てて通りすぎた。もちろん小隊長を狙ねらった斬ざん撃げきだったが、これがなんとかわされてしまった。小隊長はひょいと後方に跳とんで着地するなり、とんでもない大音声をあげた。

「Ｇａｈｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ……！」

「──むう……！」

　トマトクンは大たい剣けんを振りまわして二、三人の蜥蜴人をぶった斬りつつあたりを見まわした。すでにピンパーネルも蜥蜴人小隊のど真ん中に突っこんで、雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を自由自在に舞わせている。ユリカは突っこみすぎず、トマトクンやピンパーネルが討うちもらした蜥蜴人がいれば迎げい撃げきしようという構えだ。マリアローズは半魚人の襟えり首くびをつかんで引っぱり起こした。

「きみがいきなり飛びだしていったりするから……！」

「せやかて、あないな別べつ嬪ぴんがやられてまうのんを指くわえて見てられるかい！」

「人間じゃないのに！」

「別嬪は別嬪や！」

「いくらなんでも見境なさすぎ！　恋こい人びとだっているみたいじゃないか！」

「ダァホ！　そんなん関係あるかボケェッ！」

　半魚人はマリアローズを突き放して変形斧をガチンと打ちあわせた。

「漢おとこっちゅうのんはなあ！　女のために身体からだを張るもんや！　漢のムキムキボデーはそのためにあんねん！　常識やでそんくらい！　よっしゃあ、いっくでええええええええええええええええええええええあああぁっ？」

　そうくるとは思ってもみなかった。

　迂う闊かつだったのかもしれないが、予想外だった。

　蜥蜴人小隊に再度突とつ撃げきを敢かん行こうしようとしたおバカな半魚人に、横合いから細身の刃やいばが襲おそいかかった。

「──どおおうッ……!?」

　半魚人は間一髪、横っ跳びしてこれをよけたが、半魚眼がビョーンと飛びだしている。マリアローズもわりと驚おどろいていた。

　まさか、美鳥人が斬りかかってくるなんて。

「ひしゅるるふるるしゅう……！」

「な、なんでやねん……！」

　半魚人は転げまわって美鳥人が繰りだす剣をよけた。

「わしはお前じぶんを……！」

「しゃああああふらああああ……！」

「お前じぶんををををぉッ……！」

「しゅらはあああああああ……！」

「助け──た、た、たしけてェッ……！」

　美鳥人の太た刀ち筋すじは生半可じゃない。半魚人はまな板の上で料理人の包丁から逃にげまわる魚みたいなものだ。このままでは遅おそかれ早かれ活いけ作りにされてしまうだろう。なんとかしてやりたいのは山々だが、残念ながらマリアローズの技量では無理だ。美鳥人は結構、マジで、かなり速い。助けるにしても、どう手を出していいものやら。

「──疾しっ……！」

　見るに見かねて、ということなのかもしれない。ユリカが美鳥人と半魚人の間に割りこんで、細身の剣を棍こんで弾はじき返した。でも、ユリカが半魚人の救助に入ったってことは、そのぶんサフィニアの護衛が手て薄うすになるってことじゃないの……？　マリアローズは慌あわててサフィニアの盾たてになれそうな位置に移動した。これでいいんだろうか。自信はないけれど、他ほかにできそうなことはない。サフィニアが水晶クリス様材タリンの杖つえで岩の床ゆかを突いた。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　杖の先から幾いく条じようもの稲いな妻ずまが放たれて、美鳥人や数人の蜥蜴人を直撃した。魔ま術じゆつの雷かみなりに打たれた蜥蜴人たちは悲鳴をあげて倒れこんだが、美鳥人はぶるっと身体を震ふるわせただけで、その隙すきにユリカが打ちこんだ棍も、かろうじて回かい避ひしてみせた。雷らい撃げきを食くらった腹のあたりが黒く焦こげているので、魔術がまったくきかないというわけではないようだけれど、体質なのか何なのか、ある程度の耐たい性せいがあるみたいだ。その事実もたしかにちょっとショックだった。ただ、石切場に次々と新手の蜥蜴人どもがなだれこんできたことのほうが重大だし、深刻だし、泣きたくなるくらい超最低ＳＵＣＫだ。ひょっとして、あれか。あの小隊長の大声。あれで仲間を呼んだんだ。そうに違ちがいない。てゆうか、どうでもいいって言えばどうでもいいんだけど、あれは？　あいつ。貴公子。美鳥人まで剣を抜ぬいて襲いかかってきたっていうのに、あいつときたら──後ろだ。だいぶ後ろにいる。しかも、新手の蜥蜴人どもに、かかれ、や

れ、みたいに指示を出しているように見える。なんてやつだ。むかつくけれど、それどころじゃない。

「トマトクン……！　数、多すぎ！　逃げないと……！」

「──ぬう！」

　トマトクンは大剣の豪ごう快かいな一撃で小隊長の剣を叩たたき折って叫さけんだ。

「退け！　フリアウのほうに……！」

　そう命じておきながら、トマトクンは後退する様子がない。全員が撤てつ退たいするまで残るつもりだろう。マリアローズはサフィニアと顔を見あわせて走りだした。ピンパーネルが背後から美鳥人に飛びかかって牽けん制せいしている間に、ユリカも退きはじめた。カタリもビャービャーわめきながらついてくる。ピンパーネルとトマトクンはきっと大だい丈じよう夫ぶだ。完全に人間のレベルを超ちよう越えつしている二人なので、まず心配ないだろう。

　マリアローズはサフィニアと手をとりあうようにしてフリアウに通じる穴を目指した。石切場を離はなれるとかなり暗いので、方向感覚だけが頼たよりだ。やっぱり暗視鏡くらい持ってくればよかった。舌打ちをしようとしたら、後ろから光が射さしてきた。振ふり返ると、カタリが小型の懐かい中ちゆう灯とうを手に持っていた。そんなものを持っているのなら、ここへくるときも使えばよかったのに。そういうとこがわからないんだよね。気まぐれっていうかテキトーっていうか支し離り滅めつ裂れつっていうか、でも、明かりがあるのは助かる。穴の場所もわかった。マリアローズは速度をゆるめてサフィニアを先に行かせた。サフィニアにつづいて穴に駆かけこみ、少し進んだところでいったん足を止めて振り向いた。ユリカがきた。カタリも。それから、ピンパーネル。トマトクンは穴の手前で立ち止まり、身体ごと大剣を二回転させた。

「──ぬううああああああああああああああああああああああああ……！」

　ものすごい音がした。

　ぶった斬ぎったというよりも粉ふん砕さいしてぶっ飛ばしてやりましたというかんじの音だった。

実際、大たい剣けんの大回転に巻きこまれて、多数の蜥蜴とかげ人じんが無残な死し骸がいと化した。思いがけぬ災難をまぬがれた蜥蜴人たちも、明らかに怯ひるんだ。

その間にトマトクンが穴に飛びこんできた。低い穴なので全力疾しつ走そうは無理だけれど、蜥蜴人にとってもそれは一いつ緒しよだろう。幅はばも狭せまいから横に二人並ぶことができないので、追いかけてきても常に一対一になる。トマトクンが蜥蜴人ごときにおくれをとるとは思えないし、あとはもうとにかく逃げればいい。逃げて、逃げて、フリアウに出て──それから先のことは、まあ、随ずい時じ考えるってことで。それでいいのかな……？　あんまりよくないような気もするけれど、黙だまって考えこんでいるよりは足を動かしたほうがいいだろう。

さいわいマリアローズは小こ柄がらなので、この窮きゆう屈くつな穴でもさして苦労せずどんどん前へ進むことができた。

後ろで天てん井じようにゴッツンゴッツン頭をぶつけているのは、トマトクンに違いない。

カタリの照明がありがたかった。おかげで行きよりも帰りのほうがずっと楽だった。

蜥蜴人が追いかけてきている気配はあった。足音だけでなく、声も聞こえたが、追いつかれることはなかった。

道が左に折れた。かまわず突つき進むと、やがて前方に光が見えてきた。

「もう少し……！」

そんな言葉が口を突いて出た。

足を速めた。出口はすぐそこだ。もう出口だ。

出た。

「──どうやって、上に……」

マリアローズは岩がん壁ぺきやそこに生えている雑多な植物に目を向けた。上だ。とにかく上に行かないと。何か。何かないのか。そんなことをやっている間に、サフィニア、ユリカ、カタリにつづ

いて穴から飛びだしてきたピンパーネルが、一いつ瞬しゅん、ほんの一瞬だけあたりを見まわして、あソコ、と短く叫んだ。どこ、とか、何、とか尋たずねる者は誰もいなかった。トマトクンも穴から出てきて、ピンパーネルが走りだし、皆みな、そのあとを追った。ピンパーネルが目をつけたのは無数の蔦つたが絡からみあってできているような一本の木だった。一本、と言っていいのかどうか。本当に蔦の集合体なのかもしれないけれど、とにかくそれは、岩壁から生えて頭上のやわらか棚シエルフ樹ツリーにしっかりと食いこんでいる。マリアローズたちは上からやわらか棚シエルフ樹ツリーに突とつ入にゅうして突破したのだから、下から突入して突破して上に出ることだって、たぶんできるだろう。まあ、あくまでたぶんだから、やってみないとわからないが、迷っている暇ひまはない。蜥蜴人だ。穴から出てきた。なっ、ちょっ、フリアウじゃないの、ここ、みたいにうろたえているみたいだ。いつまでもそうやっていてくれればいい。引き返してくれるとなお助かるのだが、そう都合よく事が運ぶわけがなかった。見つかった。こっちにくる。急がないと。

　ピンパーネルも、言われるまでもなくそんなことはわかっているようだ。蔦に手をかけて、ちょっとやそっとでは崩くずれたり切れたりしないことを確かく認にんすると、そこから先は速かった。ピンパーネルは信じられない速度でするすると蔦の木を登っていって、あっという間に、ズポッ、というかんじでやわらか棚シエルフ樹ツリーの中に吸いこまれてしまい、見えなくなった。戻もどってくる気配はない。行ける、ということだ。

　先にサフィニアとユリカを登らせて、それからマリアローズ、カタリ、トマトクンの順でやわらか棚シエルフ樹ツリーに突っこんだ。やわらか棚シエルフ樹ツリーの中は、深緑色のものがもわもわしまくっていて視界は最悪だわ、その深緑色のものが身体中にまとわりついてきて動きづらいわ、息苦しいわで、どうしようもなく不快だったが、蔦の木はちゃんと上へ上へとのびているようだし、それを伝って確実に登っている手て応ごたえはあった。とにかくほとんど何も見えないので、互たがいに名前でも呼びあって無事を確認したいところだけれど、声を出すのはためらわれた。口を開けると、深緑色のものが侵しん入にゅうしてくるに決まっているからだ。

　そんなわけで、マリアローズたちはひたすら黙もく々もくと上を目指した。

はっきり言って、苦行だった。

てゆうか、僕ってば、なんでこんなことやってるんだろ。

どうしてこんな目に遭あわないといけないわけ？

いや、そういうことを考えたら負けだ。ポジティブに。前向きに。上を向いて。そうだ。くじけるな。がんばれ、僕。この苦しみも、いつか報むくわれる日がくる。必ずやってくる。

そう信じるんだ。

信じないと、とてもじゃないけど、やってられない。

信じるっていうか、騙だまし騙しっていうかんじもなきにしもあらずだけど、いざというときは詐さ欺ぎ師しにでも何でもなってやる、くらいの気合いがないと世よ渡わたりできないっていうか、それくらい人生は厳しいものだし、それにつらいのは自分だけじゃなくて、仲間が、そう、仲間がいるんだから、同病相あい憐あわれむとか、一いち蓮れん托たく生しようっていう言葉もあることだし、ここはなんとか歯を食いしばって耐たえて、耐えて、耐え抜ぬければ、きっといいことがあるに違ちがいない。

ほら。

やった。

抜けた。

やわらか棚シエルフ樹ツリーの上だ。

ピンパーネルはすでに岩壁の上を這はうように生えている太い樹木をたどって、もう一つ上の棚シエルフ樹ツリーへ向かおうとしていた。天然の階段と言ってしまえるほどいい足場ではないものの、ピンパーネルほど身軽ではないサフィニアやユリカでも止まらずに進むことができている。マリアローズも負けじと急いだ。振ふり返ると、カタリとトマトクンの姿もあった。蜥蜴人どもはまだ追いかけてきているのだろうか。わからないが、気配はしない。たまに樹木から樹木へと飛び移ったり、細い木の上をひやひやしながら歩いたりしなければならなかったけれど、やわらか棚シエルフ樹ツリーを突き抜けるよりは精神的にも肉体的にも遥はるかに楽だった。

そうしてたどりついた棚シエルフ樹ツリーはえらく薄うすかった。この薄さではとても人間の体重を支えきれないだろう。実際、マリアローズたちはこの棚シエルフ樹ツリーを見事に突き破って、それから下のやわらか棚シエルフ樹ツリーに突入したのだ。そのときにあいた穴が今もちゃんと残っている。振り仰あおぐと、もう一つ上の棚シエルフ樹ツリーにも穴があった。とりあえずあの棚シエルフ樹ツリーまで行けば、そこから地上に戻るルートは確保されている。問題は、あの棚シエルフ樹ツリーまで行けるか、だが、どうやら大だい丈じよう夫ぶのようだ。いや、大丈夫—なのかな……？

ピンパーネルが岩壁に垂れ下がっている縄なわのような植物を見つけて、それを手がかりに切り立った断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきをよじ登ろうとしている。というか、もうだいぶ登っている。そりゃあ元アッサシンにとっては朝飯前なのかもしれないけれど、どう考えてもそんなに簡単な仕事じゃない。とくに、サフィニアはあからさまに不安そうだ。それでも他ほかに手段がなければやるしかないのだが、魔ま術じゆつ士しに、というよりも、べつに身体からだを鍛きたえているわけでもない女の子にあんなことをさせるのは、やっぱりちょっとしのびない。

「トマトクン、あれ、サフィニアにはきついと思うんだけど」

「む、そうか」

トマトクンは軽くうなずくと、有う無むを言わさずサフィニアを持ちあげて肩かたにかついでしまった。サフィニアは顔を真っ赤にして、あぅあぅ言いながら目を回している。マリアローズはユリカと目配せしあった。どちらともなく笑えみがこぼれた。なんだか一ついいことをしたような気がする。まだ安全かどうかわからないし、そんなこと言ってる場合じゃないけどさ。

縄状植物はサフィニアをかついだトマトクンが全体重をかけてもビクともしないくらい丈夫だったし、ごつごつした絶壁には足がかりがたくさんあった。おかげで、縄状植物を利用して絶壁をよじ登る作業は思ったより楽だった。

ああ、これで地上に帰れる。

フリアウはもういい。

こりごりだ。

二度ときたくない、とは言わないけど、少なくとも当分、しばらくの間は、逆密林の景色を見たくないし、青くさくて濃のう密みつな独特のにおいも嗅かぎたくないし、なまぬるくて湿しめっぽい空気を吸いたくないし、キーキーギャーギャーうるさい鳥人の声も聞きたくない。

できれば、地上に出るまで聞きたくなかったんですけど。

上の棚シエルフ樹ツリーに出た途と端たん、聞かされる羽目になった。

「……もうやだ」

ピンパーネルはすでに雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを抜いていた。ユリカも棍こんを構えている。トマトクンはサフィニアを下ろして大剣の柄つかに手をかけた。マリアローズもしょうがなく偽にせ劫ごう火かの柄を握にぎりしめてみたが、あまり力が入らない。カタリが半魚顔をゆがめて深海魚みたいに唸うなった。深海魚が唸るのかどうかなんて知らないけど、なんとなく。

「ぬむむむむむむむむむむむむ……なんでやねん……なんでこないなことに……どないなってんねや……！　この世に神はおらへんのかあああぁぁぁい……！」

正直に言って、カタリの気持ちはさっぱりわからないけれど、いいかげんにして欲しい。もう静かに帰らせて。何もしないから。お願いだから。

マリアローズたちの頭上を、雄おすジャドーの大群がキィーキィーギャーギャー鳴きながら飛びまわっている。

連中を率いているのは、何人もの雌めすジャドーだ。

雄と違い、一対ではなく二対か三対もある翼よく腕わんを駆く使しして停空ホバ飛翔リングしている雌の中には、あろうことかあの美鳥人もいた。

やっぱり前言撤てっ回かい。今回ばかりはカタリを支持したい。マリアローズたちは美鳥人を助けようとしたのだ。カタリ以外は乗り気じゃなかったことは間違いないけれど、結果的にはそういう流れになった。なりかけた。それなのに、この仕打ちはないじゃないか。ひどい。あまりにもひどすぎる。

「ふしゅるるるう」「ふしゅるるるう」「ふしゅるるるう」「ふしゅるるるう」

雌たちがーいつ斉せいに歌いだした。美声だった。それだけにいっそう不ふ吉きつな歌声は、命令だった。母であり、統とう率そつ者しやであり、霊れい的てきな指導者であり、優ゆう秀しゆうな戦士でもある雌に命じられれば、雄どもは無条件に従うしかないのだ。

雄どもは雌たちが歌いながら高々と掲かかげた剣めがけて我先に頭から突つっこんでいって、みずから串くし刺ざしになった。その重みのせいだろう。雌たちはずるずると降下していった。降下しながらも、歌うことをやめなかった。

ふるうううううるうううううふるうう。

るうううううふるううりるふうううるうう。

ふるうううううるううりるうううう。

るうううふるうう。

それは単なる歌ではない。

呪じゆ歌かだ。

ジャドーの雌は戦士でありながら巫女シビルでもある。人間が魔術を生みだしたように、ジャドーも独自の文化、信しん仰こうを通して邪じや術じゆつを編みだした。もちろん、その担にない手は巫女シビルである雌たちだ。ゲルル・デッドハント氏は著書の中でジャドーの邪術をこう名づけた。

獣ブルー化タライのズ・ブ血ラツド術スペル、と。

今、生いけ贄にえの血は捧ささげられた。

血と呪歌による儀式セレモニがもたらす恍惚状態トランスは、巫女シビルたちの奥底に眠ねむる真の力とその力にふさわしい姿を呼び覚ます。

棚シエルフ樹ツリーに着地するなり、巫女シビルたちの骨格が、筋肉が、メキメキメリメリ音を立ててふくれあがり、引っぱられた

ようにのびて、またたく間に整えられた。

　体高二・五メーテルくらいの、二対か三対の前まえ肢あしを持つ熊くまとでも言えばいいか。ただ、頭部には飾かざり羽根が生えているし、熊よりもずっとすらっとしていて、全身を覆おおう体毛は鋼はがねのように硬かたそうだが、それでいて羽う毛もうの名残なごりを残している。

　もはや彼女たちは母でも統率者でも戦士でも巫女シビルでもない。

　いや、そのどれでもありながら、同時に凶きよう暴ぼうな猛もう獣じゆうでもある。

　彼女たちは戦いと敵の血に餓うえた戦獣ブルートだ。

「ＡＧＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＳＨＵＵＵＵＵＵＵＵ……！」

　戦獣ブルートたちが雄を引き連れて襲おそいかかってくる。ああ、もうほんとにやだ。目をつぶりたい。耳をふさぎたい。幽ゆう体たい離り脱だつできればどんなにいいか。わかってる。無理。のんびり幽体離脱なんてしてられない。とてもそんな雰ふん囲い気きじゃないっていうか、状じよう況きようじゃない。そもそも、どうやったら幽体離脱できるか知らないし。トマトクンたちはやる気みたいだけど、まあ、やるしかないのかもしれないけど、勘かん弁べんして欲しい。いや、僕だってね？　百歩譲ゆずって戦獣ブルートだのジャドーだのだけなら、だけってほど少なくないけど、連中だけなら、まだなんとか、よしがんばろう、踏ふんばるしかない、みたいな気持ちになれたかもしれないよ？　だけどね？　ほら、見てよ。あそこ。あれだよ。ここから見て、斜ななめ上にある棚シエルフ樹ツリーだよ。あそこにはＤ13に通じてる穴があるんだよね。もともとその穴に逃にげこもうとしてたんだったよね。そこからだよ。きてるんですけど。ぞろぞろと。蜥蜴とかげ人じんが。いっぱい。それはもう、たくさん。あふれてきてるんですけど。どういうこと？　ねえ？　これって何？　夢？　幻まぼろし？　それとも超ちよう常じよう現象？　ありえないと思うんだけど？　こんなこと、あっていいはずがないと思うんですけど？　僕、間違ってるかな？　間違ってないよね？　泣いてもいいよね？　破れかぶれだよね？　もうどうにでもなれだよね？　そうだよね？　誰も僕を責めたりしないよね？



「にゅうおおうッ……！」

　半魚人が蜥蜴人に気づいたようだ。その間にベルトのホルダーから小こ瓶びんを抜ぬきとった。持てるだけ持つことにした。

「──な、なんで蜥蜴人まできよるん……！」

　知らないよ、そんなこと。

　知るわけないじゃないか。

　知ったことじゃないんだよ、バカ。

　バカ。バカ。バカ。何がバカなのかわからないけど、とにかくバカ。

「死にたくないなら伏ふせて」

　やけに平板な声が出た。間かん髪はつを入れず四方八方に小瓶を投げた。中身は爆ばく薬やく液えきハーレム・ゴードンだ。周囲で立てつづけにズッドーンドッカーンと爆発が起こった。そのうちのいくつかは爆心が近すぎた。熱かったり、爆風に煽あおられたり、煙けむりが目に沁しみたりもしたけれど、それがどうした。どうしたっていうんだよ、バカ。マリアローズは吃驚びつくり仰ぎよう天てんしている半魚人のお尻しりを思いっきり蹴けっ飛ばしてやった。

「──むだっ！」

「行くよ。逃げるよ。はいはいはいはい。みんなも。急いで急いで」

「おおぅ……？」

「む。よし」

　トマトクンはすぐに察してくれたようだ。よかった。即そく座ざに理解してくれなかったらぶん殴なぐってやるつもりだった。一刻を争うんだ。地上だ。地上を目指すんだ。何も考えなくていい。頭を空っぽにして逃げるんだ。とにかく逃げるんだ。マリアローズは駆かけた。跳とんだ。登った。こけそうになったサフィニアの腕うでをつかんで走った。残りの小瓶を投げた。ぜんぶ投げてやった。あちこちから集まってきて襲いかかってくる蜥蜴人だのジャドーだのを迎げい撃げきして、押しのけて、追っ払ぱらいながらの逃とう走そうだった。カタリとかカタリとかカタリとかに対する恨うらみつらみや怒いかりや憎ぞう悪おは一時的に忘れた。恐きよう怖ふはとうに麻ま痺ひしていた。代わりにだんだん可お笑かしくなってきた。だって、すごいんだもの。数が。ジャドーも蜥蜴人も。減らないし。どれだけいるんだよって話で。そんなに大勢いるなら、もっ

と建設的なことにそのマンパワーを使ったほうがいいんじゃないのって提案したいくらいで。こっちはたった六人だよ？　わずか六人の人間を追いかけまわして、バカじゃないの？　バカでしょ？　バカだね。救いがたいバカ。あげくの果てに、仲が悪いことを思いだしたのか、そこかしこでジャドーと蜥蜴人が衝しよう突とつしている。そうやって喧けん嘩かしていてくれればいいのに、やっぱりこっちに突つっかかってくるバカがいっぱいいた。所しよ詮せんあいつらは敵だ。敵なんだ。人類の敵だ。敵でも、やめて欲しい。本当にやめて欲しい。なんだかもう、飛んだり跳はねたりしているうちに笑いが止まらなくなって、そのうち涙なみだが出てきた。可笑しいからだと思っていた。違ちがうのかもしれない。そうじゃなくて、僕は悲しかったかもしれない。そりゃそうだよ。悲しいよ。なんでこんなに必死になって逃げなきゃならないんだよ。僕は悪くないのに。まったく悪くないのに。それなのに、なんで。

　全員無事で地上に戻もどることができたのは、ちょっとした奇き跡せきだ。

　地べたに座りこんで、ずいぶん長い間、放心していた。

　僕らはいったい何を手に入れて、その代わりに何を失ったのだろう。

　考えればわかりそうな気もする。

　考えたくない。

　思い知らされたくなんかない。

　失ったのは労力と時間と材料費がバカにならないハーレム・ゴードンで、手に入れたものは何一つないなんて。

　つまり、赤字だ。

　大赤字だ。

　丸損だ。

　膝ひざを抱かかえてうつむいた。子供じゃないんだから、すねたりいじけたりはしたくない。そんな姿を仲間に見られたくない。でも、落ちこむよ、そりゃあ。立ちなおれないってことはないけどさ。時間が必要だよ。解決してくれるのは、きっと時間だけだよ。

僕のことなんかもう放ほっといてよ。

「マリア・さン」

　そんなやさしい声で名前とか呼ばないでよ。

　無視できないじゃないか。

　顔を上げると、ピンパーネルが目の前にいた。片膝立ちの姿勢で、目線の高さをあわせてくれている。ピンパーネルはあまり表情豊かな人じゃない。どちらかと言えば、感情を表現するのは不得意なのだろう。それでも気づかわしげな顔つきだった。心配してくれているんだ。嬉うれしかったけれど、どうしても素す直なおになれなかった。ぶっきらぼうな声になってしまった。

「……何」

「こレ」

　ピンパーネルは自分の衣ころもの中に手を突っこんで、何かをとりだした。

　羽根だった。

　色とりどりのきれいな飾かざり羽根だ。

　ぜんぶで三本ある。

　ピンパーネルは飾り羽根をマリアローズの手に握にぎらせて、そっと微笑ほほえんだ。

「少なくテ・すみまセン」

「や──」

　そんなこと、ない。まったくない。

　やばい。じわっときた。鼻の奥がつんとして、かなりまずいかんじだった。ごまかしたくて、でも、ごまかしきれなくて、あふれてくるものがあって、どうしていいかわからなくて、思わずピンパーネルに抱だきついてしまった。すぐに離はなれて、恥はずかしくて、へへへ、と笑ってみた。ちょっぴり驚おどろいているようでは

あったけれど、ピンパーネルも笑みを返してくれた。

「まあ」

　そんなこんなでせっかく気分が上向きになりかけたのに、半魚人め。

「ちゅうても、三本ぽっちやったら、予想どおり順調に値段が上ごたところで、たいした金にはならへんねんけ──どぎぃっ！」

「なんできみはそういうこと言うかな！」

「な、何がやねん！　ちゅうか、籠こ手てで殴んなや！　痛いやろ！」

「水を差すからだろ！　こういうのはさ、気持ちなんだよ！　気持ち！　人間じゃないきみに人間の気持ちについて話してもわかんないかもしれないけど！」

「わかるわ！　わしかてな！　人間の気持ちくらいな！　半分は人間のわけやし──て、誰が半魚人じゃあああっ！　わしは正しよう真しん正しよう銘めい、れっきとした人間やああ……！」

「よく言うよ！　その顔で！　だいたい、あのとき、きみが出ていったりするからこんなことになったんじゃないか！　反省してよね！　できないと思うけど！　能力的に！」

「できるわい！　反省くらい！　反省っちゅうたらわしの得意技わざじゃダァホ！」

「じゃあ今すぐここで反省してみてよ！　まずは今回の反省点を列挙してよ！」

「そ、それはそのう、せやから……ええと……」

「ほら、やっぱり！　できないじゃないか！」

「できるわ！　できるっちゅうねん、つまりやな、何やかんやで別べつ嬪ぴんが別嬪やなくなってもうたことが、いわゆる一つの最大の痛つう恨こん事じちゅうかな──」

「はあ……」

　これ見よがしにため息をついてみせたのは、マリアローズだけではなかった。ユリカも、サフィニアもだった。トマトクンは居い眠ねむりしている。ピンパーネルはつめたい眼まな差ざしを半魚人にそそいでいた。

「な、何やねん！　わしか！　わしがぜんぶ悪いっちゅうんか！　わしだけか！　わしのみなんかい！　ほんだら、ええわ！　そうしとこ！　それでええ！　わしも漢おとこや！　この期ごに及およんで責任逃のがれはせえへん！」

「だったら弁べん償しようして」

「なんで弁償せなあかんのや！　何を弁償しろっちゅうんや！」

「いろいろ。諸経費」

「アホか！　いちいちそんなん払はらってられるかボケ！」

「あれ？　漢なんじゃないの？　漢に二言はないよね？」

「そら、ないけど──ないけどな、そらそうやけども、それとこれとは……」

「弁償！　弁償！　弁償！」

「あーやかましい！　するがな！　弁償！　いくらやねん！　ナンボや！　なっ──待て待て待てえい！　そんな高いわけあるか！　なんやて？　人件費？　手間賃？　手数料？　送料に利息に歩合やて？　何でもかんでものっけたらあかんやろが！　わしを破産させる気か！　うん、て！　否定せえや、そこは！　わしを何やと思とんのやあああぁぁっ……！」



memory of hysteric youth

きみがいた。

最後の夏だった。

暑い夏に、きみはとけてしまった。

でも、きみはいた。

あの夏に。

一人じゃなかった。

hysteric youth
ヒステリック・ユース

ラストサマー

1

「あークソ暑あちぃ……」

　容よう赦しやなく照りつけてくる太陽が、痺しびれるほどうざったい。こんな忌いま々いましい炎えん天てんにさらされて、自分にとってはどうでもいい野や郎ろうを捜さがしまわっている我が身の愚ぐ劣れつさに反へ吐どが出る――と言いたいところだが、あとからあとから噴ふき出てくるのは汗あせだけだ。故く国によりずっと北なのに、なんでこんなに暑いんだ。無む駄だに人が多いからか。

　たしかに、この街には掃はいて捨てるほど人間がいる。

　そんな街で、たった一人の男を捜しだそうなんて正気の沙さ汰たじゃない。

　最初からわかっていたことなのに、なんで俺はこんな馬ば鹿かげた真ま似ねをしてるんだ。

　俺が阿あ呆ほだからか。

「……そうに違ちがいねえな」

　アドリアンはひとりごちて赤と緑の騎ライ兵ダー服スーツのファスナーを下ろし、諸もろ肌はだを脱ぬいだ。暑いんじゃないかと思い、一角水牛革かわ製せいの騎ライ兵ダー服スーツの下には何も着てこなかったのだが、おかげでかえって身体からだが汗の中で泳いでいるような状態だった。

　そういえば、貸し宿に置いてきたリュリュが、肌着くらいは着たほうがいいとかぬかしていたっけ。

　そんなことを誰かに言われたのは、いったいどれくらいぶりだろう。

　あたりまえの人間みたいに扱あつかわれるのは。

　たぶん、ずいぶん久しぶりだ。

軍隊に入って、軍功を立てて、昇しよう進しんしまくって、いい仲の女ができて──結けつ婚こんして、子供でも作って、幸せな家庭ってやつを築く普ふ通つうの未来は、だが、今は夢にも出てこない。

「ふん……未来、か」

アドリアンは引きずって歩いていた投ジヤベ槍リンを建物の壁かべに立てかけ、尻しりポケットから引っぱりだしたクシャクシャの煙草たばこをくわえて、燐寸マツチで火をつけた。煙けむりを肺一いつ杯ぱいに吸いこむと、途と端たんにやってられねえという気分になる。あーもう酒飲んで寝ねちまいてえ。どうせ無理だ。何もかも無理。生きてくのも無駄。三十いくつにもなって、軍から放ほうりだされ、金もなく、友もいない。親はとうの昔にくたばって、小こ賢ざかしくて小こ憎にくらしかった弟は音信不通だ。馬鹿な孫にも甘かった祖母ばあさんも死に、親族といえば従妹いとこのリュリュだけ。生きてたって何になる？

恥はじをさらすだけだ。

その恥を恥と思うだけの自尊心さえない。

リュリュをわざわざエルデンくんだりまで連れてきたのだって、単なる気の迷いだ。連れてきたからには、責任をとったほうがいいとは思うが、本当に面めん倒どうくせえ。いっそこのまま行方ゆくえをくらましちまうか。だが、そこまで非情になれる度胸も、意欲も、気力もない。

「なあ、あんた──」

しょうがないから、アドリアンは通りがかりの見知らぬ人間に適当に声をかける。貸し宿に戻もどって、今日も見つからなかった、とリュリュに言い訳するためだけに。

そんなことをもう四日も繰くり返していた。

エルデン。

噂うわさどおりくそったれな街だ。

俺はそれ以下のくそったれだが。

2

「そういえば、ボーグってさ」

　マリアローズはカタリの後ろで偽にせ劫ごう火かを構えたまま、横のユリカに囁ささやいた。

「見ようによってはわりとかわいくない？」

「しょれはわたしもちょっと思ってたわ」

「でしょでしょ。いやー、もしかして僕だけかなーとか思ってて。ユリカに同意してもらえて安心しちゃった」

　アンダーグラウンドＤ７地中砦とりでアヴァシーにいる亜人ボーグは、薄うすい灰色のつるんとした肌をしていて、体毛は一いつ切さいない。鼻は小さな穴が二つあいているだけで、離はなれ気味の黒豆みたいな目にどこか愛あい嬌きようがある。左右に裂さけた口も、大きく開くと牙きばが並んでいたりして怖こわいのだが、閉じているとそうでもない。

　とはいえ、ボーグはなかなかに知能程度の高い異界フリー生物クスだ。彼らが武具、建物、通路の材料として広く用いている灰色のセルマイトという物質は、非常に強固でもある。少なくとも人間に聞こえるような声は出さないので、何を考えているのかさっぱりわからないし、異種族に対してはすこぶる好戦的だし、見た目ほどかわいい連中じゃないことだけは間ま違ちがいない。

「──って」

　カタリが激しく斬きり結んでいたボーグの懐ふところに飛びこんで、右手のイノイチを首筋に叩たたきこみ、左手のロノニーで脳天をかち割った。

「な・に・を・ごちゃごちゃくっちゃべっとるんじゃワレェ！　マリアローズ！　何のためにアヴァシーくんだりまできたと思とるん！」

「くんだりってほど遠くないでしょ」

「物理的な距きょ離りの問題やない、心の距離の問題や！　何が心の距離やわけわからんわ！」

「わけわかんないのはこっちだって」

「せやろな。いや、正直すまんかった。今のはその、勢いっちゅうやつや。こう、勢いでつい、意味不明なことをぽろっとな」

「ま、魚脳だしね」

「誰が魚やねん！」

　ビシッ、とマリアローズに左手の人差し指を突つきつけられたカタリは、魚じゃなく猿さるみたいな奇き声せいをあげて跳とびあがった。

「ウッキィィィッ！　わしは魚やないっちゅうねん！　どこが魚やァァァァッ！」

「全体的に──と、あ、またきたよ！」

「を？」

　地中砦アヴァシー上層はほとんどセルマイト製なので、灰色一色だ。一応、ボーグたちの居住地らしいのだが、画一的な通路が縦じゅう横おう無む尽じんに入り組んでいるだけに見える。ただ、白色灯が規則正しく配置された天てん井じようや壁、床ゆかには幾き何か学がく的紋もん様ようがびっしり刻まれていて、それらはボーグたちにとって何らかの意味があるらしいとか、じつは言語なんじゃないかとか、何とか。諸説あるようだが、とにかくそんな通路の曲がり角から別のボーグが飛びだしてきた。

　しかも、三匹びきだ。

　一匹は鎖くさり帷子かたびらを着て槍やりを持ち、もう一匹はやはり鎖帷子に剣けんと盾たて、最後の一匹は鎧よろい兜かぶとで身をかためて大きな戦せん槌ついをかついでいる。当然、装備はどれもこれもセルマイト製だ。

「──もひょっ！　ナンボ何でもわし一人で三匹は」

「しょうがないなあ」

「しょうがないことあるかボケェッ！　そもそも今日はお前じぶんを鍛きたえたろ思て三人でやな」

「カタリ、よしょ見してないで！　くるわ！」

「そうだよ半魚人！　ちゃんと前見て、前！　……あ。目が横についてるだけか」

「むっきー！」

　叫さけぶなりカタリが剣盾持ちに挑いどみかかり、マリアローズは槍持ちに、ユリカは戦槌持ちに急接近した。小さなユリカが一番重装備の相手を受け持つなんてひどいような気もするけれど、各人の特性を考えればこれが最善だ。ＺＯＯに入ってから、まだそれほど時間はたっていないが、マリアローズもそれくらいのことはわかるようになってきている。そして、自分が果たすべき役割をきちんと果たしてさえいれば、じつに頼たのもしい仲間たちだということも。

「ふっ……！」

　マリアローズは思いきり左斜ななめ前に踏ふみこんで、ボーグが突きだしてきた槍をよけた。冷や汗あせが出た。槍が外がい套とうをかすめた。予想よりギリギリだった。ボーグは甘い敵じゃない。ただ、セルマイトは加工しやすくて鉄より硬かたいが、かなり重い。一方、マリアローズはすばしっこさだけが取り柄えだ。装備も軽くしている。身軽さはこちらが上だし、一人で侵クラ入ツ者カーをやっていたころと違い、意識的に慎しん重ちようと大だい胆たんを使い分けられるようになってきた。そのおかげで命拾いしただけでなく、わずかな差で勝負を決めることができた。

　マリアローズは偽劫火をボーグの脇わき腹ばらにぶちこんで柄つかから手を放し、左籠こ手てをやつの横よこ面つらに押しつけた。あいたばかりの右手で左籠手のスイッチを押すと、小さな作動音とともに放たれた矢がボーグの頬ほおに突き刺さった。もちろん、ボーグも黙だまってはいない。グアァァと歯を剝むいて、かわいいおめめを見開き、槍を振ふりまわしてマリアローズを突き放そうとしたが、そんなことをしたってもう遅おそい。マリアローズは転がるようにしてボーグから距離をとり、素す早ばやくカタリとユリカ

の戦せん況きようを確かく認にんした。カタリは同型の変形斧おのイノイチとロノニーを駆く使しして壁かべ際ぎわまで剣盾持ちを追いつめ、ユリカは極クライ限マックス九ナイ手ンポ棍ールの多段突きで戦槌持ちに息をつく間も与あたえていない。ボーグたちとマリアローズたちの間で、三つの一対一ができている形だ。

「──と……！」

　状況を確かめている間に、脇腹に偽劫火が刺さったままのボーグが猛もう然ぜんと突っこんできた。マリアローズは余よ裕ゆうでよけた。と言いたいところだが、危なかった。ボーグが振りまわした槍を、間かん一いつ髪ぱつ、なんとか尻しり餅もちをついてかわし、横に転がりながらとっさに足あし払ばらいをしかけると、これがまんまと決まった。ボーグはバランスを崩くずしてつんのめりかけた。その隙すきに、マリアローズは逃にげた。あとは時間を稼かせげばいい。それも、そんなに長い時間はいらない。五秒か六秒。たってしまえばすぐだった。

　体勢を立てなおそうとしたボーグの膝ひざからカクンと力が抜ぬけ、身体からだの各所がぷるぷるぷるぷる震ふるえだした。ボーグがそれでもどうにか立っていられたのは一秒かそこらだった。籠手の矢に仕込んであった神経毒Ｐ９ドウター＋が効きはじめたのだ。

　ボーグは見る間に全身痙けい攣れんに見み舞まわれ、その場に倒たおれた。マリアローズはボーグの脇腹から偽にせ劫ごう火かを回収し、噴ふきだす赤黒い血液から目を背そむけてあたりを見まわした。

「ふいぃ……」

　カタリは額の汗をぬぐう仕し草ぐさをしながら、しとめたボーグを見下ろしていた。

「しまいみたいやな」

「ええ」

　ユリカもしっかり一仕事終えていた。

「二人とも怪け我がはないわね？」

「うん、大だい丈じよう夫ぶ」

「右に同じや！　楽勝楽勝！　ガハハハハハハ！」

　馬ば鹿か笑わらいしたカタリの頬に深めの切り傷があることを、ユリカは見み逃のがさなかったようだ。おそらく、ボーグの剣がかすめるか何かしたのだろう。ユリカはつかつかとカタリに歩みよって背せ伸のびをした。

「傷きじゆ。ほっぺ。怪我してるじゃない」

「あ、お？　やあ、でもな、こんくらい怪我のうちには入らへんし……」

「ダメ。たとえかしゅり傷きじゆでも、放ほうっておいていいことなんてひとちゅもないのよ」

「……へい」

「しゃ、わかったら座しゆわって。……届かないから」

　おとなしく正座したカタリがユリカに医術式で治ち療りようしてもらっている間に、マリアローズはボーグの所持品を物色した。セルマイト製の武具は結構高く売れるのだが、重いし、かさばる。どれくらい持ち帰ることができるだろうか。損傷や汚よごれがひどい物は安く買い叩たたかれるのがオチだし、できるだけ小さくて、軽量で、それなりにいい値段がつきそうなものを──、

「ん……？」

　足音がする。

　近い。

　さっき三匹のボーグたちが出てきた角とは違う方向だ。

　まさか、またボーグが？

　マリアローズはカタリやユリカと一いつ瞬しゆん顔を見あわせて身構えたが、「……あー」という声が聞こえてきて、少し気がゆるみそうになった。

「だりぃ……」

男の声だろうか。どうやら人間のようだ。足音は、でも、一つじゃない。マリアローズは気を引き締しめなおした。ボーグではなく、人間だからといって危険がないとはかぎらない。あんなだらけたやる気のなさそうな声も、マリアローズたちを油断させるための手管かもしれないのだ。アンダーグラウンドの異界フリー生物クスではなく侵クラ入ツ者カーをターゲットにする略奪者ルーターにも、じつにさまざまな手口がある。日々新たな手法が生みだされては廃すたれて、とにかくめまぐるしく変化しているので、何をしてくるかわかったものではない。

マリアローズは治療が終わったカタリを前に押しだして、偽劫火を握にぎる手に力をこめた。

角の向こうから一人の男が出てきて、こちらを見て頭をボリボリ掻かきながら首をかしげてみせても、警けい戒かいはとかなかった。というか、油断しちゃダメだ、と自分に言い聞かせないと、思わず気を抜いてしまいそうなくらい、ゆるんだかんじの男だった。

男の金きん髪ぱつは寝ね起おきみたいにボサボサだ。顔の下半分が無ぶ精しよう髭ひげだらけで、濁にごった目の下には隈くまができている。寝不足なのか。べつに火気厳禁というわけじゃないけれど、くわえ煙草たばこでアンダーグラウンドを歩いている侵クラ入ツ者カーなんてめったにお目にかかれない。そもそも侵クラ入ツ者カーなのだろうか。眠ねむ気け覚ざましに散歩でもしているんじゃないのか。でも、そんないかにもだらしなさそうな男が、どうして赤と緑の騎ライ兵ダー服スーツなんか。

国章や部隊章はついていないが、あれはラフレシア第三帝てい国こく軍ぐんの制式装備だ。男が杖つえみたいについて歩いている肩かたくらいまでの長さの槍やりも、ラフレシアの猟りよう騎き兵へいが持つ投ジヤベ槍リンだろう。あの国の猟騎兵といえば、遠えん距きよ離りでは馬上から弓を射かけ、短距離では投ジヤベ槍リンの一いち撃げきから騎兵剣サーベルによる突とつ撃げきを果か敢かんに行う剽ひよう悍かんな兵士として有名だ。このだるそうな男が……？

「あー……」

男は戸と惑まどったように煙草を一吸いして煙けむりを吐はきだすと、しゃがんで投ジヤベ槍リンを横向きに置いた。それから上うわ目め遣づかいで愛あい想そ笑いらしきものを浮うかべてみせた

が、これがまったくさまになっていない。見た目からして、たぶん三十は超こえていると思う。それなのに、まるでひねくれた子供がやりたくもないご機き嫌げんとりを無理やりやらされているような表情だ。

「──ちょっと、その……俺もまだこの街の流りゅう儀ぎはよく知らねえんだが。あんたらとやりあう気はねえんだ。マジで。このとおり。だから怖こわい顔すんなよ。な？」

　マリアローズはユリカをうかがった。ユリカも迷っているらしく、唇くちびるをきゅっと引き結んで小首をかしげている。カタリもうーうー唸うなりながら悩なやんでいるようだ。トマトクンがいれば、園長マスターとしてぱっぱと判断してもらうところなのだが、今日はあいにく三人だけできた。このメンツだと、こういうとき、決断を下すのはマリアローズの役目になるのだろうか。新入りだし、どう考えても一番下っ端ぱなのに。カタリなんて、先せん輩ぱい風かぜを吹ふかせて「今日はなあ、このわしがお前じぶんのことみっちりミチミチ鍛きたえたるからのう！　覚かく悟ごしい！」みたいなかんじだったくせに。なんだかちょっぴり理り不ふ尽じんだ。

「そっちにやりあう気がないんだったら、知りあいでもないんだから、挨あい拶さつとかもいらないし。わざわざそんな真ま似ねなんかしないで、さっさとどっか行っちゃえばいいだろ。その代わり、妙みような動きを見せたら僕らも容よう赦しやしないからね」

「心配しなくても、妙なことなんかしねえよ。あー……ただ、そうだな、一応、一つ訊ききたいことがあるんだ」

「訊きたいこと……？」

　アンダーグラウンドで出くわした人間に質問されるなんて、初めての経験だ。

　しかも、その質問の内容がまた奇き妙みようといえば奇妙だった。

「ああ。クリスチャンって男を知らねえか」

「えっと……」

　クリスチャン。ラフレシア風の名前だ。とくに珍めずらしくはな

い。むしろありふれていると言ってもいいくらいだ。どこかにそんな名の誰かがいたような気もするけれど、心当たりというほどのものはない。カタリとユリカも同じみたいだ。

「──てゆうか、それだけじゃちょっと……せめて出身地とかさ。特とく徴ちようとか」

「いや、知らねえならいい。まあ、広い街だしな。人も腐くさるほどいるし。どうせそう簡単に見つかりゃしねえだろ」

「だけど、よりにもよってアンダーグラウンドで人捜さがしなんて」

　男はそれには答えず、不器用そうに肩をすくめてみせただけだった。

　それから短くなった煙草を捨てて踏ふみ消し、新しい煙草をくわえて火をつけ、投ジヤベ槍リンを拾ったところまでの動作はかなりだるそうだった。顔色も悪いし、ひょっとして病気でもしているんじゃないかという印象すら受けた。

　ところが、不意に男がやってきた角の向こうからか細い悲鳴が聞こえてくると、そんな雰ふん囲い気きは一いつ瞬しゆんで吹き飛んだ。

　男の目つきが鷹たかのように鋭するどくなって、一・八メーテルはありそうなその体たい軀くがしなった。駆かけだした男の背中は、すぐに角を曲がって消えた。

　ちょっと、いや、結構びっくりしたけれど、それはそれとして、なんでまたカタリの阿あ呆ほうは男のあとを追ったりするのか。

「ちょっと、カタリ……！」

　バカ。おたんこなす。半魚人。たしかにただならぬ事態が起こってるっぽい。でも、僕らにはぜんぜん関係ないじゃないか。とはいえ、魚野や郎ろう一人を行かせるわけにもゆかない。やむをえずマリアローズとユリカも角の向こうに飛びこんだ。その直後だった。

　ため息が出るほど素す晴ばらしくきれいな無む駄だのないフォームで、男が投ジヤベ槍リンを投とう擲てきした。

　投ジヤベ槍リンは一直線に飛んでいって、床ゆかに倒たおれている少女━彼女の恰かつ好こうがあまりにもアンダーグラウンドにそぐわなくて「は？」というかんじだったのだが、それはひとまず置いておいて、その少女に襲おそいかかろうとしていたボーグの胸のど真ん中に吸いこまれた。ボーグはその衝しよう撃げきで後方に吹っ飛ばされた。

「ＲｕｕｕｕｕｕｕｕＳｈｈｈｈｈ……！」

　さらに男は高らかに雄お叫たけびをあげて騎兵剣サーベルを抜ぬき、みずから投じた投ジヤベ槍リンの軌き跡せきをなぞるように疾しつ駆くした。ボーグは一匹ぴきではなかったのだ。もう一匹いた。そいつは投ジヤベ槍リンで一いつ蹴しゆうされた仲間のボーグを跳とび越こえて男に向かってきた。鎖くさり帷子かたびらを着た槍やり持もちだ。男はまったく怯ひるむ様子もなく真正面から突つっこんでいった。ボーグの槍で串くし刺ざしになりたいのか。そう疑いたくなるような、正直すぎるとさえ思える突撃だった。危ない。思わず目を閉じかけた。杞き憂ゆうだった。

　男は騎兵剣サーベルでボーグの槍をぶっ叩たたいてひねり落とすと、力強く踏みこみながら一回転して、唸りをあげる豪ごう快かいな横よこ薙なぎの一撃で素っ首を刎はね飛ばした。

　ボーグの首が床に落ちて転がった。

「……ふー」

　男は騎兵剣サーベルを乱暴に血ち振ぶるいしつつ、左手で腰こしをさすった。

「━やーべぇ。体のなまり方がただごとじゃねえ。あんまり動いたら腰が抜けちまうな、こりゃあ……」

「つ、強いやん？」

　カタリが男を指さしてマリアローズを振り返った。呆ぼう然ぜんとして目を見開いているカタリの顔は、いつにもまして魚に似ていた。そんなことよりも、あのＲＵＳＨという雄叫び。あれはたしかラフレシア第三帝てい国こく軍の吶ウオー喊クライだ。やっぱり正規兵か。もしくは、元正規兵か。

「おい、大だい丈じよう夫ぶか、リュリュ」

　男が少女を助け起こした。リュリュ、というのが少女の名前らしい。どういう関係なのか知らないけれど、少女は男の同行者なのだろう。

「……う、うん……平気。ごめんなさい」

　少女は蚊かの鳴くような声で答えた。言葉とは裏腹に、ぜんぜん平気そうじゃない。というか、それ以前の問題として、少女の身なりは何だ。白っぽい薄うす手でのワンピースにサンダルをつっかけただけの女の子なんて、アンダーグラウンドどころかエルデン市街でもそうそう見かけない。体格からして、十三歳か十四歳くらいだろうか。波打っている長いブルネットの髪かみに半分くらい隠かくされていて、顔立ちはよくわからないが、その肌はだが透すきとおるように白いことは、薄い肩かたや細い腕うでを見ればわかる。

　男も不健康そうだけれど、リュリュはその比ではなかった。

　病的。

　思い浮うかんだその言葉を裏打ちするように、リュリュの両足や右腕、首には包帯が巻かれている。まあ、先に包帯が目に入って、そんな言葉が脳のう裏りをよぎったのかもしれないが。

　いずれにせよ、アンダーグラウンドには似つかわしくない。

　服装だけでなく、その存在自体が。

「歩けんのかよ」

　男にそう言われながら、壁かべに手をついてなんとかふらふら歩こうとしている姿も、場所柄がらを考えればもはや滑こつ稽けいですらある。

「……うん」

　リュリュは二、三歩進んで男を振り返り、今にも消えてなくなってしまいそうな笑えみを浮かべてみせた。

「ほら……ちゃんと一人で歩けるよ。わたしは大丈夫だから、行こ」

　や、歩けてないから。

　男も男だ。しばらくリュリュをつまらなそうに眺ながめていたかと思ったら、やおらボーグから投ジヤベ槍リンを引き抜いて、あとはもうリュリュには目もくれずに、まさか先へ進むつもりなのか。リュリュは必死でついてゆこうとしているけれど、無茶だ。ほら。言わんこっちゃない。よろめいて、足がもつれて、転んじゃう。その寸前だった。

「──っとぉぉぅ……！」

　カタリがズサーッと飛びこんでいって、うまい具合にリュリュの下した敷じきになった。ナイス。半魚人にしては上出来だ。

「あ、あっ、危なーっ！」

　半魚人はリュリュごと起きあがった。

「あ、あのなあ、あかんで、お前じぶん！　なんや事情があるのかもわからん、ちゅうかきっとあるんやろうけど、ここはお前じぶんみたいなかわいらしい女の子がくるような場所やないんや。せやからな、ここは一つ、どや、わしとちょっと茶ぁでもしばいて──」

「じゃ、ないだろ、馬ば鹿か魚！」

　マリアローズはすかさず籠こ手ての硬かたいところでカタリの後頭部をはたいた。

「何ナンパしてるんだよ、相手は子供だよ？　そこまで見境ないわけ？」

「……お、おおうっ。わしとしたことが、つい！」

「あ、あの……」

　リュリュがカタリの腕の中で身をよじった。

「は、放して……くれませんか。それに、わたし……子供なんかじゃ、ないです……十六歳だから……」

「くわっ！　じゅ、十六！　ギリギリストラァァーイクッ……！」

「きみのストライクゾーンなんてどうでもいいから、早く放してあげなって」



「あ━お、おう……」

　カタリが手を放すと、リュリュはまた壁に手をついて歩こうとした。男は一応、立ち止まってリュリュを待ってはいるものの、煙草たばこを吸いながら振り向きもしない。苛いらついているようにさえ見える。リュリュはそんな男のもとへどうにかたどりつこうと懸

けん命めいに手足を動かしていたが、とうとう顔をしかめてしゃがみこんでしまった。

「ユリカ！」

　マリアローズに呼ばれるまでもなく、ユリカがリュリュに駆かけよった。男も引き返してきたけれど、いかにもしぶしぶといったかんじだ。いったい何なんだよ、こいつ。

「リュリュ。やっぱ歩けねえんだろ。だったら今日はもう帰るぞ。お前を背負ってあちこち歩きまわるなんて冗じよう談だんじゃねえ」

「……ま、まだ、歩けるよ、わたし――」

「ちょっとじっとしてて」

　ユリカはリュリュが痛がっている右足の包帯を手早くほどいた。その下には湿しつ布ぷが貼はられていた。それも剝はがすと、素人しろうとのマリアローズが見ても重度の炎えん症しようを起こしているとわかるようなひどい状態だった。しかも、右足全体だ。ユリカはさっそく医術式を施ほどこそうとした。

「あんた、そのナリで本物の医術士なのかよ」

　男は鼻先で笑った。

「でも、やめとけ。こいつは病気なんだ。医術式じゃあ治せねえらしいぜ」

「医い術じゆちゆ式しきで治しぇない、でしゅって……？」

「ああ。くわしいことは知らねえけどな。何つったっけ。リュリュ、お前の病気の名前」

「……レーベンス病です」

　リュリュがひっそりと明かした瞬しゆん間かん、ユリカの小さな身体からだがこわばった。

「まあ、そういうわけだ」

　男はもう一度せせら笑い、ユリカを押しのけてリュリュを軽々とかつぎあげた。さすがにもう自力で歩かせるつもりはないようだが、まるで荷物みたいな扱あつかいだ。

「邪じや魔ましたたな」

「ほんとに邪魔されたよ」

　マリアローズが少し意地の悪い口調で言い返してやっても、男は片方の頰ほおをゆがめてみせただけだった。

　こうして男はリュリュを連れて、というか持って去ってゆき、あとでトマトクンやサフィニアやピンパーネルに「そういえば今日、変な二人組に会ってさー」みたいに話して聞かせるネタになって終わるはずだったのに。

「ちょい待ちいや、お前じぶん」

　半魚人が男の行く手をふさいだりしなければ、それっきりだったはずだ。

　男は投ジヤベ槍リンの石いし突づきで床ゆかをガンと突ついて足を止めた。表情も声こわ音ねも、これ以上ないくらい面めん倒どうくさそうだった。

「何だ」

「今、ぴーんときたで。わしの灰色の脳みそに、こう、ピキーンとな。お前じぶん、さっき、クリスチャンっちゅう男を捜さがしとるってゆうとったやろ」

「それがどうした」

「ズバリッ！　その男を捜しとるんはお前じぶんやない！　リュリュちゃんや……ッ！」

「だったら何だ」

「反応うっすいなあ、お前じぶん。つまらんのう」

「悪かったな」

「悪いがな。極ごく悪あくやで。まあええわ。ともかく、クリスチャンくんを捜しとるリュリュちゃんは病気なんやろ。こうきたらもう、漢おとこのやることっちゅうたら一つしかないねやんか」

「何をやるってんだ」

　男は投ジヤベ槍リンを持ったままの右手の人差し指でこめかみのあたりを掻かいて、唇くちびるの端はしに引っかけた煙草をギリリと噛かんだ。カタリの目もく論ろ見みがわからないらしい。まあ、普ふ通つうはわからないだろう。わかりたくもないのだが、どういうわけか悲しいことに、マリアローズには見当がついていた。案の定だった。カタリは自分よりも背の高い男に対たい抗こうするように少し爪つま先さき立だち気味になって胸を張り、右手の親指で自分を示してみせた。

「手伝ったるわ。その人捜し。ゆうとくけどな。お前じぶんに拒きょ否ひする権利はないで。決めるのんはリュリュちゃんや。わしはリュリュちゃんの人捜しを手伝うつもりなんやからなっ」

3

　なんだかおかしなことになった。

　もちろん、ほとんどカタリのせいなのだが、リュリュという少女に対してはユリカも同情的だったし、マリアローズ一人だけ無関心を決めこむのは気まずかった。カタリの申し出を聞いたリュリュの反応も印象的だった。その瞬間、病気がどこかへ吹ふっ飛んでしまったかのように、リュリュの表情がぱっと明るくなったのだ。もっとも、リュリュという名の花が咲さいたのはほんの一瞬だけで、すぐに萎しおれてうなだれてしまった。

「──でも……初対面の人にそんなこと……親切にしてもらっても、お返しとか、何もできないから……」

　そんな態度をとられると、あっそ、じゃ仕方ないね、バイバイ、とはさすがに言いづらかった。それに、あのあとアドリアンと名乗った男のとんでもなく嫌いやそうな顔つきや、疑い深い眼まな差ざしや、言こと葉ば遣づかいや、いろいろなもの、あの男のすべて

がむかついた。

「あんたら何企たくらんでんだ？　俺もこいつも貧びん乏ぼうだし、こいつは若いが使い物にならねえから買い手もつかねえぞ、きっと」

　アドリアンはそんなことまで言ってのけたのだ。あまりといえばあまりな言い方じゃないか。聞いていたリュリュもきっと傷ついたはずだ。傷つかないはずがない。

　なんてやつだ。

　そう思ってしまったのが運のつきで、いつの間にかマリアローズもカタリに荷か担たんして、アドリアンをチクチク言葉責めしていた。そんなことをしているうちに、話の流れでリュリュの気の毒な身の上を聞く羽目になってしまった。

　なんでもリュリュは、ラフレシア第三帝てい国こくのボンヌ・ソレーという町の出身で、今から三年前に突とつ然ぜん、体調不良を訴うつたえ、何人もの医術士に診みてもらった末に、レーベンス病との診しん断だんを受けたのだという。

　レーベンス病については、ユリカがくわしかった。原因は不明だが、細さい胞ぼうの中にある重要な構成物の活動が低下して抵てい抗こう力りよくが弱まり、倦けん怠たい感、発熱、関節の疼とう痛つう、全身の炎症等の症しよう状じようからやがては死に至る。治ち療りよう法ほうがなく、医術式でも手の施しようがない不治の病らしい。

　そんな病気に襲おそわれたリュリュは、祖母に身の回りの世話をしてもらいながら、半分くらい寝ねたきりの生活を三年近くつづけていた。彼女はごく幼いころに流行はやり病やまいで両親を亡なくして以来、祖母に育てられたのだ。

　ところが、五巡じゆん月げつくらい前に祖母が脳卒中で倒たおれて、そのまま死んでしまった。それからは隣りん家かのおばさんに手助けしてもらって暮らしていたとのことだが、それはそれでつらかったに違ちがいない。何しろ、いつ果てるとも知れない命だ。祖母が多少の金を残してくれたとはいえ、他人の厄やつ介かいになりっぱなしで気は遣うし、体調も悪いし、先々に希望を抱いだけるはずもなく、むなしい空想くらいしか楽しみもない。

　そこにアドリアンが現れた。

　アドリアンの母親はリュリュの父親の姉だという。ようするに二人はいとこ同士ということになるのだが、なんとアドリアンは金を無心するために祖母の家を訪おとずれたらしい。祖母はもう亡くなっていたので、もちろん無む駄だ足あしだった。許せないのはその先だ。祖母の訃ふ報ほうに接したアドリアンは、悲しむでもお悔くやみを言うでもなく、リュリュの前で舌打ちしてみせた。

「まいったな。もう金をせびれる相手が誰もいねえ」

　三み十そ路じを越こえた男が、だ。

　最低だ。

　久しぶりにいとこのおにいちゃんと再会したリュリュも、これにはそうとう面めん食くらったようだ。それはそうだろう。もしマリアローズがリュリュだったら、絶対にアドリアンをどつきまわしていたはずだ。

　リュリュはそうしなかった。ふらつく身体からだで必死にお茶を淹いれたり、思い出話をしたりして、ろくでなしのおにいちゃんをもてなそうとした。洗いざらい聞いたわけではないから、マリアローズの想像も入っているけれど、きっと罰ばち当あたりなアドリアンは、不ふ機き嫌げんそうな顔をしてまずそうに茶をすすり、リュリュの話にもまともにつきあわなかったに違いない。そんなやつを相手に、痛みをこらえてあれこれ世話を焼いたり、何だかんだと話しかけるリュリュの姿を思い浮うかべると、胸が苦しくなる。わけあって軍を辞やめたというアドリアンに、泊とまっていくのか、何ならいつまでもいてもいい、みたいなこともリュリュは言ったらしい。

「いや、いい」

　アドリアンの返事はそっけなかった。不治の病に冒おかされている哀あわれな女の子が目の前にいるのに、しかも赤の他人じゃない、病びよう魔まにとりつかれているのは従妹いとこなのに、やつの頭の中は自分のことで一いつ杯ぱいだったのだ。

「こんなとこにいたって埒らちが明かねえ。俺にあう仕事もなさそうだしな」

「……そう……だね」

「どんな仕事だったらあうんだって話だけどな」

「おにいちゃんは……どんなお仕事がいいの？　やっぱり、兵隊さん……？」

「冗じよう談だんじゃねえ。もう誰かに命令されるのはごめんだ」

「……そっか……」

　リュリュはほんの少し期待していたのかもしれない。アドリアンがいてくれれば、少なくともひとりぼっちの寂さびしさは慰なぐさめられる。できればずっと一いつ緒しよにいて欲しい。残された時間を一人きりですごしたくはない。もしかしたら、リュリュを心配しながら亡くなった祖母が、アドリアンを呼びよせてくれたのではないか。

　生きられなくなるまで、生きる。リュリュにはそれしかなかったのだ。本当は、少し前からある計画を胸の中であたためていたのだけれど、どうせ絶対に実現できないと思っていた。その計画を抱いたまま自分は死ぬんだと覚かく悟ごしていた。せめて死ぬときには誰かにそばにいて欲しいと願っていたとしても、誰がリュリュを責められるだろう。

「仕方ねえな。エルデンにでも行くしかねえか……」

　その一言を聞いた瞬しゆん間かん、最後の望みという名の蠟ろう燭そくに火がついてしまい、いても立ってもいられなくなったリュリュの気持ちもわかる。わかる、なんて簡単に言ってしまっていいのかどうか。とにかく、理解はできる。

「あの……」

「何だ」

「おばあちゃんが残してくれたお金、ぜんぶおにいちゃんにあげるから……」

「マジで言ってんのか、それ」

「うん……でも、その代わり……わたしをエルデンに連れて行って

欲しいの」

「はあ？」

「……ダメ？」

「だってお前、そのうち病気でくたばっちまうんだろ。ろくに歩けもしねえそんなざまで、エルデンに行きたい？　無理だ無理。やめとけよ。金は欲しいが、途と中ちゆうで死なれでもしたら面めん倒どうくせぇしな」

　ひどい言い種ぐさだ。よくもそんなことが言えるものだ。人間性に問題があるとしか思えない。事情は知らないけれど、軍を辞めたというのも、おそらく何かしでかして馘くびになったのだろう。そうに違いない。それでも結局、こうしてエルデンまで連れてきてくれたアドリアンは、決して悪い人じゃないとリュリュは言う。

「小さいころは、よく遊んでもらって……ぶっきらぼうなんですけど、頼たのむと何でも聞いてくれて。ずっと会っていない間に、軍隊で出世して、女の人に騙だまされて……それで、ずいぶん荒あれたって話は聞いてたんです。でも、あんまり変わってないかな……あ、見た目は変わったかも。今はあんなですけど、若いころは、すごくかっこよかったから……」

　マリアローズは今、リュリュとアドリアンが借りている貸し宿の一室にいる。安物の寝しん台だいの上で横になっているリュリュは、少し熱があるようだ。さっきまでユリカが炎えん症しようの治ち療りようをしていたのだが、あまり効果がなかったみたいで、カタリと一緒に何か足しになりそうな薬を探しにいった。アドリアンは貸し宿の一階にある食堂兼けん酒場で酒でも飲んでいるのだろう。その酒代は、当然、リュリュの祖母の遺産だ。

　決して悪い人じゃない、か。

　そうは思えないけど。どうでもいいと言えば、どうでもいいことなんだけどね。

「ま、でも、一応、クリスチャンって人のことは、一緒に捜さがしてくれてるんだもんね」

「はい」

リュリュはそっと微笑ほほえんだ。向こう側が透すけて見えそうな笑顔だった。

「……ほんとは、一緒どころじゃなくて。最初は、おにいちゃんが一人で捜してくれてたんです。わたしは、邪じや魔まだから……宿で寝ねてろって。けど、三日前に……一人でずっと寝てても暇ひまだろって……」

「でも、アンダーグラウンドは危ないよ」

「わたしが……言いだしたんです。エルデンで侵クラ入ツ者カーをやってるって、彼が手紙をくれたから。そこに行けば……彼に会えるかもしれないって思ったわけじゃないけど……どういうところか、知りたくて」

「歩くの、つらいんじゃないの？」

「大だい丈じよう夫ぶです。歩けるうちに、少しでも自分の足で歩きたいから。おばあちゃんがいたころは、わがまま言えなかったけど……もう、いいかなって。時間が、あんまりないし」

さらっとそんなことを言われてしまうと、返事に困る。でも、リュリュにしてみれば、直面している現実を率そつ直ちよくに言葉で表しただけなのだろう。自分がそのうち死んでしまうことはマリアローズもわかっているけれど、あくまでそのうちだ。当然、リュリュとは感覚が違ちがう。

「ごめんなさい」

リュリュはその違いを理解している聡そう明めいな少女だった。

「ちょっと重いですよね、わたしの話。だけど……ほんとにわたし、すごく楽しいんです。だって、今までは痛くてつらいだけだった。それ以外は、何もなくて……我が慢まんしてても、なんで我慢しなきゃいけないんだろって。おばあちゃんがいたときは、すごく大事にしてくれる、やさしいおばあちゃんのためって思えた。おばあちゃん、言ってくれたんです。お前が生きていてくれるだけで嬉うれしいって。でも、そのおばあちゃんが死んじゃって……なんにもなくなって。今は、でも、違うから。旅をして、知らない街にきて、知らない空気を吸って……初はつ恋こいの人を捜してるなんて、すてきだと思いませんか？」

「……そうだね」

　もうちょっと病身をいたわったほうがいいのではないかとも思うけれど、どのみち痛くて苦しいなら、黙だまって寝ているよりも何かしたい。その気持ちはわからなくもない。しかも、リュリュが自分で言ったようにあまり時間がないのなら、なおさらだろう。

「初恋っていっても、会ってどうしようとか、ぜんぜんないんですけど……」

　リュリュは目を閉じて胸の上で手を組みあわせた。

「ただ、もう一度だけ会いたいなぁ……って。でも、会わないほうがいいのかも。クリスにしてみたら、そのうちいなくなっちゃう女の子に会っても、いい思い出とかにはならないですよね、やっぱり……」

「そんなこと──」

　ないよ、と無責任なことを言いかけて、のみこんだ。

　しばらくすると、リュリュは寝息を立てはじめた。寝顔は少し苦しそうだった。手や首に巻かれた包帯が目を背そむけたくなるくらい痛々しい。額に汗あせがにじんでいた。熱が高くなってきたせいだろうが、顔は赤らむどころか青ざめていた。

4

「無理させよったせいやで」

　案の定、アドリアンは貸し宿の一階にある食堂兼酒場のカウンター席の隅すみっこで飲んだくれていた。見たところ、すっかりできあがっているようだ。カタリがものすごい剣けん幕まくでつめよっているのに、いまいち反応が鈍にぶい。

「とうてい自力で歩ける状態やない女の子を、三日間もさんざんいろんなとこ連れまわして、いったい何さらしとんのじゃダァホ！」

「……あー？」

　カタリに胸むな倉ぐらをつかまれたアドリアンは、酔すい眼がんをしばたたかせてマリアローズとユリカを交こう互ごに見た。

「何？　こいつ、なんで怒おこってんの？」

「なんでやないやろが！」

　カタリは叫さけびながらアドリアンの頰ほおを右の拳こぶしで殴なぐりつけた。

「アホダラァッ！　女の子っちゅうのはなあ！　基本的に、大事に大切に守ってやらなあかんモンなんや！　それがかわいーて病弱な女の子やったら無条件じゃボケェッ！　しかも、リュリュちゃんはお前じぶんの従妹いとこやろが！」

「……痛いてぇ……」

　壁かべと椅い子すの隙すき間まに崩くずれ落ちたアドリアンは、後頭部をさすりながらよろよろと立ちあがった。と思ったら、いきなり右のフックをカタリの腹に、左の鋭するどいアッパーカットを下した顎あごにクリーンヒットさせた。アホアホ魚野や郎ろうは呆あっ気けなくノックアウトされて床ゆかを舐なめた。

「餓が鬼きが。調子に乗るんじゃねぇぞ。これでも軍の拳けん闘とう大会じゃあ優勝、準優勝一回ずつだ。酔よってたって素す手での喧けん嘩かじゃあ負けたことがねえ。いや……あるか。あるな。考えてみたら、何回も負けてタコ殴りにされたっけな」

　アドリアンはカタリに殴られた左の頰を撫なでつつ椅子に座りなおすと、ひったくるように酒さか瓶びんを手にとってグラスにウイスキーをついだ。

　マリアローズはため息を十連続くらいでつきながら、アドリアンの足あし許もとでのびているカタリを引っぱりだして、ほっぺたをぶっ叩たたいたり名前を呼んだりして、それでも目を覚まさないのでユリカに介かい抱ほうしてもらうことにして、体勢を変えるのを手伝って──てゆうか、何やってんだろ、僕。そもそも今日は、修しゅ行ぎようのために三人でアンダーグラウンドにもぐるんだ、みたいな話だったよね。カタリの発案で。その時点で気乗りしなかったんだけどさ。トマトクンとかピンパーネルならともかく、なんでカ

タリなんだよ。まあ、ユリカがつきあってくれるっていうから、断るのも悪いと思って、しょうがなくうなずいちゃったわけだけど。僕としては、何人だろうとどこに行こうと、儲もうかりさえすればそれでいいわけだし。儲からなかったけどね。なんか知らないけど、人助けみたいなことをしなきゃならなくなってさ。あげくの果てにこれだよ。半魚人。ど腐くされ半魚。白目剝むいているよ。失神しちゃってるし。バカじゃないの。

　なんだかもうすべてが馬ば鹿か馬鹿しくなってきた。

　マリアローズはアドリアンの隣となりの席に荒あら々あらしく腰こしを下ろし、カウンターの向こうで半分彫ちよう像ぞうと化している老バーテンダーに力強くオーダーした。

「水！　……は無料タダだよね？」

　アドリアンはニヤニヤしながら酒瓶をマリアローズの前に突つきだしてきた。

「酒はやらねえのか、お嬢じようちゃ──」

「それ以上言ったらマジ殺すから」

「あ？」

　アドリアンは目をパチパチさせて、しげしげとマリアローズの顔を見つめた。

「……どういうことか、よくわからねえんだが」

「わからないからって許されると思ったら大おお間ま違ちがいだよ」

「まあ、殺されるのはごめんだからな。で、あんた、酒は飲やらねえのか」

「飲まない。飲みたいとか思わないし」

　マリアローズは老バーテンダーがえっちらおっちら運んできた氷水を一口飲んだ。

「ようするにさ、お酒って、飲んで酔っぱらって現実逃とう避ひし

たいわけでしょ。そんなの意味ないんじゃない。どうせ酔いが覚めたら、また向きあわなきゃいけないんだから。逃にげたって逃げきれるものじゃないよ。現実はそこにあるんだし」

「ふん……手厳しいな」

　アドリアンは低い笑い声を立てて、まだ完全には正気づいていないカタリの様子をちらりとうかがった。

「ちょっとやりすぎちまったか」

「大だい丈じよう夫ぶじゃないの。しぶといから」

「そうか。世話焼きでしぶといときたら、うざったくてかなわねえな」

「まあね。でも—」

　思わずカタリを擁よう護ごしそうになって、慌あわてて話題を変えた。

「あの子を……なんであの子を歩きまわらせたりしたの。わかってなかったわけじゃないんでしょ。あの子の身体からだの状態とか」

「外に出せ出せって、あいつがうるせえからさ」

「リュリュは、三日前に突とつ然ぜん、一人で寝ねてても暇ひまだろって、きみが言いだしたって」

「あ？」

　アドリアンは小首をかしげた。

「……そうだったっけな。よく覚えてねえよ。どうでもいいだろ、そんなことは。でも、あいつが外に出たがってたのは本当だ。もう長くねえからな。いろいろ見ときてえんだろ。死ぬまで黙だまって寝てろってのも酷こくな話だしな」

「痛みをこらえてこんな物ぶつ騒そうな街を歩くのだって、あの子には酷なんじゃないかな」

「知るかよ。俺が痛いわけじゃねえ」

　アドリアンはグラスの酒を飲み干して、横目でマリアローズを見た。

「あんたら、マジでクリスチャンを捜さがすつもりなのかよ」

「僕はともかく、少なくともカタリはそうするつもりなんじゃない」

「知ってんのか。初はつ恋こいの相手っていやあ聞こえはいいがな。近所のぼんぼんだ。普ふ通つうに家を継ついでりゃあいいのに、親に反発して家を飛びだした」

「もったいない話だね」

「同感だな。俺もそう思うね。つまり、だ。やつはただの阿あ呆ほうだ。リュリュとは幼おさな馴な染じみで、兄きよう妹だいみたいなかんじで……家出してからも何度か手紙をよこしたみたいだけどな。それだけさ。真ま面じ目めに捜したって、馬鹿を見るだけだ」

「僕がバカを見るわけじゃないし」

　マリアローズがカタリを一いち瞥べつして答えると、アドリアンは顔をゆがめて肩かたをすくめ、またグラスに酒をついだ。

「まったく……酒が高くてまいるな、この街は。やってられねぇ……」

5

　まったく、やってられねぇ。俺の人生。

　十何年か前に親が流行はやり病やまいで死んだときは、人間って逝いくときは呆あつ気けねえなとか、命ってのは儚はかないもんだとか、月並みなことを思っただけだった。さいわい、母方のバアさんがよくしてくれた。弟と一いつ緒しよに厄やつ介かいになったボンヌ・ソレーのバアさんの家には、小さくてかわいい従妹いとこのリュリュもいた。

一年後に俺は軍へ。弟のフィリップは、何ちゃらとかいう貿易商の家で丁でつ稚ち奉ぼう公こう。あいつとはそれ以来、二度しか会っていない。バアさんのところにも連れん絡らく一つよこさなかったらしい。薄はく情じようなやつだ。無む慈じ悲ひな弟と違って俺の場合、これでも人並みに情に飢うえていて、長期休きゆう暇かのたびにバアさんの家へ。リュリュとよく遊んでやったっけ。

ところが俺は軍人だった。いきなり中央から東南国境地帯への異動。ボンヌ・ソレーは遥はるか遠く。最初はバアさんに手紙を書いていたが、途と中ちゆうでやめた。もともとすこぶる仲が悪いオークリッド首長国との雲行きがあやしくなって戦争。戦争。また戦争。血みどろの戦争。俺は活かつ躍やくした。俺は戦争がうまかった。めちゃくちゃ軍功を立てた。軍学校出でもないってのに、下等兵からあれよあれよという間に少しよう尉い様だ。やがて俺は中央に呼び戻もどされて中尉になり、剽ひよう悍かんをもってなる猩ポイタンセ木チア旅団の第十四猟りよう騎き兵へい中隊長に。

俺は有う頂ちよう天てんだった。俺は女にもてた。遊んだ。いい女。いい酒。遊びまくって、飽あきて、とうとう狙ねらいを一人にしぼった。純情そうな、素す直なおそうな、清せい楚そな、美人だった。俺に気があるみたいだった。ちょっと高価な首くび飾かざりでもやれば、簡単に落とせそうなかんじだった。

大間違いだった。

ソフィー・デロア。気をもたせておいて、何をやったって振ふり向きそうで振り向かない。貢みつがせて貢がせて、最後の最後に亭てい主しゆが出てくる。亭主だ。そう。ソフィーは有名な美人局つつもたせの共犯者だった。同どう僚りようの中にはそのことを知っているやつもいた。わざと黙ってやがった。浮うかれていい気になってる俺を嘲あざ笑わらって。

俺はまんまと引っかかった。残ったのは借金と汚お名めいだけ。俺は見世物だった。そりゃあ傷ついた。誰も彼もが俺の背中を指さして笑ってるような気がした。俺は恥はずかしかった。生きてるのが嫌いやだった。死のうと思った。でも、死ぬより酒に溺おぼれて淫いん売ばいを抱だいて博ばく打ちですって喧けん嘩かして借金にまみれてパッパラパーになってるほうが楽だった。

いや、楽でもなかった。

屈くつ辱じよく的な中尉から軍ぐん曹そうへの降格処分。それだけなら、なけなしのプライドが傷つくだけですんだが、その次に待っていたのはラフレシア第三帝てい国こく軍ぐん法百六十九条通つう称しよう「品行方正則」抵てい触しよくによる不ふ名めい誉よ除隊。品行方正則ってのはつまり、ラフレシア軍人の名を汚けがさぬように皆みなさんお行ぎよう儀ぎよくいたしましょう、というお題目みたいなものだ。そいつを持ちだしての除隊処分なんて聞いたことがない。

雑草育ちの若き士官として、大勢の上司を期待させておいて、ぜんぶきれいに裏切ったのがまずかったのか。中将の長男の愛人と寝たのもやばかったのかもしれない。酔よっぱらって宿舎の門に大人げない落書きをしまくったのが響ひびいたのかも。

どっちにせよ、俺は職を失い、食い扶ぶ持ちをなくして路頭に迷った。迷ってる間もなく、借金取りに追われる身になった。

そうして、逃にげて、逃げて、たどりついたボンヌ・ソレー。

こんな俺にも手をさしのべてくれるはずだった善人の鑑かがみみたいなバアさんは、だが、もうくたばっていて、この世にいなかった。

「……ホント、やってられねえよ……」

寝しん台だいの上でリュリュが眠ねむっている。夜だ。明かりはつけていない。月明かりに青白く照らされたリュリュは、起きられなくなってからもう三日目で、いいかげん苦しむのにも飽きたのか、今は穏おだやかな寝ね顔がおを見せている。

この三日間は、マリアローズにカタリ、ユリカだったか、あの三人がまだクリスチャンを捜さがしているらしく、ちょくちょくこの貸し宿にも顔を出して、リュリュの様子を見にきた。ユリカという医術士が持ってきた薬も、何度かリュリュに飲ませた。

ただ、おそらく、そろそろだろう。

昨日の夜あたりからだ。

リュリュはほとんど寝ている。たまに目が覚めても、たいてい意識が混こん濁だくしていた。

枕まくら元もとにはクリスチャンからの手紙が三通重ねて置いてある。昨夜ゆうべ、リュリュが読んで聞かせろと言うので、しょうがないから読んでやった。一通目は黙だまって聞いていた。二通目の途中だった。リュリュがいきなり、おばあちゃんごめんなさい、だとか、お父さん、だとか、お母さん、だとか、うわごとを言いだした。それでいて、こりゃあダメだと思って読むのをやめると、やめないで、やめちゃだめ、おねがい、読んで、おばあちゃん。おにいちゃん。もうちゃんと聞こえてもいねえくせに、俺が誰だかもわかってねえくせに、やってられねぇ。

手紙の内容も退たい屈くつだった。時節の挨あい拶さつからはじまって、近きん況きようを書き綴つづったあとに、そっちの様子はどうだとか、何だとか。

ようするに、自分でほっぽりだした親だの家だののことが気になるが、家出した手前、連絡はとれない。そこで、バアさんが昔、クリスチャンの家の女中だった関係で親交があった近所のリュリュに、何か教えて欲しくて手紙を出したわけだ。リュリュは律りち儀ぎに返事を書いたようだが、よく見るとクリスチャンの手紙は三通すべて差し出し元が違ちがう。エルデン第何区どこの何とか宿。そんな宛あて先さきで、果たしてリュリュの手紙は届いたのか。実際、一通目、二通目、三通目と目を通しても、リュリュの返事を引用したような箇か所しよは見あたらなかった。すれ違い。最初からたいして交わってもいなかったのだから、当然だが。

「はー……」

アドリアンは深く息を吐はいて持っていた酒さか瓶びんに直接口をつけ、ウイスキーを呷あおった。この部屋には寝台が二つ並んでいるが、リュリュの隣となりで寝る気にはなれない。おかげで今、腰こしかけている寝台はすっかりソファがわりだ。眠くなったら、一階の食堂の隅すみで毛布にくるまって横になる。東南国境地帯で、昼も夜もなく百二十日間戦いつづけた経験が、どれだけ酒をかっくらってもめったに熟じゆく睡すいできないアドリアンの体質を作った。今にして思えば、あのころから何かおかしかった。気分が異常にハイで、俺は無敵で、何でもできて、それなのに、そのはずなのに、常に何かを恐おそれていた。

俺は壊こわれている。戦場で壊されて、こうなっちまった。俺のせいじゃない。俺は悪くなんかない。もちろん、リュリュだって悪くない。悪くなくたって、こんな目に遭あう。

　世の中なんてそんなものだ。

「しょうがねえさ、なあ、リュリュ……」

　アドリアンは身体からだをのばして、左手でリュリュの頬ほおにふれようとした。

　驚おどろいた。

　リュリュがいきなり薄うす目めを開けて、アドリアンの左手の人差し指を握にぎったのだ。

　そういえば、昔、子供というよりまだ赤ん坊ぼうに近かったリュリュが、こうしてアドリアンの指を小さな手で握った。意外なほど強い力で、しがみつくみたいに。それがやけにかわいかった。あのときと似ていた。

「……おにい……ちゃん……」

　リュリュはやっとというかんじでアドリアンを呼んだ。年の差からいえば、もう少しで親子でもギリギリ通用しそうなリュリュにそう呼ばれると、いつもなんだかこそばゆい。

「ああ」

「……行かないで」

「べつにどこにも行かねえよ」

「……ほんと……？」

「ああ。だいたい、もうすぐ行っちまうのは俺じゃなくてお前だろ」

「……そうだね」

「悪わりぃな。言葉飾かざるの、得意じゃねえんだ」

「……いいよ。おにいちゃんがほんとはやさしいの、わたし……知ってるもん……」



「やさしくなんかねえよ」

「……ね」

　リュリュは何度かつらそうに大きく呼吸をした。

　指に力がこもった。

「わたし……クリスに会えるかな……？」

「さあな」

　アドリアンが目をそらして答えると、リュリュはそっと微笑ほほえんだ。

　笑っているのに、目め尻じりに涙なみだが浮うかんでいた。

「……ごめんね……」

　アドリアンは返事をしなかった。ただ、右手で酒を飲みながら、左手はそのまま動かさなかった。たいした量は飲んでいないはずなのに、なぜだか今日はいつもより酔よいが回りそうな予感がした。そのとおりになった。

6

　クリスチャン・ベル・ペロー。

　ラフレシア第三帝てい国こくボンヌ・ソレー出身。

　織物を取り扱あつかう商家ベル・ペロー家の長男だが、出しゅつ奔ぽん。

　その後、サンランドに入国し、エルデンで侵クラ入ツ者カーに。剣けんはうまくなかったが、幼少時から道楽の狩しゅ猟りようで鍛きたえた弓の腕うではなかなかのもので、度胸もよかったという。

　また、育ちのよさのせいか人好きのする性格で、他人を信じやすく、容姿にも恵めぐまれていて、仲間に誘さそわれてクァラナド歓かん楽らく街に行くと女にもてた。しかし、変に潔けつ癖ぺきなところがあり、商売女と寝ねることもなく、女に迫せまられると故く郷にに許嫁いいなずけがいるなどと言い訳して逃にげるのが常だった。その話の真しん偽ぎについて仲間に問われると、クリスチャンは次のように答えた。

「いや、本当はそんな間あいだ柄がらじゃないんです。妹みたいなもので。でも、郷く里にの人間でもう一度会いたいって思うのは、あの子くらいかな……」

　クリスチャンについてカタリに語って聞かせたのは、稀少物レア・蒐集家ハンターの侵クラ入ツ者カー、ロドリゴ・ファルコーネ氏（37）だった。昨夜、手がかりを求めて稀少物レア・蒐集家ハンターの会合に出席したカタリがクリスチャンの話題を持ちだしたところ、ファルコーネが手を挙げたのだという。

　ファルコーネはとあるクランの会長マスターで、何を隠かくそうクリスチャンはそのメンバーだったらしい。そのクランとは、鉄のアイアン心臓ハーツソ協会サエテイ。活動目的は、とにかくアンダーグラウンドにバリバリもぐって稀少レア物をゲットして大おお儲もうけしてウハウハすること。まあ、男らしいといえば男らしいクランだが、それだけにメンバーの死傷率も高い。

　八巡じゅん月げつ前まえのことだ。

　クリスチャン・ベル・ペローは、D11フリアウ逆密林で滑かつ落らくして行方ゆくえ不明になった。

　九割九分九く厘りん死亡したものと思われる。

「……めちゃめちゃ気ぃ重いねんけど」

　カタリが貸し宿の階段で足を止めてため息をついた。朝、第二王立銀行の動物園事務所で顔をあわせてから、これで何度目のため息だろう。マリアローズだって同じ気持ちだけれど、ここまできてノロノロしたってどうしようもない。

「とにかく、早く行こ。正直に話すかどうかは、アドリアンに相談してから決めたっていいんだし」

「ケッ。あんな男に相談したかてムダやろ」

「だけど、僕らと違ちがって赤の他人じゃないわけでしょ」

「赤の他人やなかったら、なんでもっとこう、親身になってやらんのや！　あー、わしやったら、むっちゃやさしくしたったるのに！」

「……会ったばかりの子に、よくそこまで感情移入できるね」

　お人ひと好よしっていうか、お半魚好しっていうか。

　まあ、ＺＯＯの場合、それはカタリにかぎった話ではないのだが。

「でも」

　ユリカが可か憐れんな眉まゆをくもらせた。

「昨日の状態を考えると、もし普ふ通ちゆうに話ができたとしても、あまりショックを与あたえないほうがいいかもしれないわね」

「うん……」

　そうはいっても、クリスチャンの消息をつかんだのに、何もしないというわけにもゆかない。マリアローズたちはカタリを押しあげるような恰かつ好こうで階段を上って、リュリュたちの部屋へと向かった。奥の二○六号室だ。でも、妙みようだ。ドアが半開きになっている。マリアローズはカタリ、ユリカと目配せをして、足音を忍しのばせた。マリアローズとユリカがドアの脇わきにぴったりとつき、一、二の三。カタリがドアを開けて、すぐさま突とつ入にゆうした部屋の中では、リュリュが寝ていた寝しん台だいに突つっ伏ぷすような体勢で、アドリアンが鼾いびきをかいていた。

「……え？　あの子は……？」

　いない。どういうことだろう。マリアローズも、カタリも、ユリカも、むしろきょとんとしていた。間もなくカタリが血相を変えてアドリアンに飛びかかってゆき、ひっつかんで、引きずり起こして、くっつきそうなくらい顔を近づけて怒ど鳴なった。

「おい、起きい！　どないやねん！　どないなっとるん！　なんでリュリュちゃんがおらへんのや、おお！　答えぇ……！」

「……あ？」

　アドリアンは寝ぼけ眼まなこでカタリを見て、足あし許もとの酒さか瓶びんに目を落とし、無人の寝台に視線を向けた。そのあとは起きがけとはとうてい思えない、現げん役えきの軍人みたいに俊しゆん敏びんな動作だった。

「どけ！」

　アドリアンはカタリを突き飛ばして、部屋の隅に立てかけてあった騎兵剣サーベルを腰こしに提さげると、あっという間にドアから出ていった。

「──なんや、あれ……」

　カタリが呆ほうけるのも無理はないけれど、アドリアンが廊ろう下かを走ってゆく音、階段を駆かけおりてゆく音を黙だまって聞いているだけでいいのだろうか。リュリュのことを人一倍気にかけていたのは、他ほかの誰でもない、カタリなのに。

「僕らも追いかけたほうがいいんじゃないの」

「うおっ！　せ、せやな、早はようリュリュちゃんを捜さがしてやらな！」

「あの身体からだで……一人で出て行ったのかしら。しょうだとしたら、しょんなに遠くには行けないと思うけど」

「ほんなら、この近くを手分けして捜したったらすぐ見つかるやろ！　よっしゃ、行くで、ユリカ、マリアローズ……！」

　でも、言うほど簡単じゃない。リュリュたちの貸し宿がある第四区は、大小新旧さまざまな建物がごった煮状態で建ち並んでいて、区画も道もぐちゃぐちゃだ。貸し宿、あやしげな商店、空き家、猫ねこの額みたいな空き地、それらが複雑に入り組んでいて、エルデン市民でも慣れていないと迷う。しかも、目的地があるわけでもないから、気がつくと同じ場所をぐるぐる回っている。方向感覚や距きょ離り感覚にわりと自信があるマリアローズでさえそうなのだ。いったん分かれて途と中ちゆうで合流したユリカは目を回していたし、その近くで発見したアドリアンは地面に座りこんでふてくされたように煙草たばこを吸っていた。カタリだけは土と地ち鑑かんがあるようで、近きん隣りんの小道の一つ一つまで確かく認にんしたらしいが、リュリュの姿は見あたらなかった模様だ。

「変やな。何人か通行人とっつかまえて訊きいてみたりもしたんやけど、誰も見かけとらんみたいやし──」

　カタリは一度、宿に戻もどることを提案した。そうしてみたが、やはりリュリュは帰ってきていなかった。宿のどこを捜してもいな

かったし、食堂兼けん酒場の老バーテンダーやキッチンのインチキ料理人やフロントのくたびれ中年も皆みな、一様に首を横に振ふって知らないと答えた。

「もう少しゆこし捜しやがしゅ範はん囲いを広げてみましょうか」

「そうだね。地道に捜すしかなさそうだし」

「ふぅーむ……」

　そんなふうにマリアローズたちが話しあっている間も、アドリアンは無言、無表情で煙草を吸いつづけていた。なんだかぜんぜん積極的じゃないし、真しん剣けん味みも感じられない。さすがにマリアローズもむかっときたが、文句を言ったところで、リュリュが見つかるわけでもないだろう。カタリほど気持ちが入っているわけではないけれど、いくらなんでもこのまま放ほうってはおけない。やっぱりかわいそうだし、捜してやらないと。そして──そして、それから、どうするんだろう……？

　ごちゃごちゃ考えるより、身体を動かしていたほうが楽だ。マリアローズはユリカと一いつ緒しよに、カタリは猛もう烈れつに駆けずりまわって、アドリアンはやる気があるのかないのかダラダラと、少しずつ貸し宿から離はなれながらリュリュを捜そう索さくした。何度か集まって互たがいの成果を報告しあい、次はこっちとか、あっちとか、そっちはまだだとか。

　暑い夏の日中だった。

　肌はだを隠かくすことに慣れているマリアローズも、さすがに外がい套とうは脱ぬいで丸めて背負い袋ぶくろの中につめた。汗あせが止まらなかった。喉のどが渇かわいて、屋台で飲み物を調達したりして、疲つかれて、さっぱり見つからなくて、いいかげん嫌いや気けが差してきて、リュリュなんて本当はいなかったんじゃないかとか、ぜんぶ幻まぼろしだったんじゃないかとか、おかしなことを考えたりもした。そのうち日が傾かたむいてくると、こんなことに時間を費ついやすなんて、とんだ無む駄だだとも思った。ユリカがすこぶる真剣で、まったく手を抜ぬこうとしないものだから、不平不満や愚ぐ痴ちのたぐいは胸の中にしまっておいたが。

　でも、すでに十八時をすぎた。夕方からそろそろ夜に片足を踏ふみ入れる時間帯だ。このあたりは第四区ですらない。すでに第五区

で、トワイライト・ドレッドスターズ・ストリートの向こうは鉄てつ鎖さの憩いこい場だ。人通りも多い。

「……どうしよっか」

　マリアローズはそう呟つぶやきながら、もう通りを渡わたろうとしていた。ユリカもついてくる。さすがに疲れたのか、さっきから無言だ。鉄鎖の憩い場に行ってどうしようというあてがあるわけではないけれど、他に行くべき場所も思いつかない。それどころか、正直、これ以上は何もしたくない。

　マリアローズたちは第四区よりもさらに混こん沌とんとしている市場をさけて公園へと足をのばし、ちょうどあいていたベンチに腰かけようとした。結果的には座らなかった。

　見つけてしまったからだ。

　彼女は公園の芝生しばふに植えられた立派な巨きょ木ぼくの根もとで、膝ひざを抱かかえるようにして背中を丸め、横向きになって寝ねていた。本当にただ眠ねむっているかのようだった。目をつぶっていた。口くち許もとはわずかにほころんでいた。微笑ほほえんでいるようにさえ見えた。

　白い服。包帯。ブルネットの波打った長い髪かみ。透すけるような肌。間ま違ちがいない。

　リュリュだ。

「ユリカ……！」

　マリアローズはユリカの手を引っぱってリュリュに駆けよった。ユリカはリュリュの首筋をさわって、すぐに首を横に振った。それがどういうことか、とっさにはわからなかった。マリアローズは意味もなくあたりを見まわした。こっちに視線を投げかけている通りがかりもいくらかいるけれど、まったく興味を示していない者のほうが圧あつ倒とう的に多い。さして面おも白しろい見世物ではないというわけだ。エルデン。ここはそういう街だ。もしかしたら、リュリュに何かしようとした不届き者もいたかもしれない。でも、彼女は拒こばむこともない代わりに、少しの手て応ごたえもなかっただろう。

「──ダメだわ……もう……」

　それでも胸に手をあてたり瞳どう孔こうを確かめたり、いろいろやっていたユリカが、うなだれてまた首を振った。今度はマリアローズもはっきりと理解せざるをえなかった。理解はしたものの、どうすればいいかわからなかった。

　だから、カタリがバタバタと、その後ろからアドリアンが大おお股またでゆったりと走ってくる姿を見て、助かった、と思った。あとは彼らに任せればいい。何かを感じるのも、その感情を表現するのも、僕には微び妙みようで難しすぎる。僕にとってリュリュの存在はあまりにも曖あい昧まいで、哀あわれむべきなのか、悲しむべきか、判断がつかない。

　そのあたりがいっそ羨うらやましいほど単純明快なカタリは、リュリュのそばで四つん這ばいになって、さっそく肩かたを震ふるわせはじめた。

「……嘘うそやろ。ほんまかいな。そんなんあるかい。あってたまるかいな。なんでこないな場所で、一人っきりで……」

「捜さがしにきたんだろ」

　アドリアンは芝生に腰こしを下ろして片膝を立て、呼吸を整えながら煙草たばこに火をつけた。

「この鉄鎖の憩い場ってのは、なんでもエルデンじゅうの人間が集まる場所らしいじゃねぇか。一回か……二回かな。一緒にきたからな」

「──お前じぶん……」

　カタリはアドリアンをにらみつけて声を荒あららげかけたが、うつむいて顔をゆがめた。

「何も、何もできへんかった。何かしてやれんかったんかな……何か、あったんやないんか。何か。何か。何か！　わしは……！」

「おい」

　アドリアンが煙草をくわえたまま立ちあがった。

　いきなりだった。アドリアンはカタリの脇わき腹ばらを横から蹴け飛とばした。これにはマリアローズも意表をつかれた。ユリカも

ぽかんとしていた。蹴られてひっくり返ったカタリさえ、痛みや怒いかりよりとにかく度ど肝ぎもを抜かれた様子だった。

　アドリアンはまだ呆ぼう然ぜんとしているカタリの胸むなぐらをつかんで持ちあげた。

「てめぇ、何泣いてんだよ」

「──な、泣いて……泣いて悪いんか」

「なんで泣くんだ。どこに泣く必要がある」

　アドリアンはなぜか薄うす笑わらいを浮うかべていた。でも、可お笑かしくて笑っているんじゃない。それだけはマリアローズにもわかった。

「泣くなよ。これ見よがしに、人前でよ。クソうぜぇ。てめぇの涙なみだに何か価値でもあると思ってやがるのか」

「そ、そんなん……わしはただ、リュリュちゃんが不ふ憫びんで……」

「不憫？」

「せ、せや。だって、かわいそうやないか」

「あー？　かわいそう？　こいつがかわいそうだ？　てめぇ、ふざけんのは顔だけにしろよ。いいか。物を知らねえようだから教えてやる。かわいそうってのはな」

　アドリアンは唾つばを吐はくように煙草を捨てて足で踏ふみ消し、消えかけていた笑えみを頰ほおに刻みなおして声を低めた。

「……かわいそうってのは、俺みたいに薄うす汚よごれた過去しか背負ってねえ、最悪で、最低で、夢も希望も未来もねえ、ろくでなしのための言葉だ。こいつは違う。かわいそうなんかじゃねえ。少しもだ。こいつは今まで精せい一いつ杯ぱい生きてきたし、最後にもう生きてもいねえ好きな男を捜しにこんな街まできて、くたばるまでちゃんと生きたんだ。ただ死ぬのがちょっとばかり早かっただけだ。こいつのどこがかわいそうなんだ」

　カタリは何も言い返さなかった。言い返せなかったのだろう。

　アドリアンは疲つかれ果てたようにため息をついて、カタリを突つき放した。新しい煙草をとりだしてくわえたが、火をつけるかつけまいか迷っているようだ。しばらく考えこんで、結局、つけないことにしたらしい。

　そうしてアドリアンは、そっと、やさしく、でも、少しこわごわと、この世で一番大切な人を抱だくように、壊こわしてしまわぬように、つつみこむようにリュリュを抱いて、持ちあげると、マリアローズたちに背中を向けた。

「きみは」

　返事を期待したわけではない。だったら黙だまって見送ればいいのに、なぜだか言わずにはいられなかった。

「知ってたんだね。クリスチャンって人がもう死んじゃってたこと」

　アドリアンは一いつ瞬しゆんだけ足を止めた。

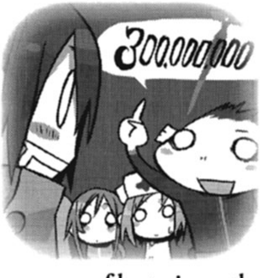
　振ふり向きはしなかった。

「さあな」

　小さくそう呟つぶやいただけで、アドリアンは行ってしまった。

　マリアローズはユリカと一いつ緒しよにカタリを助け起こしながら、リュリュが眠ねむるように死んでいた巨きよ木ぼくの根もとに目をやった。数日前に出会ったばかりで、彼女のことはほとんど知らないに等しい。彼女がどんな思いでそのときを迎むかえたのか知るよしもない。ただ、彼女の死に顔は安らかだった。微笑ほほえみさえ浮かべていた。それだけはまぎれもない事実だった。

『薔薇のマリア Ver4 hysteric youth』了



memory of hysteric youth

あとがき

「簡単に言ってくれるぜ」

　僕はそう呟つぶやきながらキーボードを叩たたいている。僕の頭の中を駆かけめぐっているのは担当Ｋ氏の言葉だ。「今回は、本編の内容がポップなので、あとがきも明るい感じがいいかなと」だって？　本当に。本当に、簡単に言ってくれるぜ。明るい感じ。それがどれだけ僕にとって難しいことか。原げん稿こうの上でならば、自分以外の誰だれかが楽しげに語らったり笑いあったり抱ほう腹ふく絶ぜつ倒とうしたりしている場面ならば、思いつかないこともない。だが、これが自分のことになるとてんでダメだ。僕だって考えてみたのだ。ここ最近、何かこう、腹を抱かかえて大笑いしたような出来事があっただろうか。べつに最近でなくてもいい。半年。一年。数年。ない。何もない。僕はつまらない人間だ。近しい人には、おもしろみがないやつだ、とよく言われる。かわいげがない、とも言われる。僕は納なっ得とくしている。そのとおりだと思う。僕がよくあとがきで嘘うそを並べるのはそのせいだ。僕は嘘でしか、絵空事でしか、滑こっ稽けいを表現することができないのだ。僕は生き真ま面じ目めなのだ。馬ば鹿か正直だ。約束は決して破らない。締しめ切きりも必ず守る。僕は杓しゃく子し定じょう規ぎだ。頭が固い。コンクリートのように硬かたい。あれ？　字が違ちがう。いいや。とにかく、僕は頑がん固こだ。頑がん迷めい固こ陋ろうで古くさい。もはや時代がかっていて、この頃はちょんまげを結ゆっている。

　僕は幼い頃ころ、剣けん士しになろうと志し、木刀を握にぎりしめて毎朝素す振ぶりしていた。美しい字を書きたくて習字教室にも通ったが、やがて挫ざ折せつした。面めん倒どうになったのだ。僕はやさぐれて近所の田んぼにミステリーサークルを描かこうとしたが、まだ水が張られていたため、膝ひざまで泥どろだらけになり、あほらしくなってやめた。初はつ恋こいの相手が土ど豪ごうの馬鹿息むす子ことつきあいだして、僕は悲しみのあまり夜が明けるまで水すい彩さい画がを描いた。絵の才能はないと思い知らされ、ロックバンドを結成したが、ギタリストはバドミントン部のエースでベーシストは平家の落ち武者でドラマーは時代遅おくれのヒッピー

だった。あげくの果てに、ヴォーカリストの僕は遅おそめの声変わりの最中で「かえるの合唱」も歌えない有様だった。僕は泣く泣くバンドを解散して基き礎そ的なプログラム言語を学び、スーパーハッカーになろうとしたが、やがて挫折した。面倒になったのだ。僕は人材派は遣けん会社に登録して糊こ口こうをしのいだ。僕にもっとも向いていたのは、信号機が故障したときのために手旗を持ってスクランブル交差点のそばに待機する仕事だった。この国の信号機は立派で、まず壊こわれたりしないから、何もしなくていいのだ。唯ゆい一いつの問題は暇ひますぎることだった。退たい屈くつをまぎらすべく小説を書いた。そうして今に至る。まったく、簡単に言ってくれるぜ。

　というわけで、僕なりに精せい一いつ杯ぱい楽しい話をしようとしたのですが、見事に失敗してしまいました。ごめんなさい。紙数が尽つきたので、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、極大のお詫わびと感謝と愛をこめつつ、筆を置きます。またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア Ver4

hystericヒステリツク youthユース

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア Ver4　hysteric youth』平成20年10月1日初版発行

平成21年2月15日再版発行

BOOK☆WALKER